

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第617集

こ の こ の な かが み よ っ か い ち
小野遺跡・小野Ⅱ遺跡・中神四日市遺跡
発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業日形地区関連遺跡発掘調査

2012

岩手県県南広域振興局農政部一関農村整備センター
(公財)岩手県文化振興事業団

小野遺跡・小野Ⅱ遺跡・中神四日市遺跡 発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業日形地区関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史を生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは、県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターでは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業日形地区に関連して、平成23年度に発掘調査された小野遺跡・小野Ⅱ遺跡・中神四日市遺跡の調査成果をまとめたものです。

今回の調査では、古代の竪穴住居跡や水田跡などのほか、各種の遺構が多数検出され、当地の過去の様相が明らかになるとともに、多くの土器や石器も出土しました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県県南広域振興局農政部一関農村整備センター、一関市教育委員会をはじめとする関係各位に深く感謝の意を表します。

平成24年12月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 池田克典

例 言

- 1 本報告書は、岩手県一関市花泉町日形字小野46-1ほかに所在する小野遺跡と同花泉町日形字共和37-1ほかに所在する小野Ⅱ遺跡及び同花泉町日形字中神293ほかに所在する中神四日市遺跡の調査成果を収録したものである。なお、本調査の費用負担は、岩手県教育委員会が岩手県県南広域振興局農政部一関農村整備センターに農家負担分を補助している。
- 2 岩手県遺跡登録台帳番号と遺跡略号は以下のとおりである。
小 野 遺 跡：遺跡番号…OE39-1017、遺跡略号…KN-11
小 野 Ⅱ 遺 跡：遺跡番号…OE39-0081、遺跡略号…KNⅡ-11
中神四日市遺跡：遺跡番号…OE29-2146、遺跡略号…NGY-11
- 3 発掘調査期間・調査面積・調査担当者は以下のとおりである。
小 野 遺 跡：平成23年4月18日～6月10日／1,880㎡／小山内透・小林弘卓・菅野梢
小 野 Ⅱ 遺 跡：平成23年4月18日～5月19日／104㎡／菅野梢
中神四日市遺跡：平成23年4月18日～4月28日／140㎡／小林弘卓
- 4 室内整理期間及び整理担当者は以下のとおりである。
小 野 遺 跡：平成23年11月1日～平成23年3月31日／小山内透・小林弘卓・菅野梢
小 野 Ⅱ 遺 跡：平成23年12月16日～平成24年1月31日／菅野梢
中神四日市遺跡：平成23年12月1日～12月15日／小林弘卓
- 5 報告書の執筆は、Ⅰは委託者、Ⅱ・Ⅲ-2(1)は小林、Ⅲの残りを小山内が執筆し、各遺跡については整理担当者が各々主となって分担した。編集と構成は担当者の合議で行った。
- 6 分析・鑑定・委託業務は次の方々に依頼した。(順不同・敬称略)
プラントオパール：古代の森研究舎 火山灰分析：柴正敏(弘前大学)
炭化材同定：阿部利吉(岩手県木炭協会) 石質鑑定：花崗岩研究会
- 7 土層色調観察には、農林省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版準土色帖」を、地図は国土交通省国土地理院発行の50,000分の1(志津川・若柳・千厩)を使用した。
- 8 各遺跡の発掘調査による成果は、現地公開および『平成23年度発掘調査報告書』で公表してきたが、本書を正式な報告とする。
- 9 今回の発掘調査による出土品及び記録資料は岩手県埋蔵文化財センターに保管している。

凡 例

- 1 本報告書掲載の遺構実測図に付した方位は、国家座標第X系(世界測地系)による座標北を示す。
- 2 遺構・遺物の種別を表す略号は以下のとおりである。
SⅠ…竪穴住居跡 SⅡ…竪穴状遺構 SA…柱穴列 SK…土坑
RP…土器 S…石・礫 RC…炭化物
- 3 遺構名は検出順の連番としたが、精査過程や整理段階で以下のとおり変更したものもある。

新遺構名	SⅠ01	SⅡ01	SⅡ02	SⅡ03	SA01
旧遺構名	SⅠ02	SⅠ01	SⅠ03	SN01・D1・P1・P2	B区P1～4

目 次

I	調査に至る経過	1
II	立地と環境	
1	地理的環境	1
2	歴史的環境	3
III	野外調査・室内整理の方法	
1	調査と整理の経過	5
2	調査方法	6
(1)	グリッドの設定	6
(2)	粗掘と精査	6
(3)	遺構の記録	6
3	整理方法	7
(1)	遺構図面の整理	7
(2)	遺物の整理	7
(3)	写真の整理	7
IV	小野遺跡・小野Ⅱ遺跡	
1	遺跡の概観	9
2	調査の概要	9
3	検出された遺構	11
(1)	小野遺跡	11
a	竪穴住居跡・竪穴状遺構	11
b	土坑類	20
c	柱穴列	22
(2)	小野Ⅱ遺跡	22
4	出土遺物	25
5	まとめ	36
6	自然科学分析	37
(1)	花粉分析と植物珪酸体分析	37
(2)	火山灰同定	43
V	中神四日市遺跡	
1	遺跡の概観	45
2	調査の概要	45
3	検出された遺構と出土遺物	45
4	まとめ	48
	報告書抄録	63

図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第2図 周辺遺跡分布図	4
＜小野遺跡・小野Ⅱ遺跡＞			
第3図 調査範囲とグリッド配置図	8	第14図 S I 01出土遺物(1)	27
第4図 小野遺跡遺構配置図	10	第15図 S I 01出土遺物(2)	28
第5図 S I 01竪穴住居跡(1)	13	第16図 S K I 01出土遺物(1)	29
第6図 S I 01竪穴住居跡(2)	14	第17図 S K I 01出土遺物(2)	30
第7図 S K I 01竪穴状遺構(1)	16	第18図 S K I 01出土遺物(3)	31
第8図 S K I 01竪穴状遺構(2)	17	第19図 S K I 01(4)・03、 S K 01～04、1号水田跡出土遺物	32
第9図 S K I 02竪穴状遺構	18	第20図 遺構外出土遺物(1)	33
第10図 S K I 03竪穴状遺構	19	第21図 遺構外出土遺物(2)	34
第11図 S K 01～04土坑、S A 01柱穴列	21	第22図 土器分類図	35
第12図 小野Ⅱ遺跡遺構配置図	23		
第13図 1・2号水田跡	24		
＜中神四日市遺跡＞			
第23図 調査範囲とグリッド配置図	46	第24図 遺構配置図、S K 01土坑、出土遺物	47

写真図版目次

写真図版1 小野遺跡全景、A区南部近景	51	写真図版7 出土遺物(1)	57
写真図版2 S I 01竪穴住居跡	52	写真図版8 出土遺物(2)	58
写真図版3 S K I 01竪穴状遺構(1)	53	写真図版9 出土遺物(3)	59
写真図版4 S K I 01(2)・02・03竪穴状遺構	54	写真図版10 出土遺物(4)	60
写真図版5 S K 01～04土坑、S A 01柱穴列	55	写真図版11 出土遺物(5)	61
写真図版6 小野Ⅱ遺跡全景、1・2号水田跡	56	写真図版12 中神四日市遺跡	62

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	4	第7表 S K I 01出土遺物観察表③	30
第2表 S A 01柱穴一覧表	21	第8表 S K I 01④・03、 S K 01、1号水田跡出土遺物観察表	31
第3表 S I 01出土遺物観察表①	26	第9表 遺構外出土遺物観察表①	32
第4表 S I 01出土遺物観察表②	27	第10表 遺構外出土遺物観察表②	33
第5表 S K I 01出土遺物観察表①	28	第11表 柱穴状土坑一覧表	47
第6表 S K I 01出土遺物観察表②	29		

I 調査に至る経過

小野遺跡、小野Ⅱ遺跡、中神四日市遺跡は、「経営体育成基盤整備事業日形地区」のほ場整備工事により、遺構面を掘削することから、記録保存による発掘調査を実施することとなったものである。

本地区は一関市花泉町中心部より東部に位置し、現状は小区画・不整形な水田で、かつ幅員狭小な農道となっていることから、作業効率が悪く、また用排水兼用の土側溝水路のため、用水不足や排水不良となっており、維持管理に支障を来しているところである。

このため、本事業において、大区画ほ場整備を実施することにより、農作業の効率化、生産コストの低減、生産性の向上等を図り、農地集積による安定した経営体および担い手農家の育成を目的として、事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局農政部一関農村整備センターから平成22年9月7日付け一農整セ第375号「埋蔵文化財試掘調査について(依頼)」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

岩手県教育委員会は、平成22年10月14日から19日にかけて試掘調査を実施し、平成22年10月27日付け教生第913号「埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」にて、工事に着手するには当該遺跡の発掘調査が必要となる旨の回答がなされた。

この回答を受け、当農村整備センターは平成22年11月29日付け一農整セ第526号「埋蔵文化財試掘調査にかかる工法協議について」により盛土工法による保存箇所と、発掘調査による記録保存箇所について協議を行った。

その結果を踏まえ当農村整備センターは、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成23年4月6日付けで公益財団法人岩手県文化財振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(岩手県県南広域振興局農政部一関農村整備センター)

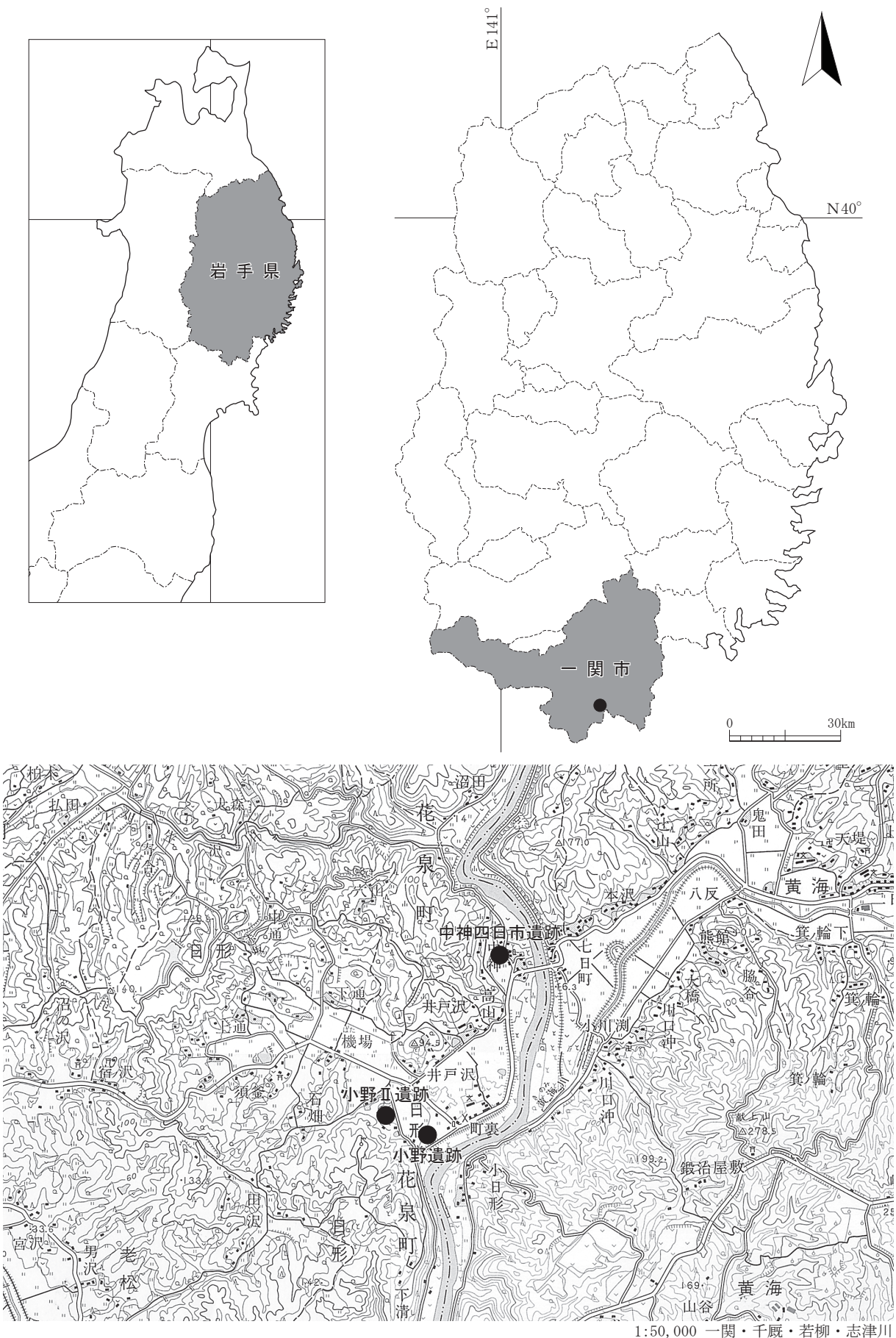
II 立地と環境

1 地理的環境

小野遺跡・小野Ⅱ遺跡・中神四日市遺跡は、一関市花泉町日形地区に所在する。一関市は、岩手県の最南端に位置し、南側は宮城県、西側は秋田県と接する。現在の一関市は平成17年9月に1市4町2村が、更に平成23年9月には東磐井郡藤沢町が合併され、県内第2位の人口と面積を有する市となっている。

一関市の中でも花泉町は、南は宮城県登米市、西は宮城県栗原市と接しており、市域の最南端に位置する県境の町である。花泉町周辺は、奥羽山脈と北上山地の間を南流する北上川と、これに東行して合流する磐井川や金流川によって開析された丘陵地に分類される。本遺跡を含む日形地区においても丘陵地が大部分を占めるが、北上川に隣接するため谷底平野の発達する部分が見られ、北上川の流路の変換点部分や、金流川・黄海川の下流域から合流地点においては、小規模ながらこの中に比較的連続した自然堤防が形成されている。

1 地理的環境



第 1 図 遺跡位置図

2 歴史的環境

一関市花泉町内では、現在約150箇所の遺跡が登録されている。本遺跡が所在する日形地区においても、22遺跡の存在が確認されているが、平成18年の分布調査や本整備事業に伴う試掘調査によって新規に確認された遺跡も多く、その数は増加傾向にある。一方、花泉町内において発掘調査が実施された遺跡は少数で、本図幅中に限るとわずか1遺跡にとどまる。よって本節においては、町内の発掘調査された代表的な遺跡について概観する。

後期旧石器時代の遺跡として金森遺跡(花泉遺跡として報告)がある。昭和30年に東北大学古生物学教室により調査が行われており、ハナイズモリウシ・ヘラジカやナウマンゾウなどの動物化石が出土している。

縄文時代の遺跡としては、貝取貝塚や石塚貝塚など内陸性の貝塚が調査されている。貝取貝塚は、昭和31・32・41・44年に岩手大学・早稲田大学・東京大学による4次にわたる調査が行われ、縄文時代中期～弥生時代に属する遺物や32体分の埋葬人骨などが出土している。石塚貝塚では、平成8年に岩手県教育委員会の試掘調査、平成22年には農道整備事業に伴い当埋蔵文化財センター(以下埋文センター)が発掘調査を行い、再堆積であるものの動物遺存体を含む貝層を確認している。集落遺跡としては、下館銅屋遺跡やどうじゃ森遺跡(4)などがある。下館銅屋遺跡は、平成7・8年に当埋文センターが調査を行い、中期後葉に属する竪穴住居跡45棟が確認されたほか、早期～後期の遺物も出土している。また、報告遺跡である中神四日市遺跡から北北西約500mの小高い丘陵上にどうじゃ森遺跡(中神遺跡として報告)がある。東北大学による昭和22・33年の調査の結果をもとに、平成2～8年にかけて同大学と花泉町教育委員会により再調査が行われている。調査の結果、晩期の住居跡や後期の配石遺構のほか、早期～弥生時代前期の土器・石器・骨角器・巻貝形土製品など良好な資料が大量に出土している。

弥生時代の遺跡としては、先の貝取貝塚やどうじゃ森遺跡が挙げられ、どうじゃ森遺跡では前期に属する土器・石器・骨角器・土偶が出土したほか、墓域と想定される区域から土器棺が4基確認されている。

古墳時代の遺跡としては、昭和30年に杉山古墳が5基調査されているが、終末期古墳群と考えられるもので8世紀前半まで時代が下る可能性がある。

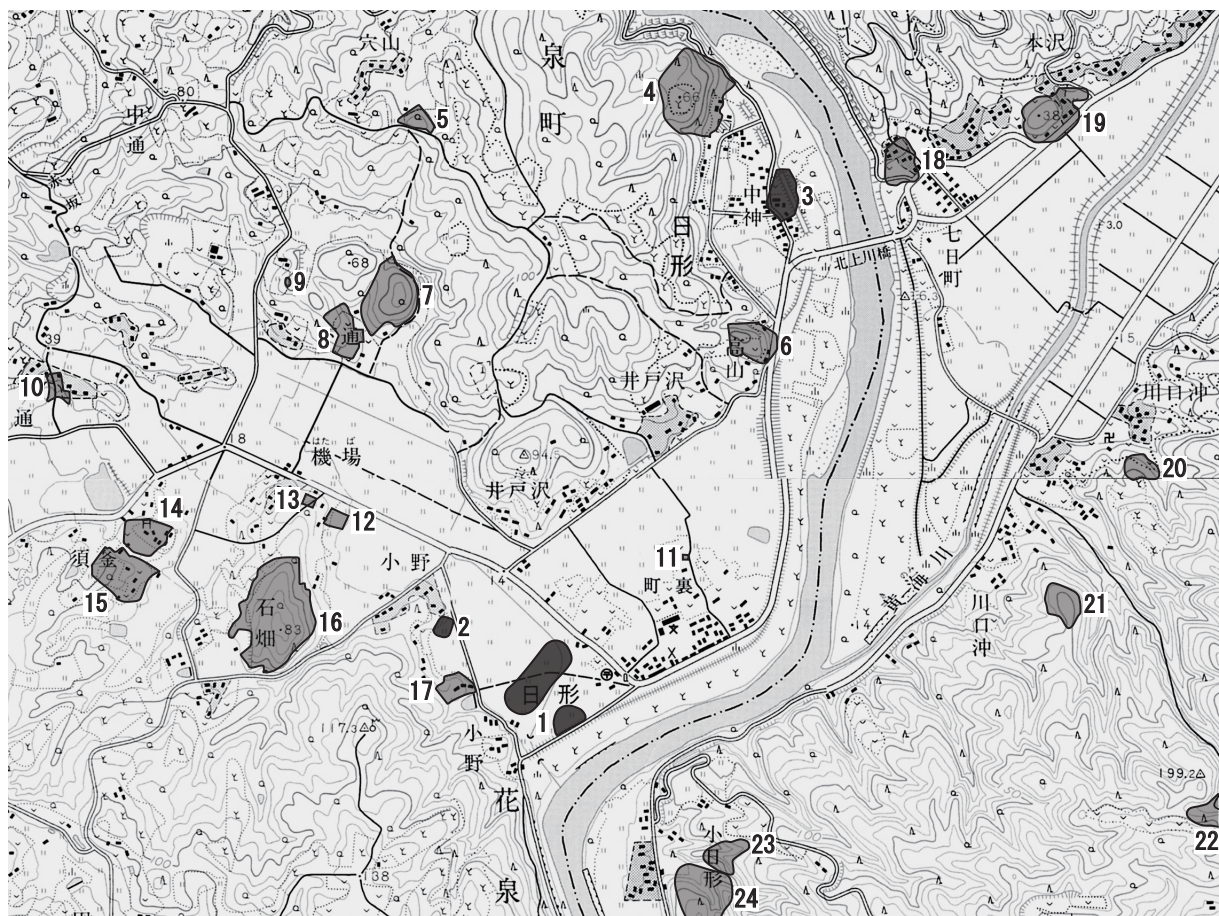
古代では数多くの遺跡が確認されており、上述した下館銅屋遺跡では住居跡19棟や土坑約70基が調査によって見つかった。平成20年に当埋文センターで調査された中村城跡では、住居跡2棟のほか、当時の水田跡や河川跡も確認されている。また、平成14・15・21年に調査された五輪堂遺跡では、住居跡や住居状遺構などが確認されている。このほか分布調査においても土師器や須恵器といった遺物が表採される遺跡は多く、日形地区においても平成18年に上通遺跡(10)・石畑遺跡(12)などが確認されている。

中世の遺跡としては城館跡が多く、過去に実施された分布調査において48の城館が記録されているが、発掘調査が実施された例は少なく、上記の中村城跡のみである。中村城跡では、城を巡る堀跡や橋跡などが確認され、堀跡から大量の木製品が出土している。

近世の遺跡としては、平成10年に花泉町教育委員会によって調査され、江戸時代中期の製鉄炉が検出された寺沢遺跡などがあるが、遺跡数・調査事例とも少なく、その内容は判然としない。今後の調査に期待されるものである。

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	よみがな	遺跡コード	種別	時代	主な遺構・遺物	備考
1	小野	この	OE39-1017	散布地	古代	須恵器、土師器	H18分布調査、報告遺跡
2	小野Ⅱ	この2	OE39-0081	生産遺跡	古代	水田跡	H22新規遺跡、報告遺跡
3	中神四日市	なかがみよつかいち	OE29-2146	散布地	平安	土師器	報告遺跡
4	どうじゃ森	どうじゃもり	OE29-2028	散布地	縄文～弥生	縄文土器、石器、弥生土器	S24・33発掘調査、H2～8学術調査
5	角堂塚	かくどうづか	OE29-2021	祭祀跡		石碑、石祠	覚道塚、法華塚
6	高山館 (須藤館)	たかやまだて (すどうだて)	OE29-2193	城館跡	中世	曲輪、土塁、空堀	
7	小館	こだて	OE29-2081	城館跡	中世	曲輪、腰郭、主郭、二の郭	
8	中通Ⅰ	なかどおり1	OE28-2398	散布地	縄文・古代	須恵器、土師器、(縄文土器、かわらけ)	
9	鹿ノ畑経塚	かのはたきょうづか	OE28-2389	経塚	平安～鎌倉	古常滑焼経壺、塚2基	S59町指定文化財
10	上通	かみどおり	OE38-0218	散布地	古代	須恵器、土師器	H18分布調査
11	町裏	まちうら	OE39-0161	散布地	縄文	石鏃	H18分布調査
12	石畑	いしはた	OE38-0359	散布地	古代	須恵器、土師器	H18分布調査
13	関峯寺庵跡	かんぼうじあんあと	OE38-0358	寺院跡		墓石	
14	上須釜館	かみすがまだて	OE38-0361	城館跡	桃山	曲輪、腰郭	
15	宝寿院跡	ほうじゅいんあと	OE38-0382	寺院跡		墓石	
16	葉山館(波山館、 小野山城)	はやまだて (おのやまじょう)	OE38-1328	城館跡	室町	曲輪、土塁、空堀、本丸、二の丸	H14範囲拡大
17	小野下館	このしもだて	OE39-1022	城館跡	室町～江戸		
18	黄海岸岸場	きのみがわきしば	OE29-2138	渡し場跡	近世		
19	シダ森	しだもり	OE29-2215	散布地	縄文	縄文土器、石鏃	
20	川口館	かわぐちだて	OE39-0236	城館跡	中世	空堀、主郭、二の郭、腰郭、土塁	
21	藤の巻館	ふじのまきたて	OE39-0283	城館跡	中世	空堀、主郭	
22	鍛冶屋敷	かじやしき	OE39-1249	製鉄跡		鉄滓	
23	鴉巣館 (小日形館)	ときすだて (こひかただて)	OE39-1178	城館跡	中世	空堀、主郭、二の郭、腰郭、土塁	
24	皇徳寺跡	こうとくじあと	OE39-1173	寺院跡			



1:25,000 有壁・千厩南部・若柳・米川

第2図 周辺遺跡分布図

Ⅲ 野外調査・室内整理の方法

1 調査と整理の経過

発掘調査は、3月11日に発生した東日本大震災の影響により、当初の予定より半月遅れの4月後半からの開始となり、3遺跡あわせて平成23年4月18日から6月10日まで行った。

4月18日月曜日の午後、発掘機材を搬入し、プレハブ事務所・休憩所等の環境整備を行った。

調査開始の1週目は中神四日市遺跡、小野Ⅱ遺跡、小野遺跡の順で、前年度に岩手県教育委員会生涯学習文化課が実施した試掘の状況確認を行った。低地では部分的に黒褐色土層も認められたが、微高地は開墾により上層は削平されており、いずれの遺跡も表土(耕作土)及び盛土下がおおよそ遺構検出面と判明したため、表土と盛土の除去は重機を使用することとした。重機による粗掘は調査面積の狭い中神四日市遺跡は週の前半、小野Ⅱ遺跡は後半で終了し、小野遺跡は月末までの作業となった。

21日には中神四日市遺跡と小野Ⅱ遺跡について基準杭の委託打設を実施したが、翌日には委託業者から大震災に伴う地殻変動の影響により、測量成果として決められている電子基準点の座標値が変化しているため、正確な座標値の割り出しができない旨の連絡を受けた。調査と並行して、ほ場整備工事も行われており、作業の進行工程もあることから、電子基準点の成果値の確定後に再計算により座標値を求めることとし、遺構測量等の作業は打設した杭を基準として行うこととした。ちなみに9月末には再計算による成果を得ており、大震災前との変動は、平面的には南東方向に約3.8mのずれ、標高は25cmほど低くなったことが判明した。

22日には、障害もなく、遺構も希薄だった中神四日市遺跡は実質的な調査を一週間で終えた。この日から、小野Ⅱ遺跡では火山灰上面までの掘り下げと調査区壁際に水田跡の検出と擬似畦畔等の有無の確認のために断面観察用のサブトレンチを入れる。連休前は天候不順もあり、低湿地の調査区は毎朝冠水状態で作業は水抜きとクリーニングに明け暮れる状況であった。

25日からは小野遺跡B区の検出・精査にも着手。

28日、生涯学習文化課・委託者立会いの下、中神四日市遺跡の終了確認が行われる。

5月9日の連休明けには、柱穴4個のみの小野遺跡B区は終了した。

10日には小野Ⅱ遺跡でプラントオパールを実施。断面観察から火山灰の攪拌された部分を水田跡と想定していたが、分析の結果ではプライマリー状態の火山灰層下の部分でも水田跡の可能性があると報告を得た。

11日、小野遺跡A区の検出・精査に着手。A区の基準杭の委託打設を実施。

12日、一関市教育委員会花泉支所職員等12名現場見学。小野Ⅱ遺跡実質的な調査終了。

中旬からは、A区本調査区の遺構精査が作業の中心となる。

19日、生涯学習文化課・委託者立会いの下、小野Ⅱ遺跡と小野遺跡B区の終了確認が行われる。

30日、生涯学習文化課・委託者立会いの下、小野遺跡A区の終了確認が行われる。

6月8日、現地公開開催。参加者23名。

10日、午前中に発掘機材等を搬出、午後には撤収して野外調査をすべて終了した。

整理作業は11月1日から平成24年3月31日まで行った。

11月から整理作業員3名体制で、作業は小野遺跡を中心に遺物の洗浄と注記・接合・復元を主体とし、仕分け・登録・重量計測、野外調査の写真整理などを行った。

12月は小野遺跡は遺物実測を主作業とし、中神四日市遺跡は遺物・遺構とも少なく、月の前半ではほとんどの作業を終え、小野Ⅱ遺跡は遺物実測まで終了した。

1月も引き続き遺物実測を行い、終了後には各種遺物のトレースを開始。中旬には遺物写真撮影を行う。遺構図測量のデジタル化に伴い、遺構図のデジタル合成は調査員の直接作業として行った。

2月は整理作業員2名体制で、前月に引き続く作業を行い、下旬からは図版作成の準備を行った。

3月には整理作業員1名となり、各種図版作成と収納作業を行い、31日をもって整理作業をすべて終了した。

2 調査方法

(1) グリッドの設定

グリッドの設定は、今回調査が行われた区域のみならず、遺跡の全体をカバーできるように国家座標第X系に合わせて設定した。区割りは調査区外となったが北西隅を原点とし、100m間隔で北から南にⅠ、Ⅱ、Ⅲ・・・と昇順するローマ数字を、西から東に向かいA、B、C・・・と昇順するアルファベット大文字をあてて大グリッドを設定した。さらに各大グリッドを5m間隔で20等分して同様に北から南に1～20のアラビア数字を、西から東にa～tのアルファベット小文字をあて、これらの組み合わせで小グリッドを表すこととし、「ⅠA2b」というように呼称した。

なお、各遺跡のグリッド配置図と調査範囲については各々の遺跡において後掲している。

(2) 粗掘と精査

粗掘は、各遺跡とも岩手県教育委員会の試掘調査における基本層序を参考としつつ、状況把握のために適宜トレンチ及びテストピットによる試掘を行い、層序の確認をしたところ、過去の開田作業等により、低地では部分的に黒褐色土層も認められたが、微高地は現農作業道を除き、田面はかなり削平されており、遺構検出面より上層では遺物包含層も確認されず、いずれの遺跡も表土(耕作土)及び盛土下がおおよそ遺構検出面と判明したため、表土と盛土は重機を使用して除去することとした。

なお、各遺跡の基本層序と遺構検出面等については各々で後述する。

精査は、竪穴住居跡・竪穴状遺構は4分法、土坑類は2分法による覆土の観察を行い、不明瞭なプランについては状況把握のために適宜ベルトを設定して掘り下げを行った。水田跡については調査区の幅が2m未満と狭く、掘削深度と安全面からキー層である火山灰層上面まで全体的に掘り下げ、その後幅30cmのトレンチを入れ、断面観察による擬似畦畔等の確認を行ってから、面的に掘り下げを行った。柱穴については、土層注記と柱痕、掘削時の特異な状況等はフィールドカードに記録した。

遺物の取り上げは、遺構内では遺構名と埋土層位を記入し、出土地点を計測した遺物については取り上げ番号も記入した。遺構外出土については出土位置・層位にほとんど意味が認められない状況であったことから、調査区名と各区内の便宜的範囲・位置等を記入して採り上げた。

(3) 遺構の記録

遺構の記録は実測図と写真撮影により、作図に表現できない場合はフィールドカードに記録した。

図面は、遺構の平面形や火山灰・焼土・炭化物範囲、遺物出土状況等を記録した平面図、及び遺構の断面形、覆土の堆積状態を記録した断面図と適宜エレベーション図も作成した。作図は、平面図については電子平板を使用した光波測量により、精査途中で必要に応じて作図記録している。図の縮尺は、使用ソフトの機能・性能により任意的な入力となっている。断面図類は手実測による原則1/20と

し、カマド等の微細図は1/10で作図した。

写真は、遺構検出時の確認状況、埋土堆積状態、遺物出土状況、完掘状態というように精査の段階毎に必要なに応じて撮影を行っている。主に記録保存用として6×7判のモノクロ銀塩写真と、普及活用を主体とした35ミリフィルム相当となる1300万画素のフルサイズデジタルカメラを使用した。

3 整理方法

図面等の点検と遺物の洗浄は、原則的に現場で野外調査と並行して行った。

遺構名は凡例に示した略号を用いて検出順に番号を付したが、精査中や整理段階で種別の変更が必要となった場合でも、作業上の混乱を避けるため、本報告に際して最終的に遺構名を変更している。

なお、作業上の旧遺構名と本報告に掲載した変更遺構名の対応表は凡例に示したとおりである。

(1) 遺構図面の整理

遺構図面は、点検後に手実測した断面図をデジタル図化し、また、一部簡易写真測量用として撮影したデジタル写真データも取り込み、これらと電子平板によるデジタルデータを合成して作成した。

挿図中の縮尺は、竪穴住居跡と竪穴状遺構は1/60、柱穴は1/80、土坑類は1/40、水田跡の平面図は1/100、断面図は1/40、カマド等の微細図は1/30を原則とし、スケールを付している。遺構図に使用した網掛けの凡例は各挿図中に示している。

(2) 遺物の整理

遺物は洗浄後、遺構内外の種別毎に仕分けを行い、全出土遺物を点検しつつ、接合・注記・復元と作業を進め、実測や採拓の必要なものを選択した後に登録した。報告書に掲載した遺物は、登録した中からさらに選択して実測・トレース・写真撮影・デジタル化及びデジタル図版作成と作業を進めた。作業は、調査員が仕事の計画と指示・点検、及び最終的なデジタル編集を行い、作業員が実測・トレース等の実際の仕事というように分担している。

報告書に掲載した遺物の選択基準は、基本的には土器は完形品と接合復元したもので器形がおよそ把握できるものはすべてとし、完形品等では抽出できなかった形状の口縁部破片も選択している。遺構外出土遺物は出土量と基本層序の状況から土器類については掲載を見合わせた。

土製品と石器類は、全点を掲載した。陶磁器類は中神四日市遺跡で出土した近世磁器1点を掲載した。挿図中の縮尺は土器・陶磁器と砥石は1/3、土製品(土錘)は1/2とした。

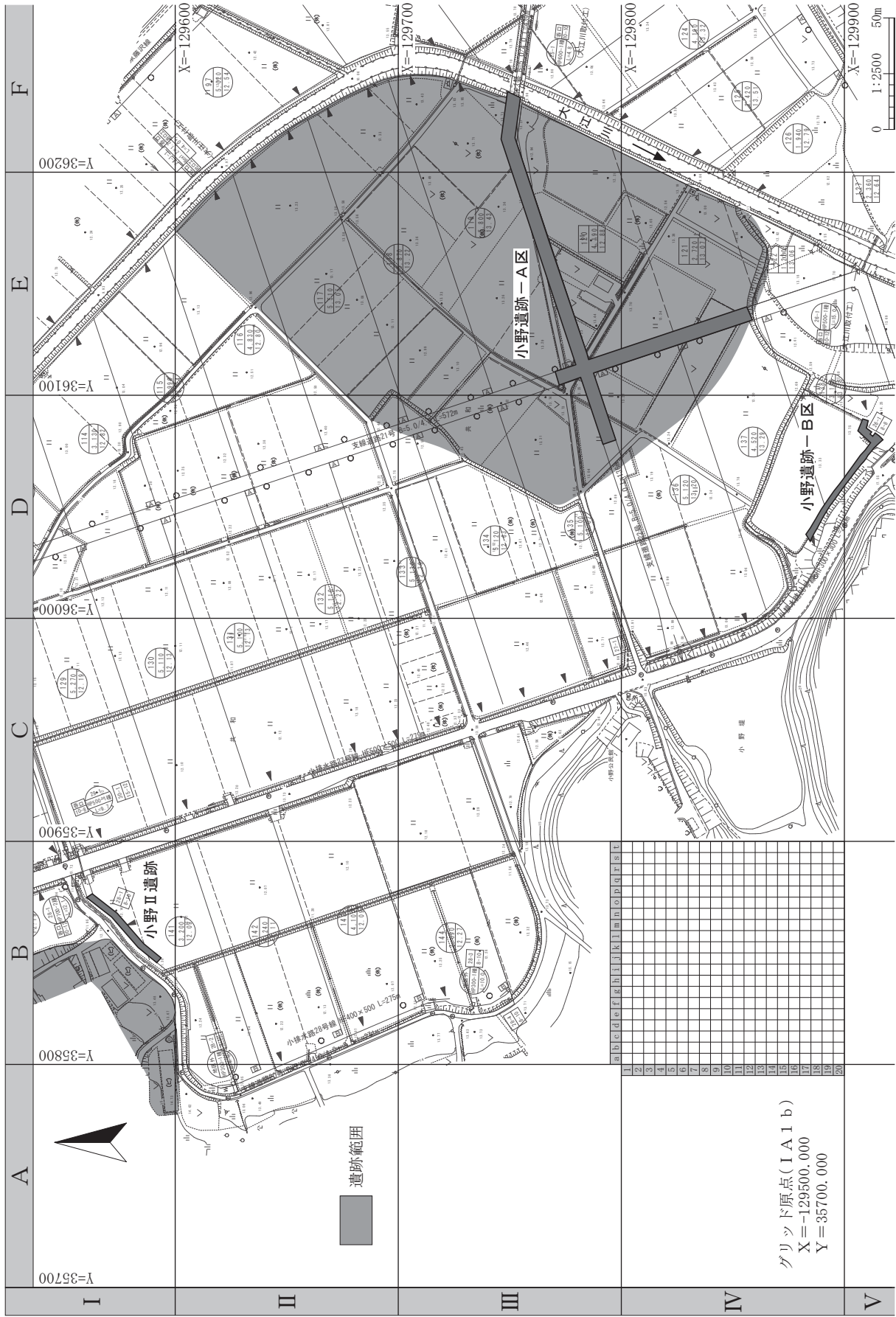
なお、土師器のうち口径の推定可能なものは反転実測している。掲載した遺物の番号は種別を問わず、全遺跡通しの連番としている。

遺物写真は登録したものをデジタルカメラ(1300万画素)で当センターの写真技師が撮影し、その中から選択して掲載している。

(3) 写真の整理

野外調査中に撮影した写真は、撮影順に対応するようにモノクロフィルムはネガアルバムに整理をして台帳に記載した。報告書に掲載した写真はデジタルカメラ(1300万画素)撮影データである。

測量図・写真のデジタルデータについては当センターの資料整理保管要綱に従って整理して、DVD及びPCの外付けハードディスクに保管している。



第3図 調査範囲とグリッド配置図

IV 小野遺跡・小野Ⅱ遺跡

1 遺跡の概観(第3図)

小野遺跡及び小野Ⅱ遺跡は、岩手県の南側で宮城県との県境一帯を占める広大な一関市の最南端となる花泉町に所在し、JR東北本線花泉駅の東方向約6kmに位置する。

小野遺跡は、北緯38度49分50秒、東経141度15分00秒あたりを中心に、北上川右岸で大江川が合流する付近の谷底平野に形成された自然堤防上に立地する。調査区の標高は13m前後である。

小野Ⅱ遺跡は、北東側に張り出した丘陵縁辺の狭い台地上の南東部側で、北緯38度49分40秒、東経141度14分50秒あたりを中心とし、南側の低地部分を一部含む範囲である。この低地は小野遺跡が立地する自然堤防の後背湿地の北西部にあたる。調査区は低地が対象で標高は12m前後である。

各遺跡調査区の現況は水田と畑地であったが、調査区以外については、ほ場整備が進んでいたため、旧地形は判然としなかった。

2 調査の概要

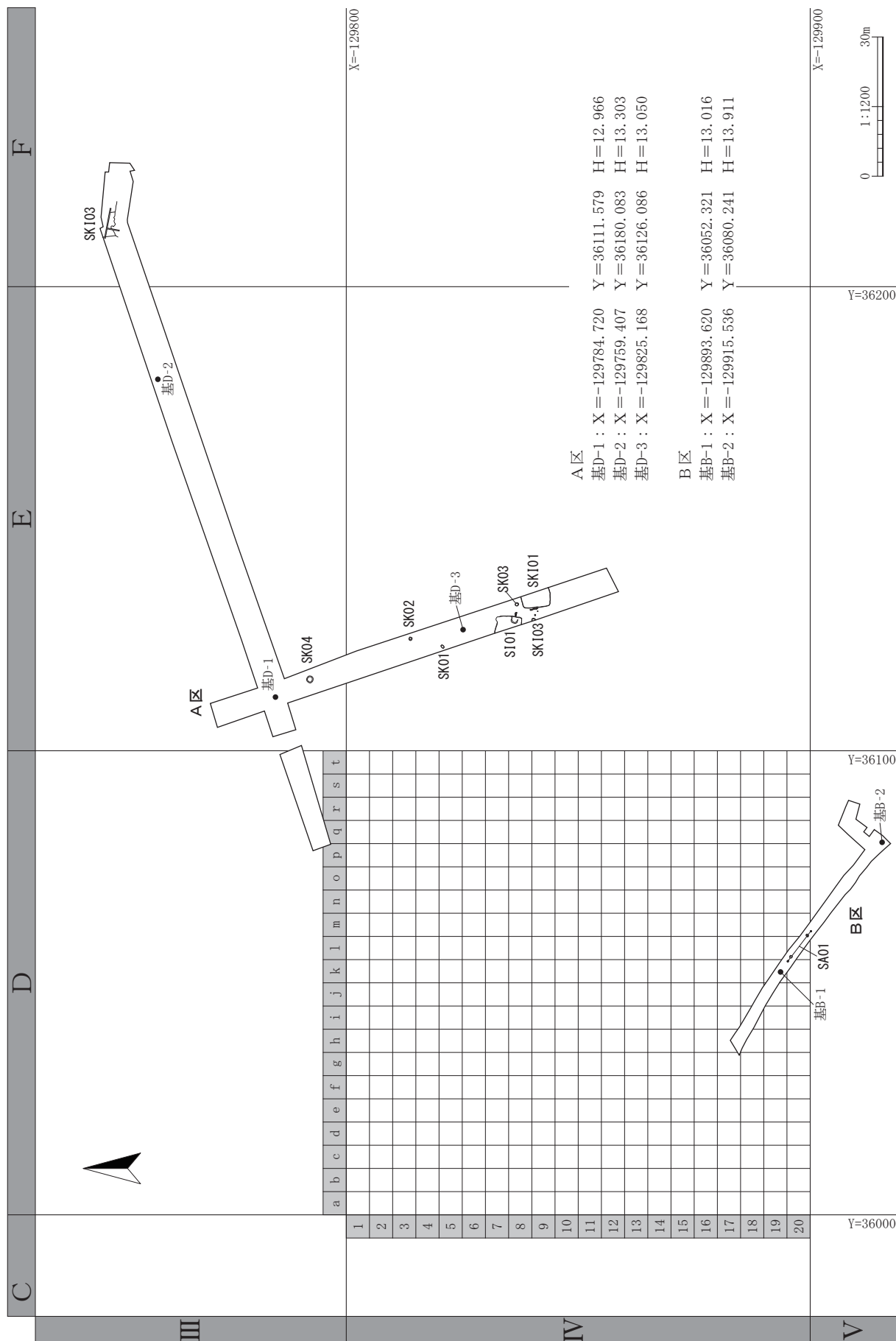
今回の調査は、ほ場整備に係わる農作業道と用水路分について、岩手県教育委員会生涯学習文化課が実施した試掘結果により遺構・遺物が確認された範囲を対象として実施した。

小野遺跡は遺跡の立地する自然堤防南部の道路予定地(A区)と試掘で西側低地部分でも柱穴が検出されたことから、範囲を拡大し、丘陵裾低地の用水路予定地(B区)についても調査を行うこととなった。工事工法の違いにより、B区用水路とA区道路予定地のうち、パイプラインを埋設する南北道については掘削されることから本調査(896㎡)、東西道の工事は盛土によることから遺構確認調査(984㎡)となった。A区確認調査区は現農作業道の東部より北側は、比較的遺存状況は良好であったが、現農作業道より南側のA区本調査区は田区で一段低く、開墾によりかなり削平されていたため、微高地の南端部付近で竪穴住居跡が3棟と遺構密度は希薄で遺存状態も劣悪な状況であった。

小野遺跡の基本層序は、調査開始時には調査区内の耕作土も撤去されていたため、詳細は不明であるが、試掘データと残存する状況からは、Ⅰ層耕作土、Ⅱ層盛土、Ⅲ層褐色土(遺構検出面)と推測された。Ⅲ層以下は北上川の洪水の影響を受けた堆積層となっている。

小野Ⅱ遺跡は台地裾の低地部分の用水路予定地が調査区である。県教委生文課の実施した試掘時に、畦畔状の高まりで囲まれた小区画の灰白色火山灰と思しき範囲が認められたことから、水田跡の可能性が考えられ、遺跡範囲が拡大されて調査を実施するに至ったものである。今回の調査では、平面的には明瞭な区画や農作業の痕跡等は確認できず、断面観察で一部畦畔とも取れる高まりを視認したに止まる。水田跡とした判断は花粉分析と植物珪酸体分析の結果によるものである。なお、調査開始時には調査区隣接地の工事も進んでおり、掘削状況として灰白色火山灰が所々で見受けられた。

小野Ⅱ遺跡の基本層序は、小野遺跡と異なり、調査区では工事が未着手のため、現況として次のように確認できた。Ⅰ層耕作土とⅡ層盛土は人為的層、Ⅲ層暗褐色土は遺物包含層、Ⅳ層の灰白色火山灰層とⅤ層褐色土は遺構検出面となっている。全体的、特に下層では自然堤防の後背湿地として土壌がグライ化した色調を呈する。



第4図 小野遺跡一遺構配置図

3 検出された遺構

今回の発掘調査では古代(奈良・平安時代)の遺構と遺物、時期不明の遺構が検出された。古代の遺構は、出土遺物及び火山灰層との関係から時期が特定されたものと形態やプランの確認状況などから時期を判断したものがあり、判断材料のない遺構を時期不明として扱った。

小野遺跡で検出した遺構は、A区本調査区では竪穴住居跡1棟と竪穴状遺構1棟、焼土・柱穴・壁溝と思われる溝跡の配置から竪穴状遺構と判断した1棟と土坑1基が古代、そして時期不明の土坑3基、確認調査区では確認状況とサブトレンチでの埋土観察から、本調査区の竪穴類と類似する状況から古代と判断した竪穴状遺構1棟が検出された。B区では時期不明の4個の柱穴からなる柱穴列が1列検出された。配置規模の状況から南北二面に庇のある掘立柱建物跡の可能性も考えられる。

小野Ⅱ遺跡で検出された遺構は、十和田a火山灰降下の前後で水田跡が二面検出された。畦畔や農作業の痕跡等は確認できなかったが、花粉分析と植物珪酸体分析の結果から判断されたものである。

(1) 小野遺跡(第4図)

a) 竪穴住居跡・竪穴状遺構

S I 01竪穴住居跡(第5・6図、写真図版2)

<位置・検出状況> A区本調査区南北道の南側で、微高地の縁辺に近いIV E 7・8 f グリッドに位置し、かなり削平されたⅢ層面で検出した。検出面のⅢ層と埋土は、シルト質で北上川の洪水堆積層に起因するものであるため、検出時には埋土の色調による平面形を明瞭には把握できず、遺物や炭化物と焼土が混じる不整なプランとして認識したものである。

<重複関係>なし。

<平面形・規模> 平面形・規模は西側が調査区外にかかるため全容は不明であるが、東側壁長は約4.9m、北側壁長と南側壁長は確認できた部分で約3.7mと約1.3mを測る。北側壁は北西隅側に付属土坑が張り出して付設されており、土坑から東に向かうにつれ、主軸方位から若干広がる傾向にあり、確認できた範囲からみてやや歪な略方形と推定される。床面積は確認された範囲の13.4㎡以上となる。主軸方位はE-14°-Sである。

<埋土> 埋土は本来であれば埋土下位となるもので、基本的にはⅢ層起源の壁崩落土が主体と思われる褐色土とにぶい褐色土の2層に分層される。どちらの層にも炭化物粒や焼土粒が混入する。また、1層下面には炭化物の拵が認められたが、炭化物自体が脆いうえに図化不能な薄さのため分析サンプルの採取を断念し、全体的な範囲として記録するに留めた。

<壁・底面> 壁は外傾して立ち上がり、残存する壁高は9~15cmである。床面は概ね平坦で堅締である。また床面中央の調査区際に1.22m×45cmほどの不整形な焼土を検出した。検出当初は地床炉の可能性を考えたが、前述した薄い炭化物直下の焼土であり、断面観察では被熱が弱かったため、住居の火災時に被熱し赤色変化したものと思われる。貼床はメインベルトA・Bに沿ってサブトレンチを設定したが、今回の調査範囲内では確認されなかった。

<床面施設> 床面施設としては北側にK1、南側にK2、カマド西脇にP1の土坑2基と柱穴1個が検出された。

K1土坑は北東隅寄りでは北壁から張り出すように位置し、平面形・規模は、開口部では62cm・112cm×56cmのやや丸みを帯びた台形状を呈する。断面形は平底の鍋形で、深さは壁面側で約15cm、

床面側で約10cmを測る。埋土は自然流入と思われるⅢ層起源の褐色土であった。

K 2 土坑はカマドの脇の南東隅に位置し、平面形・規模は、開口部径約1m、底部径約80cmの略円形で、断面形は鍋形を呈し、深さは壁面側で約26cm、床面側で約15cmを測る。埋土は自然流入と思われるⅢ層起源の褐色土であった。また、K 2 とカマドの間には、東壁際から石が2個並んで検出された。この周辺は床面を掘り下げ過ぎた部分があり、東壁際脇の石については掘り方が確認できなかったが、隣の石については掘り方を確認できた。このことから、この2個の石は間仕切りを意図して据えられた可能性があると考えられる。

P 1 は開口部で長軸約30cm、短軸約24cmの略楕円形を呈し、底部は長軸約14cm、短軸約8cmの楕円形で深さは約9cmを測る。

<カマド>カマドは、東壁の南寄りに付設されており、本体部は全体的に床面より若干高いマウンド状である。周囲には土器や架構・芯材として使用したと考えられる石などが散見されたが、本体部の遺存状態は悪く、小ピット7基(抜1～6・8)と燃焼部焼土を検出した。小ピットの中で抜1と抜2は焼土範囲との位置関係から袖位置で芯材を据えたと思われる抜き取り痕の可能性が高い。抜3～5については上面が焼土に覆われているが、位置関係からは芯材の抜き取り痕の可能性も考えられる。燃焼部底面はおよそ平坦で、被熱により61cm×65cmほどの不整形で、厚さ7cmと強く赤色変化していた。また焼土の煙道側では、角礫が小ピット(抜7)に据えられた状態で検出した。支脚の可能性もある。煙道は奥行き約1m、幅約22cmの掘り込み式でほぼ水平となっている。煙出しピットは約68cm×32cmの長楕円形で、煙道よりも8cmほど深く掘り込まれていた。

<出土遺物>遺物は、土師器と須恵器の甕形土器片と坏形土器片が出土し、総量は約2.8kgである。出土重量の比率は土師器甕類が全体の43%を占め、次いで土師器坏類の30%、次が須恵器甕類の20%である。掲載した土器は出土量の約6割にあたる。遺構の残存状況からほとんど床付近と床面施設からの出土となる。完形個体はなく、ほとんどが破砕した状態で出土し、出土量に反して土師器甕類の出土個体数が少ない。およそ形状を把握できた個体としては、床面とK 2 埋土から出土した土師器の坏形土器8点(1～8)とK 1・K 2 から出土した須恵器の坏形土器1点(20)がある。出土量が多かった土師器の甕形土器は形状復元できたものは無かった。このほか住居埋土から砥石1点も出土した。<時期・特徴>床面で焼土や炭化物の拡がり確認されたことから、焼失住居であると考えられる。出土遺物から平安時代初頭と思われる。

SK I 01 竪穴状遺構(第7・8図、写真図版3・4)

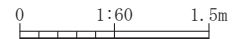
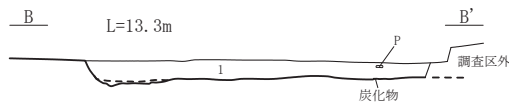
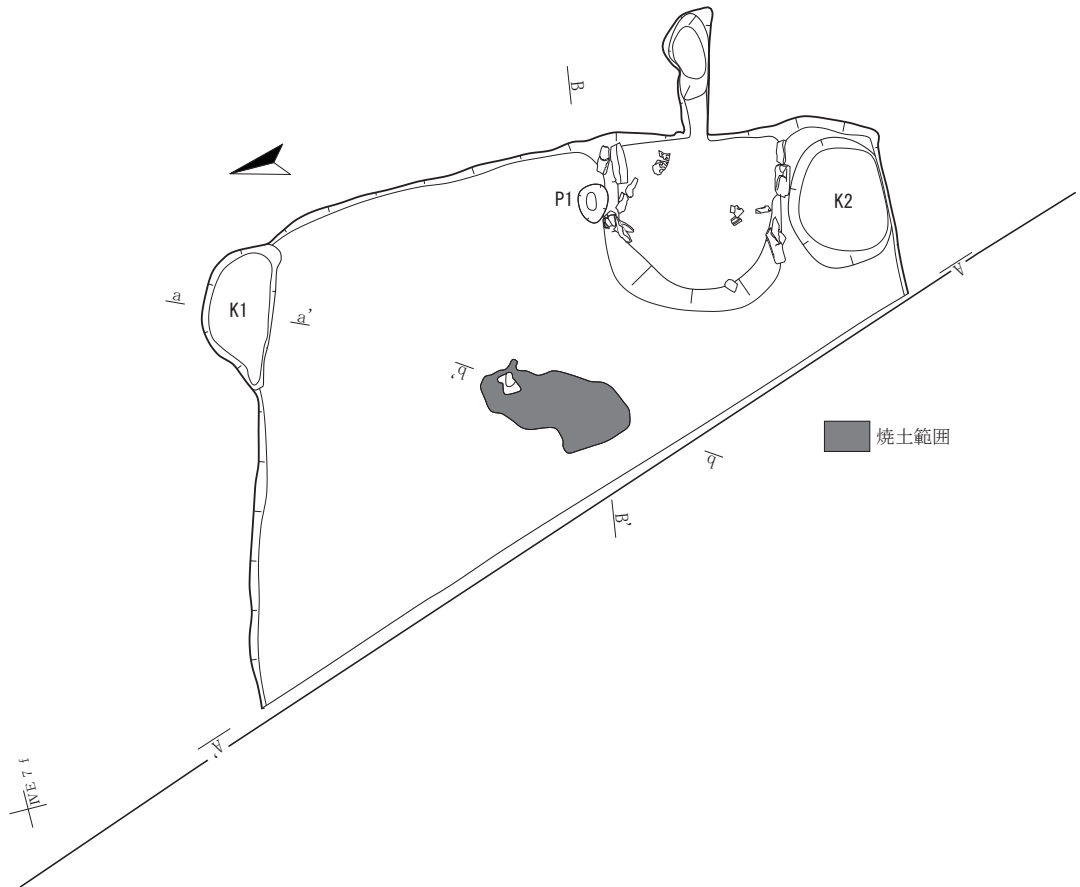
<位置・検出状況> A区本調査区南北道の南側で、微高地の縁辺に近いIVE 8・9gグリッドに位置し、かなり削平されたⅢ層面で検出した。検出面のⅢ層と埋土は、シルト質で北上川の洪水堆積層に起因するものであるため、検出時には埋土の色調による平面形を明瞭には把握できず、遺物や炭化物と焼土が混じる不整なプランとして認識したものである。

<重複関係>直接的な切り合いはないが、位置的にSK I 03 竪穴状遺構と重複するものと思われる。

<平面形・規模>平面形・規模は東側が調査区外にかかるため全容は不明であるが、西側壁長は約5.5m、北側壁長と南側壁長は確認できた部分で約2.4mと約3.8mを測る。南側壁は幾分屈曲しており、確認できた範囲からみてやや歪な隅丸略方形と推定される。床面積は確認された範囲の19㎡以上となる。主軸方位はおよそ東-西と思われる。

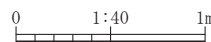
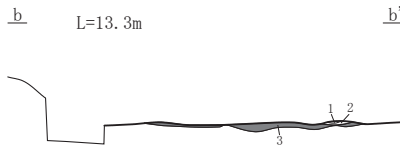
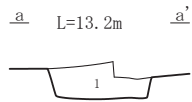
<埋土>埋土は本来であれば最下層となるもので、基本的にはⅢ層起源の壁崩落土が主体と思われる。褐色土の単層で炭化物が混じる。床面近く、特に床面施設付近では最下層に人為的な廃棄と思われる。

S I 01



S I 01

1. 10YR4/4 (褐色) 締り有, 粘性やや有, 径1~5mm炭化物粒・焼土粒少量
図化不能な厚さの炭化物が一面に広がる 床面のは敷物か 取り上げ困難
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐色) 締り有, 粘性やや有, 径1~5mm炭化物粒・焼土粒少量



K 1

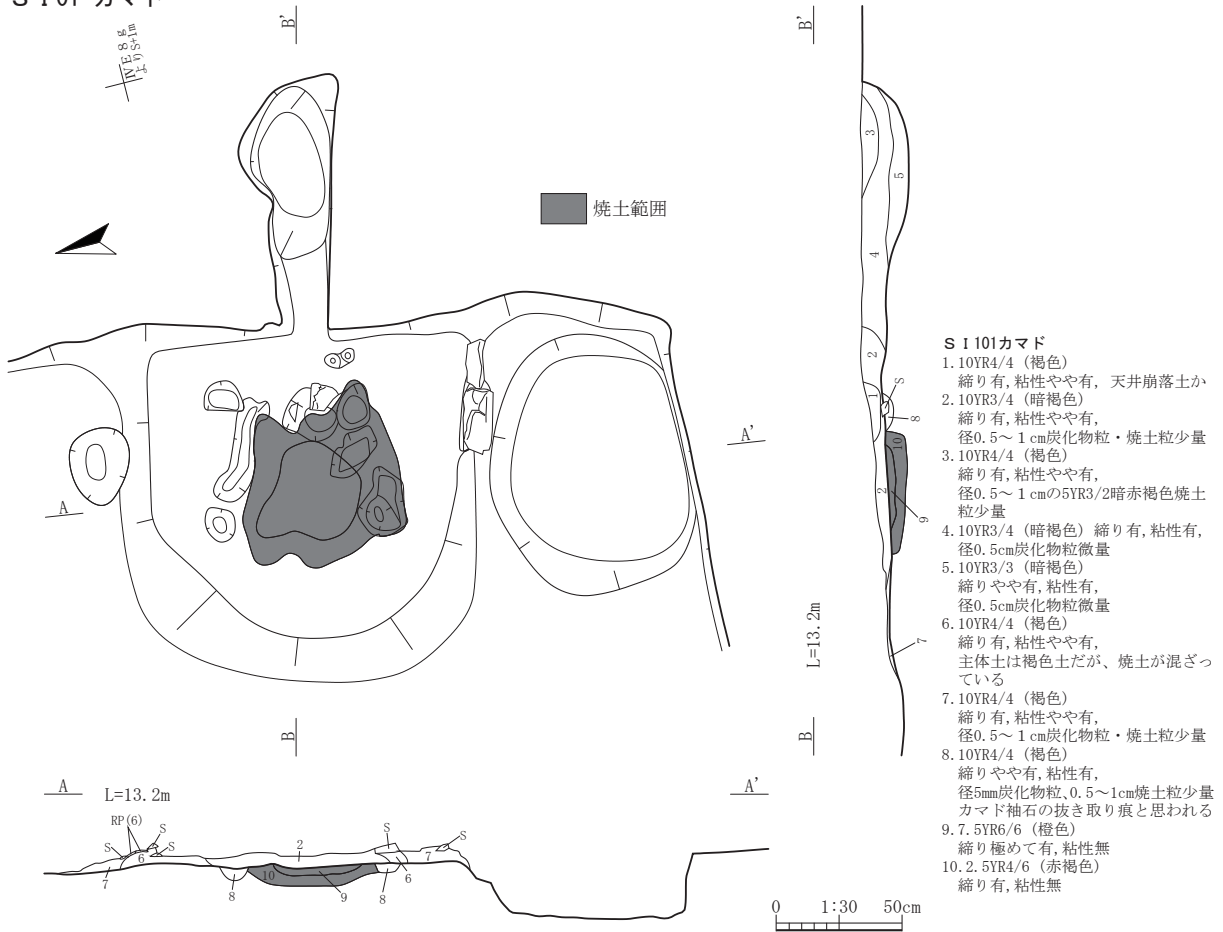
1. 10YR4/4 (褐色) 締り極めて有, 粘性有, 炭化物粒微量

床面焼土

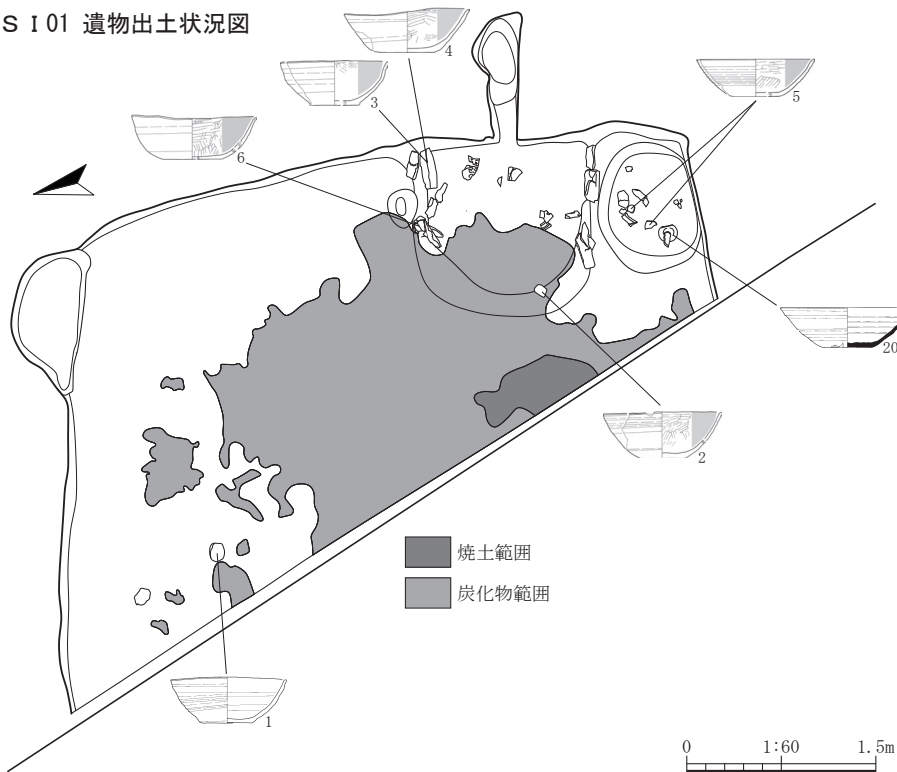
1. 10YR6/4 (にぶい黄橙色) 締り極めて有, 粘性無
2. 10YR4/1 (褐灰色) 締り極めて有, 粘性無
3. 5YR5/4 (にぶい赤褐色) 締り極めて有, 粘性無, 恐らく焼失時に床面が焼けた範囲と考えられる

第5図 S I 01 竪穴住居跡(1)

S I 01 カマド



S I 01 遺物出土状況図



第6図 S I 01竪穴住居跡(2)

焼土や炭化材が認められた。炭化材はRC1・3が赤松で他はクリノ木との鑑定結果を得た。

<壁・床面>壁は外傾して立ち上がり、残存する壁高はおよそ6cm程度であり、床面は概ね平坦で堅締、南東部には貼床が施されていた。

<床面施設>床面施設としては北側にK1・2とP2、中央にK3とP1、南側にK4～6の土坑6基と柱穴2個、中央には新旧の炉跡2基も検出された。

K1土坑は北西よりに位置し、平面形・規模は、開口部径約110cm、底部径約97cmの略円形を呈し、南側には突起状の勾配のある張り出しと南西側にはテラス状の浅い張り出しがある。断面形は深さ約12cmの平底の皿形を呈する。埋土は上位が床面よりも盛り上がるように廃棄された焼土主体の人為的堆積、下位は自然流入と思われるⅢ層起源の褐色土であった。

K2土坑はK1土坑の南東側に隣接し、東端が一部調査区外にかかる。平面形・規模は、開口部で長軸約95cm、短軸約84cmの略楕円形を呈し、長軸方向は北東―南西である。壁は丸みのある底面から明瞭な稜を持たずに緩やかに立ち上がる。深さは約13cmを測る。埋土は隣接するK1と同様の状況であった。

K3土坑は中央に位置し、平面形・規模は、開口部径約70cm、底部径約55cmの略円形を呈する。断面形は深さ約22cmの平底の寸胴鍋形を呈する。埋土は褐色系の4層に分層され、中位は焼土と炭化物が比較的多く混じる。全体的に人為的な堆積と見受けられた。

K4土坑は南側のほぼ中央の壁よりに位置し、北側上位が一部K6に切られる。平面形・規模は、開口部で長軸約100cm、短軸約60cmの略楕円形を呈し、長軸方向は北東―南西である。壁は丸みのある底面から明瞭な稜を持たずに内湾気味に立ち上がる。深さは約20cmを測る。埋土は褐色系の3層に分層され、K3と類似する堆積状況であった。

K5土坑は南東の壁際に位置し、東端が一部調査区外にかかる。平面形・規模は、開口部で長軸65cm以上、短軸約60cmの略楕円形を呈し、長軸方向は北東―南西である。西側にはテラス状の浅い張り出しがある。壁は丸みのある底面から明瞭な稜を持たずに緩やかに立ち上がる。深さは約13cmを測る。埋土は褐色系の3層に分層され、全体的に炭化物と焼土が混じる廃棄された人為的堆積で、上位は炭化物、下位には焼土が多い。

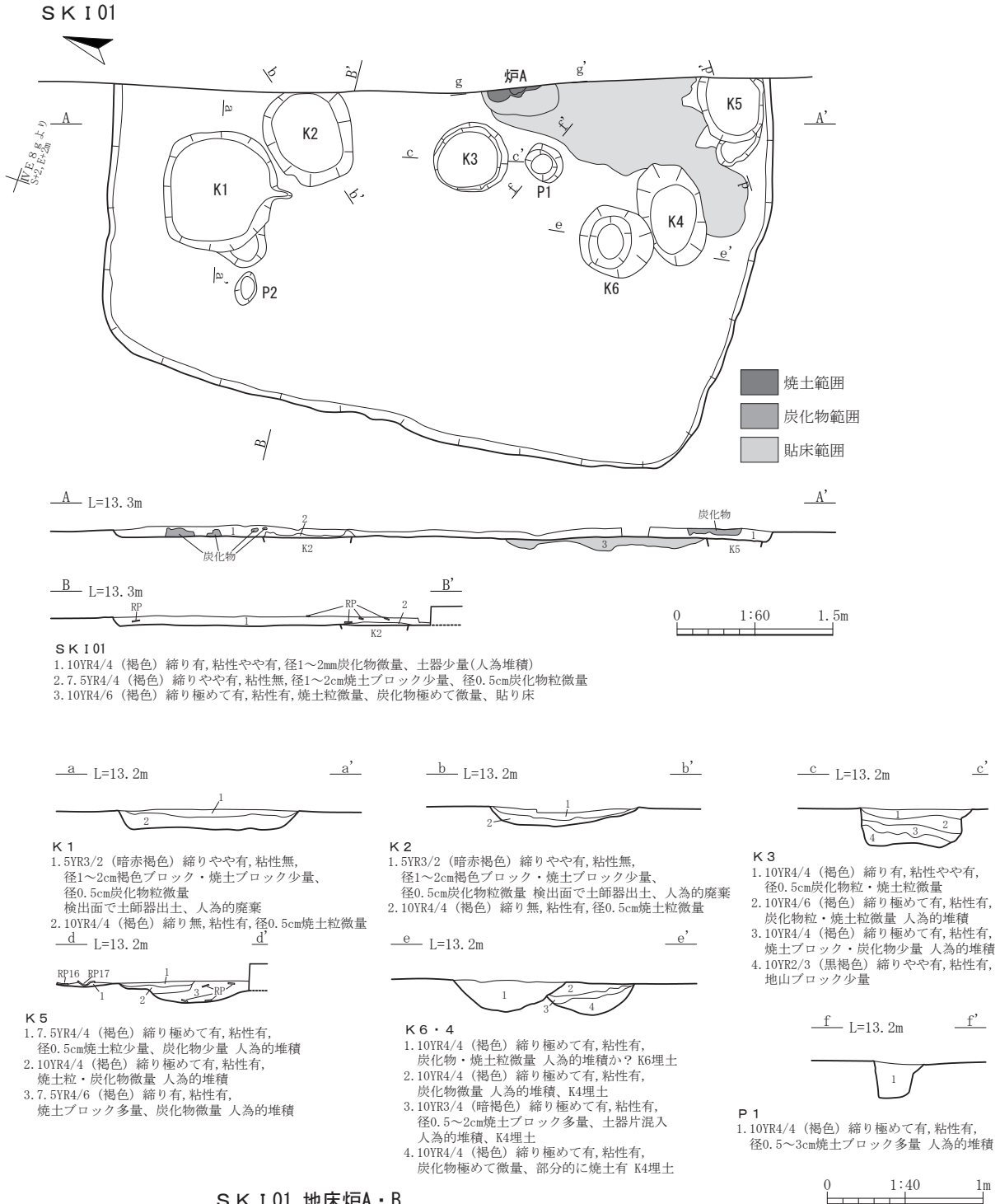
K6土坑は南側のK4土坑を切っている。平面形・規模は、開口部径約68cmの略円形で、断面形が深さ約20cmの中華鍋形を呈する。埋土は流入と思われる褐色土の単層である。

P1は開口部径約35cm、底部径約20cmの略円形で深さは約23cm、P2は開口部32×20cm、底部21×13cmの楕円形で深さは約35cmを測る。

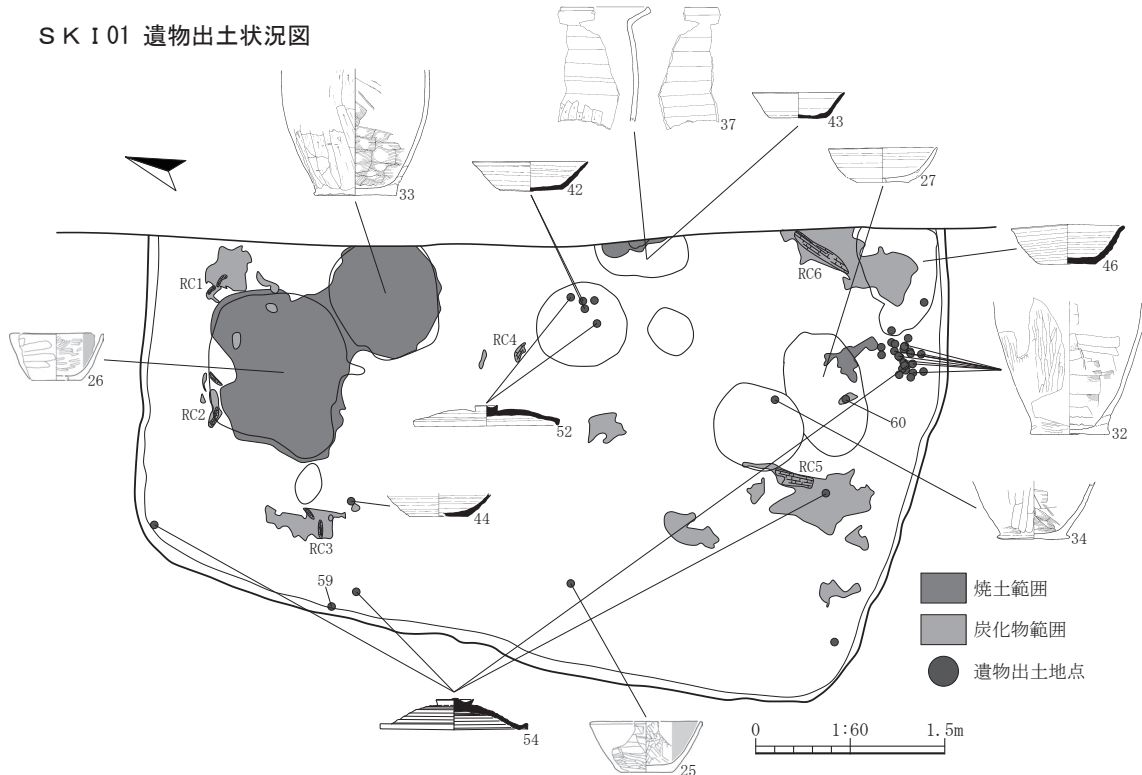
炉跡は中央の調査区際に位置し、大半が調査区外にある。新旧の炉A・Bがあり、新しい炉Aは地床炉で50×10cm以上の不整な広がり、中央部がより堅く焼け締まっていた。火熱による赤色変化は厚さ3cmを超える。炉Bは炉Aの下に土坑状の掘り込みを持つもので、平面形・規模は、開口部で73×27cm以上の略楕円形と推定される。底面中央は掘削され、部分的に燃焼部焼土が消失していた。断面形は深さ約7cmの浅い皿形を呈する。燃焼部焼土を除くと埋土は褐色系の2層に分層され、下位は焼土と炭化物が混じる人為的堆積である。火熱による赤色変化は厚さ4cm程度である。

<出土遺物>遺物は、土師器と須恵器の甕形土器片と坏形土器片、須恵器は蓋も出土し、総量は7kg近い。出土重量の比率は土師器甕類が全体の約75%を占め、その他はそれぞれ5～7%ずつである。掲載した土器は出土量の約3割にあたる。遺構の残存状況からほとんど床付近と床面施設からの出土となる。完形個体はなく、すべて破砕した状態で重量に比して出土個体数は坏類が圧倒的に多い。およそ形状を把握できた個体としては、床面とK1上層の廃棄焼土から出土した土師器の坏形土器3点

3 検出された遺構



第7図 SK I 01 竖穴状遺構(1)



第8図 SK I 01 竪穴状遺構(2)

(25～27)と炉B埋土とK 3底面、床面とK 5埋土から出土した須恵器の坏形土器4点(42～44・46)とK 3底面と床面出土の須恵器蓋2点(52・54)がある。出土量の多かった土師器甕形土器は南側床面遺物集中区とK 2上層の廃棄焼土から出土した上半部を欠く2個体(32・33)がある。このほか床面とK 1埋土から砥石2点、床面からは鉄滓類2点も出土した。

<時期・特徴> 炉跡を含む床面施設の状況からは建て替え、もしくは住居内施設の改装を行ったものと推測され、出土遺物と埋土等の観察から時期差はほとんど無いものの炉AとK 1・2・5・6土坑、炉BとK 3・4土坑がセット関係にあると考えられる。出土遺物から平安時代初頭と思われる。

SK I 02 竪穴状遺構(第9図、写真図版4)

<位置・検出状況> A区確認調査区の東側、大江川の岸辺で微高地の縁辺となるⅢF10c・dグリッドに位置し、削平されたⅢ層面で検出した。検出時の状況は本調査区のS I 01・SK I 01と類似するものであった。埋土の状況などを確認するために東西にサブトレンチを設定し精査を開始したが、サブトレンチ内を掘り下げてすぐにほとんどの場所で炭化物が検出され、不要な遺構の破壊を避けるために炭化物のない西端・東端のみ精査を継続した。その結果、土器小片が出土し、東端で立ち上がりを確認したことから竪穴状遺構と判断した。その後、南側の残存状況を確認するために南側へもサブトレンチを設定したが、後世の攪乱で破壊されており南壁の立ち上がりは確認されなかった。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 平面形・規模は、前述のような検出状況の上、北側が調査区外や試掘トレンチがかかり全容は不明である。西側壁長と東側壁長を確認できた部分から東西長は約2.9mと思われる。主軸方位はおよそ南北と思われる。

<埋土>埋土は、本遺構の東西の壁際にサブトレンチとして部分的に確認しただけであり、詳細は不明であるが、基本的にはⅢ層起源の褐色土である。本遺跡の遺構内埋土は色調が酷似しており、分層が困難であったために遺構内の埋土を単層で捉えていたが、埋土下位において炭化材が面的に広がるような傾向がみられたため、混入物の違いから炭化材の拡がりの直上で分層が可能になると考えられる。このことから焼失住居の可能性が考えられる。炭化物はクリの木との鑑定結果を得た。

<壁・底面>壁はやや外傾して立ち上がり、サブトレンチで確認した壁高は、西壁で約19cm、東壁で約23cmであり、床面はやや東側に傾いてはいるが堅締で、東側では貼床か付属施設と思われる部分が確認された。

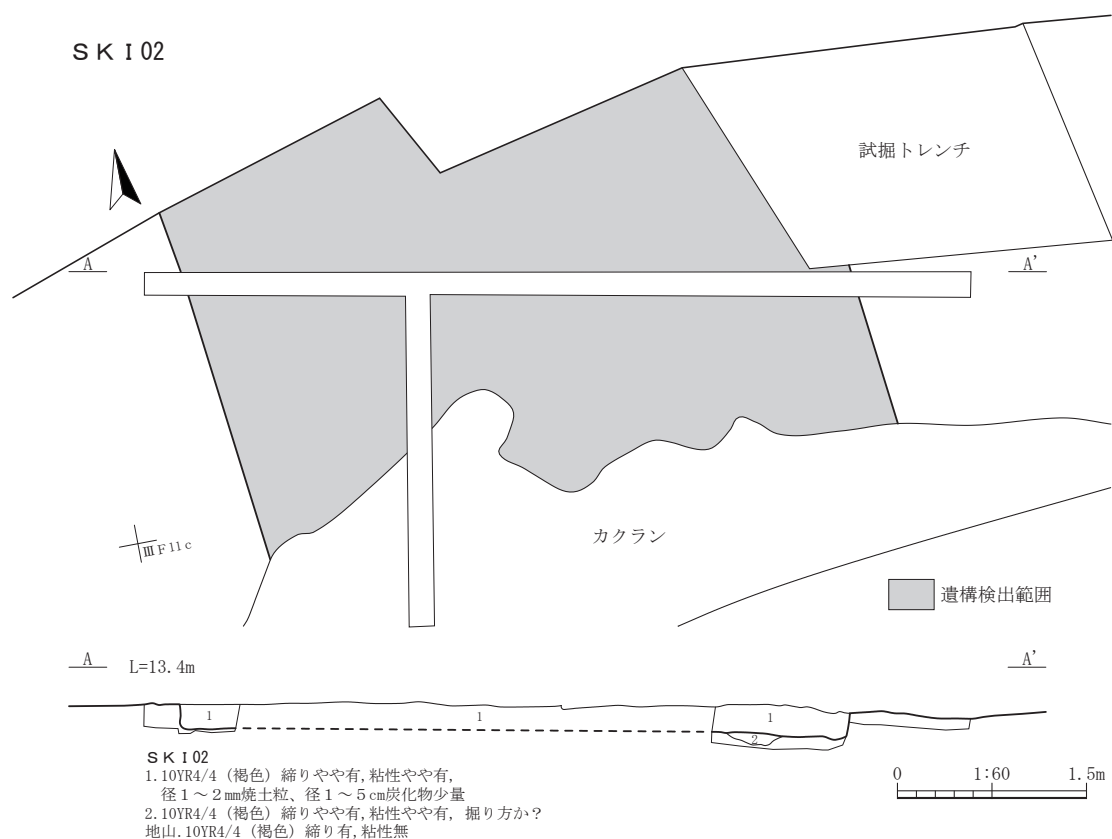
<出土遺物>遺物は、土師器と須恵器の坏形土器片と土師器の甕形土器片が出土したが、総量はトレンチ調査のため約10gと非常に少ない。そのため形状を把握できた個体が無く、掲載した遺物はない。

<時期>トレンチ調査では時期を特定する手掛かりは無かったが、A区の堅穴類と類似する状況から、古代であると思われる。

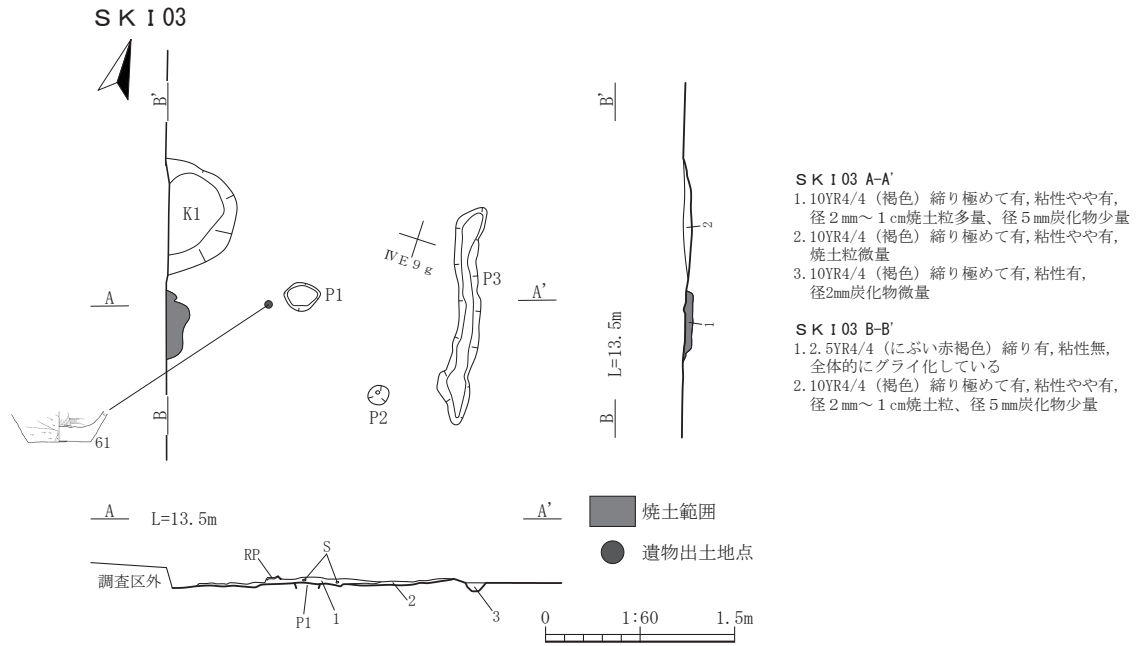
SK I 03 堅穴状遺構 (第10図、写真図版4)

<位置・検出状況> A区本調査区南北道の南側で、微高地の縁辺に近いIVE 9 f・gグリッドに位置し、かなり削平されたⅢ層面で検出した。検出時は遺物の混じる焼土遺構として精査を行っていたが、作業を進めるうちに焼土の周辺でK1、D1、P1・2が検出された。これらの遺構は初めのうちは焼土遺構とは関連がなく、別遺構との認識であったが、K1は焼土遺構のすぐ北側に隣接し、D1は周辺一帯を精査する過程で隣接するSK I 01に伴うものでもなく、溝状の陥し穴状遺構としては浅すぎたこと、焼土遺構周辺の他の遺構との位置関係から、最終的に堅穴状遺構と判断した。

<重複関係>直接的な切り合いはないが、位置的にSK I 01堅穴状遺構と重複するものと思われる。



第9図 SK I 02 堅穴状遺構



第10図 SK I 03 竪穴状遺構

<平面形・規模>平面形・規模は、ほぼ床面での検出で壁の立ち上がりが確認できないうえに、西側が調査区外にかかるため全容は不明である。床面は概ね堅締である。

<床面施設>床面施設としては北西側にK1、中央にP1、東側にD1とP2の土坑1基と壁溝1条と柱穴2個、南西側には炉跡1基も検出された。

K1土坑は調査区際の北側に位置し、西側の大半が調査区外にある。平面形・規模は、開口部で93×55cm以上の略円形と推定される。断面形は浅い皿型を呈し、深さ約7cmを測る。埋土はIII層起源の褐色土であった。

D1の平面形・規模は、開口部で長軸1.7m、短軸で約17cmを測る。横断面形は浅い鍋形を呈し、深さは約6cmを測る。

P1は開口部径29×22cm、底部径24×16cmの略楕円形で深さは約10cm、P2は開口部径約16cm、底部径約2cmの円形で深さは約12cmを測る。

炉跡は南西側の調査区際に位置し、大半が調査区外にある。平面形・規模は、55×18cm以上の不整な広がり、被熱による赤色変化は厚さ5cmを超える。

<出土遺物>遺物は、土師器と須恵器の甕形土器片と坏形土器片、縄文土器も出土し、総量は約0.6kgである。出土重量の比率は土師器甕類が全体の約93%を占め、次いで須恵器甕類が6%、その他は1%未満である。掲載した土器は出土量の約4割にあたる。遺構の残存状況からほとんど床付近と床面施設からの出土となる。完形個体はなく、すべて破碎した状態で出土している。掲載遺物は床面から出土した土師器の甕形土器の底部1点(61)と須恵器壺類の破片1点(62)、D1から出土した縄文土器の甕の底部1点(63)である。縄文土器は本遺構で1点のみの出土のため、遺構が埋没する過程で流入したものと思われる。

<時期>出土遺物から、古代であると思われる。

b)土 坑 類

S K01土坑(第11図、写真図版5)

<位置・検出状況> A区本調査区南北道の中央、微高地上のIV E 5 e グリッドに位置し、かなり削平されたⅢ層面で検出した。

<重複関係>なし。

<平面形・規模>平面形は、開口部でおよそ80×50cmを測る略楕円形を呈し、長軸方向はおよそ北東-南西である。

<埋土>埋土は自然堆積と思われる暗褐色土の単層である。

<壁・底面>底面は概ね平坦で、壁は外傾して立ち上がる。深さは約7cmを測る。

<出土遺物>遺物は、埋土中から土師器の坏形土器片1点と須恵器の甕形土器片と坏形土器片が各1点ずつの重量にして19.8g出土した。

<時期>出土遺物から平安時代と思われる。

S K02土坑(第11図、写真図版5)

<位置・検出状況> A区本調査区南北道のほぼ中央、微高地上のIV E 3 e グリッドに位置し、かなり削平されたⅢ層面で検出した。

<重複関係>なし。

<平面形・規模>平面形は歪な略円形を呈し、開口部径約70cm、底部径約45cmを測る。

<埋土>埋土は自然堆積と思われる褐色土の単層である。

<壁・底面>底面はおよそ平坦で、壁は鋭角的に外傾して立ち上がる。深さは約35cmを測る。

<出土遺物>遺物は検出面付近から土師器の甕形土器の小破片1点3.8gが出土した。

<時期>出土遺物は摩滅しており、古代とは言い難い。

S K03土坑(第11図、写真図版5)

<位置・検出状況> A区本調査区南北道の南側、微高地上のIV E 8 g グリッドに位置し、かなり削平されたⅢ層面で検出した。

<重複関係>なし。

<平面形・規模>平面形は歪な略円形を呈し、開口部径約71cm、底部径約55cmを測る。

<埋土>埋土は自然堆積と思われる褐色土の単層である。

<壁・底面>底面はおよそ平坦で、壁緩やかに外傾して立ち上がる。深さは約12cmを測る。

<出土遺物>遺物は出土しなかった。

<時期>判断材料が無く、不明である。

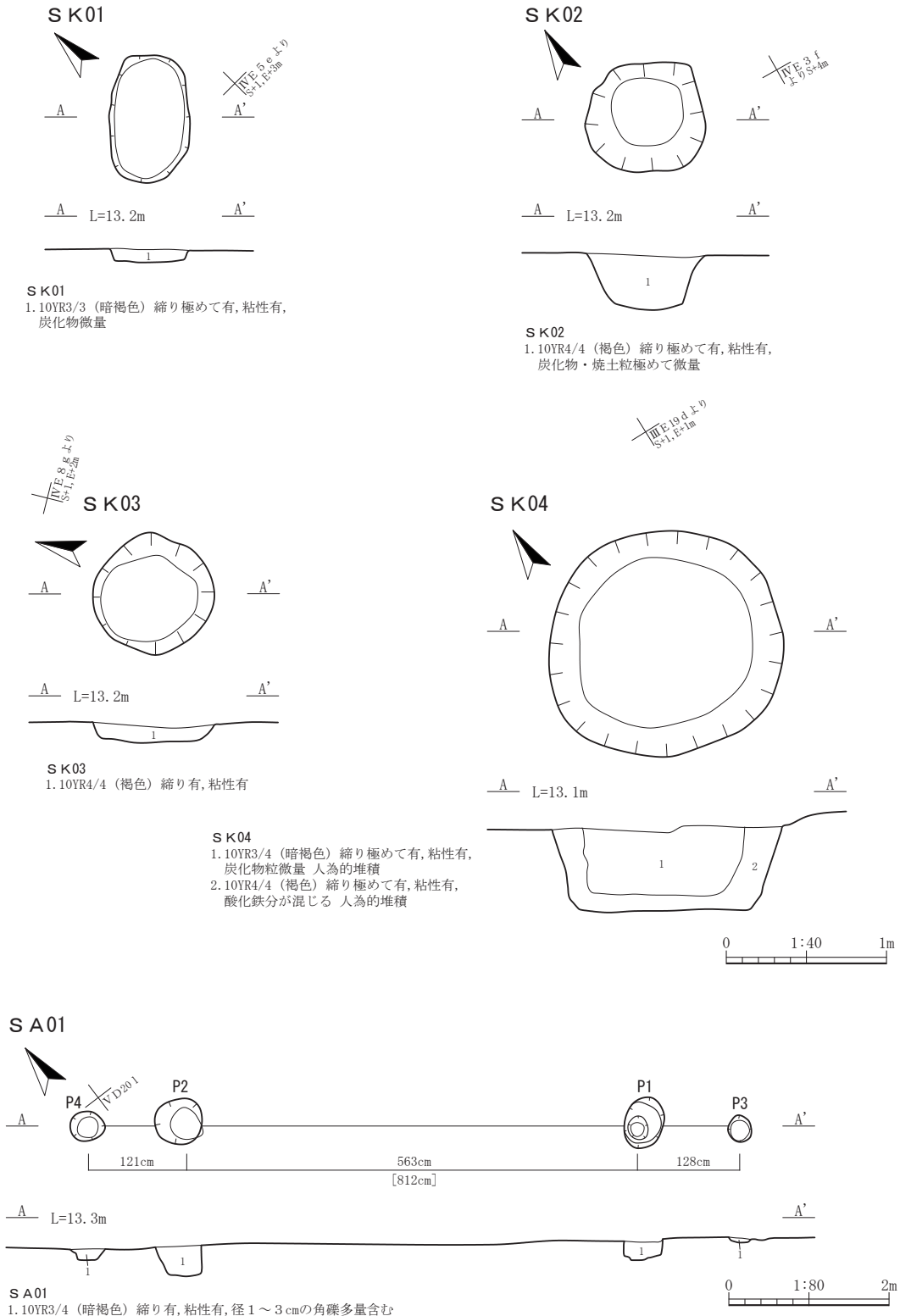
S K04土坑(第11図、写真図版5)

<位置・検出状況> A区本調査区南北道の北側、微高地上のⅢ E 19 c・d グリッドに位置し、削平されたⅢ層面で検出した。

<重複関係>なし。

<平面形・規模>平面形は略円形を呈し、開口部径約145cm、底部径約110cmを測る。

<埋土>埋土は堅く締まった褐色系の人為的堆積の2層である。



第2表 SA01柱穴一覧表

遺構名	形状	規模 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
P 1	楕円形	67×48	28	12.78	柱当たりあり
P 2	円形	60	38	12.58	
P 3	円形	23	6	13.00	
P 4	楕円形	43×35	16	12.76	

第11図 SK01~04土坑、SA01柱穴列

<壁・底面>底面は平坦で、壁はかなり鋭角的に外傾して立ち上がる。深さは約51cmを測る。下半は湧水により壁面から底部はグライ化した色調となっており、井戸跡の可能性が考えられる。

<出土遺物>遺物は土師器の坏形土器と須恵器の甕形土器の体部片が23.3g出土した。

<時期>出土遺物は摩滅しており、古代とは言い難い。

c) 柱 穴 列

S A 01柱穴列(第11図、写真図版4)

<位置・検出状況>B区中央のIVD201グリッドを中心に位置し、盛土層直下のⅢ層で検出した。柱穴4個(P1~4)が一行に配置されることから、建物跡を想定して検出を進めたが、調査区内でこの他には確認できなかった。よって建物跡を構成する可能性はあるものの、柱穴列として報告する。

<重複関係>なし。

<概要>内側の柱穴2個(P1・2)が外側の2個(P3・4)より規模が大きく、柱間も内側と外側で異なる。P3からP4までの柱間は812cm、P1・2間は563cm、P1・3間は128cm、P2・4間は121cmである。検出面からの深さもP3・4は6~16cmと浅いのに対して、P1・2は約30cmと深い。また、P1のみ底面に径約30cmの柱当たりが確認できる。埋土はいずれも小礫が多く混入する暗褐色土の単層である。全容は把握できないが、以上の配置規模から二面に庇の付属する掘立柱建物跡の可能性が考えられる。

<出土遺物>なし。

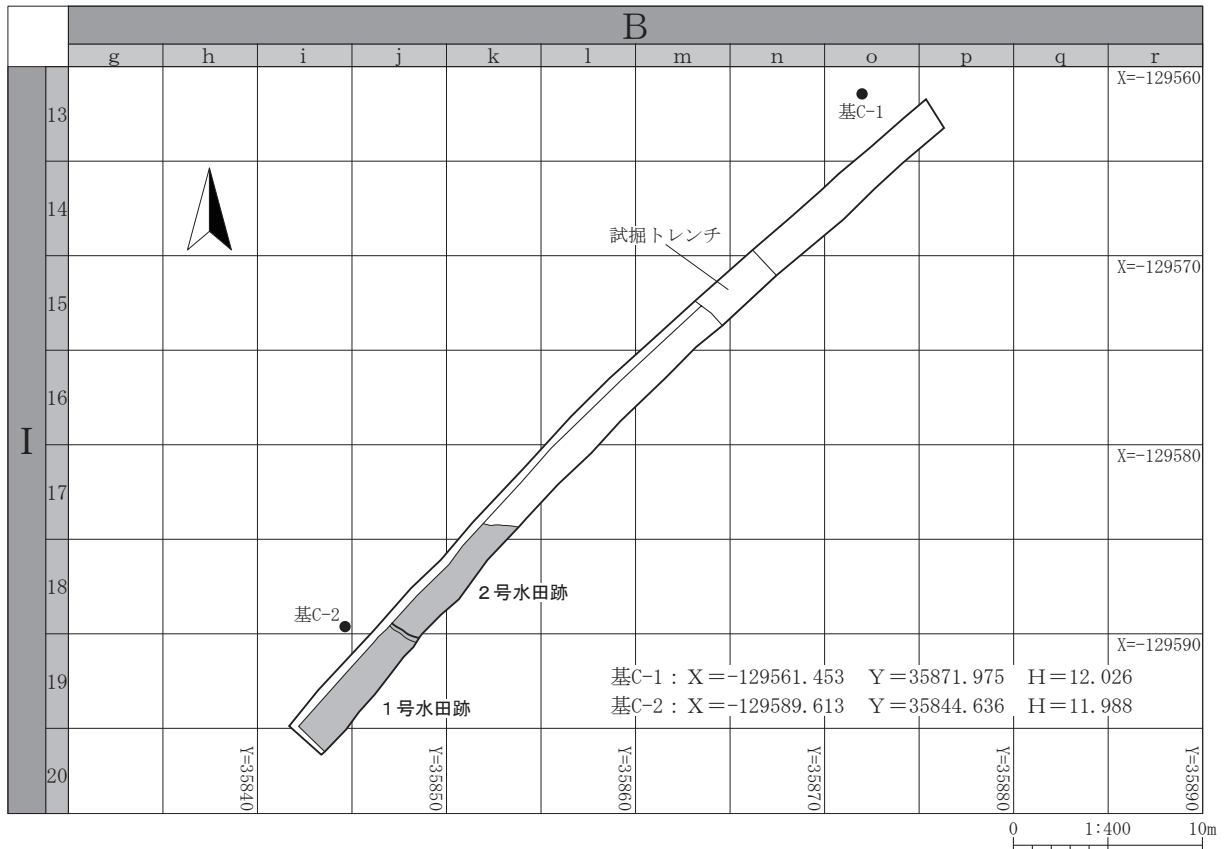
<時期>不明。

(2) 小 野 II 遺 跡(第12図)

1・2号水田跡(第13図、写真図版6)

小野II遺跡の調査区の南西側、台地裾の低地部分であるIB20i~17kグリッドに位置し、IV層の上・下面で検出した。本遺構は、県教委生文課の試掘調査の際、埋土表面に十和田a火山灰(IV層)と思しきものが被覆した、不整な小区画範囲(水田状遺構)として確認されていた部分が含まれている。この試掘成果を元に、調査開始時に試掘トレンチを再掘し、水田状遺構部分の確認を行った。次に、調査区壁際に基本層序観察用のサブトレンチを設定し、Ⅲ層まで掘り下げを行った。その結果、I層は表土、Ⅱ層は盛土、Ⅲ層は十和田a火山灰降下後の密度の薄いプライマリーな遺物包含層と判明したため、Ⅲ層相当面直上まで重機による表土および盛土の除去を行った。その後、再び基本層序観察用のサブトレンチを設定し断面観察を行ったところ、IV層が部分的に視認できた。このIV層部分が試掘調査時に確認されていた水田状遺構である。また、調査区南西側のⅢ層直下で、一部畦畔とも取れる高まりと共に火山灰ブロックを含む人為的な層を視認した。このことから、当初、想定していたIV層下面の水田跡の他に、IV層よりも新しい段階の水田跡がある可能性が考えられた。調査の結果、1・2号水田跡共に平面的には明瞭な区画や農作業の痕跡などは確認できず、今回の調査で水田跡とした判断は、花粉分析と植物珪酸体分析の結果によるものである。

なお、調査時にV層はa・bに細分し、1号水田跡の水田耕作土=Va層、1号水田跡より下層=Vb層として捉えている。しかし、分析の結果、1号水田跡中の分析サンプルA地点のVa層は水田耕作土、また、2号水田跡中の分析サンプルB地点のVb層も水田耕作土の可能性があるが、2号水田跡より北東側の分析サンプルC地点のVb層では水田稲作は行われていなかったと考えられる。このことから、後者のVb層はプライマリーなV層=Vc層となると考えられる。



第12図 小野II遺跡一遺構配置図

1号水田跡

<位置・検出状況> I B 20 i ~ 19 i ~ 19 j グリッドに位置し、Ⅲ層直下のV a層上面で検出した。

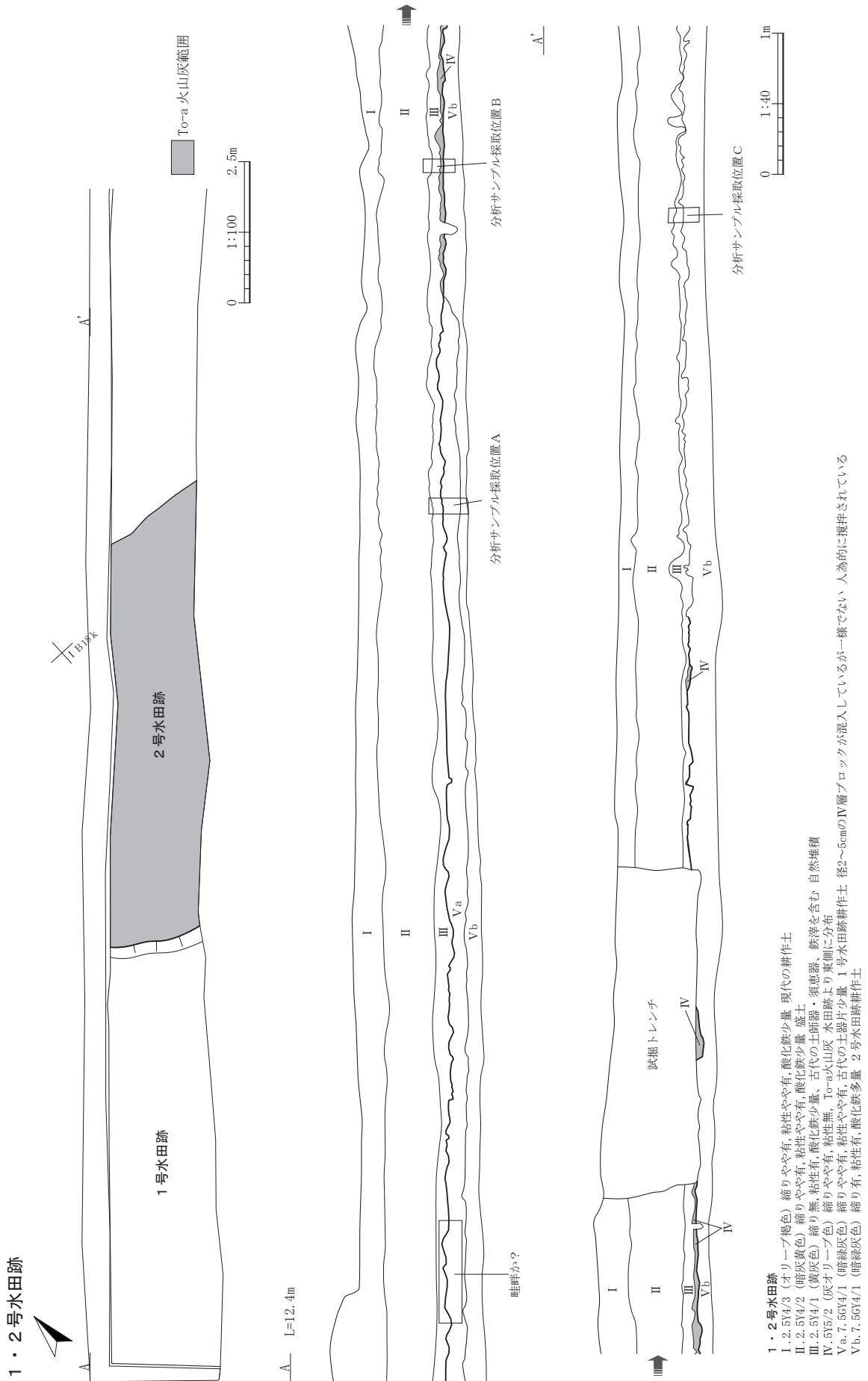
<重複関係> 2号水田跡と重複し、本遺構が切っている。

<平面形・規模> 平面形・規模は調査区が幅約3mと狭いため全容は不明であるが、断面観察の結果、畦畔と視認した部分からV a層が確認できた範囲を一区画とすると、確認できた幅は6.6mである。畦畔の水田面との比高差は5.1cmである。水田面の標高値は11.25~11.27mで南西側が高く、北東側が低い。

<埋土> 径2~5cmのIV層ブロックが混入している暗緑灰色粘質土で、人為的に攪拌されており、古代の土器片が混じる。

<出土遺物> 遺物は、土師器の甕形土器片と坏形土器片、須恵器の甕形土器片が出土し、総量は約0.3kgである。出土重量の比率は須恵器甕類が全体の88%を占め、その他はそれぞれ9%前後である。掲載した土器は、出土層位が水田耕作土のため土師器類はやや磨滅した小片が多いため掲載できず、須恵器の甕(65~67)に偏った。おそらく、北東台地上の居住区の可能性が高い遺跡主体部からの流れ込みと思われる。

<時期> 分析結果より、十和田a火山灰降下後に耕作されていたことと出土遺物から、10世紀前葉以降であると思われる。



第13図 1・2号水田跡

2号水田跡

＜位置・検出状況＞ I B18j～18k～17k グリッドに位置し、IV層直下のVb層上面が水田面と思われる。前述の通り、水田跡と思われる範囲は、全体的にIV層に被覆されていた。IV層を除去し、Vb層上面で精査を行ったが、調査時には十和田a火山灰降下以前の農作業の痕跡などは確認できず、調査終了後の分析結果から水田跡と認識した。

＜重複関係＞ 1号水田跡と重複し、本遺構が切られている。

＜平面形・規模＞ 平面形・規模は調査区が幅約3mと狭いため全容は不明であるが、IV層が平面的に確認されている範囲が水田跡とすると、幅7.9mである。

＜時期＞ 分析結果より、十和田a火山灰降下前に耕作されていた可能性があることから、10世紀前葉以前であると思われる。

4 出土遺物 (第14～21図、写真図版7～11)

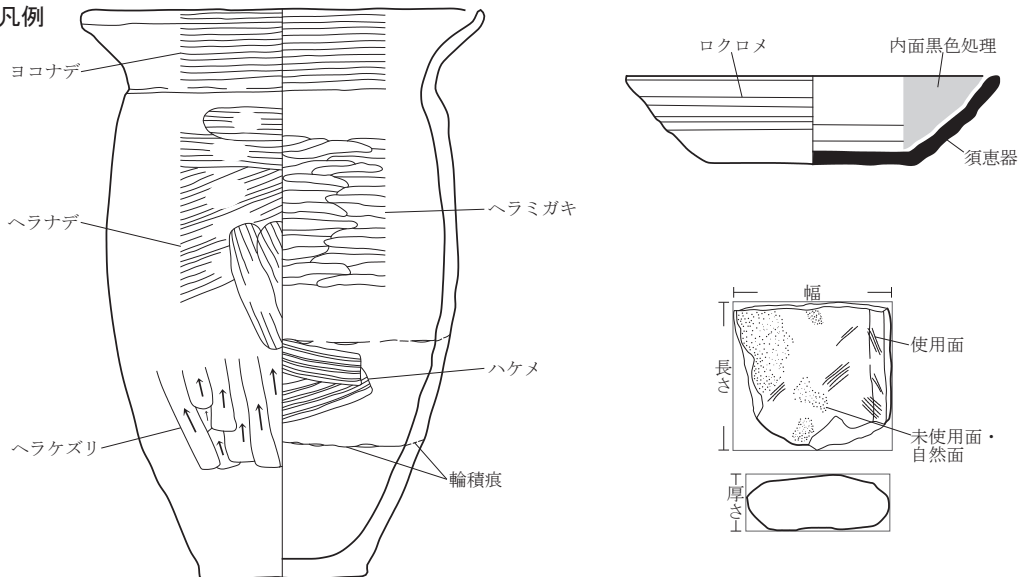
今回の発掘調査では縄文時代と古代の遺物が中コンテナで2箱程度、重量にして総量で約15kg出土した。内訳は小野遺跡が約14kg、小野II遺跡が約1kgである。このほか現地は調査区も含め、ほ場整備事業が進められており、調査区及び周辺で客土から土器類を約1kgほど表採している。

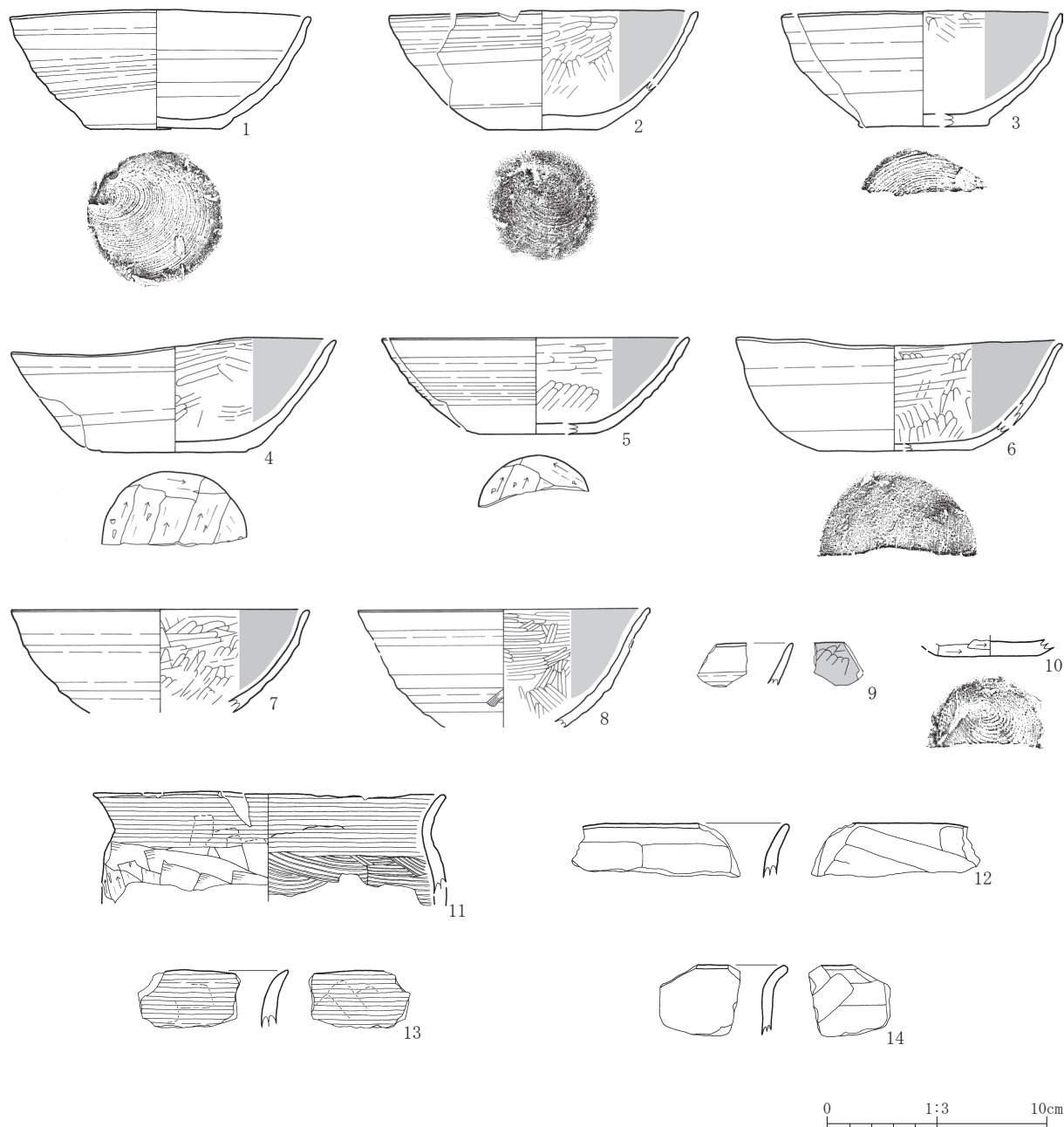
小野遺跡の内訳は、古代の土器類が約12.5kg、土錘1点、砥石3点、鉄滓2点、縄文土器数点約70gが出土した。昭和の開墾により遺構掘削面としての過去の生活面がほとんど消失しており、約12kgの遺物が堅穴住居跡等の遺構内からの出土であった。遺構外出土は近現代畑跡と盛り土から土器類が約2kgほどとかなり少ない。

小野II遺跡では、調査地が古代の水田跡ということもあって土師器類はやや摩滅した小片が多く、必然的に掲載した遺物は須恵器の甕の破片に偏った。土器類以外に炉壁片1点が出土している。立地的に遺物はすべて北側台地上の居城区と思われる遺跡主体部からの流れ込みと思われる。

小野・小野II遺跡合わせて古代の遺物を中心に83点を図示した。重量比としては全出土遺物の約4割を掲載している。鉄滓類については写真のみの掲載とした。土器類以外の遺物は種類・数量とも極めて少なく、傾向等を捉えがたいことから分類記載は行わず、表での個別説明とした。表中の法量の()は推定値、〈 〉は残存値である。

遺物図 凡例

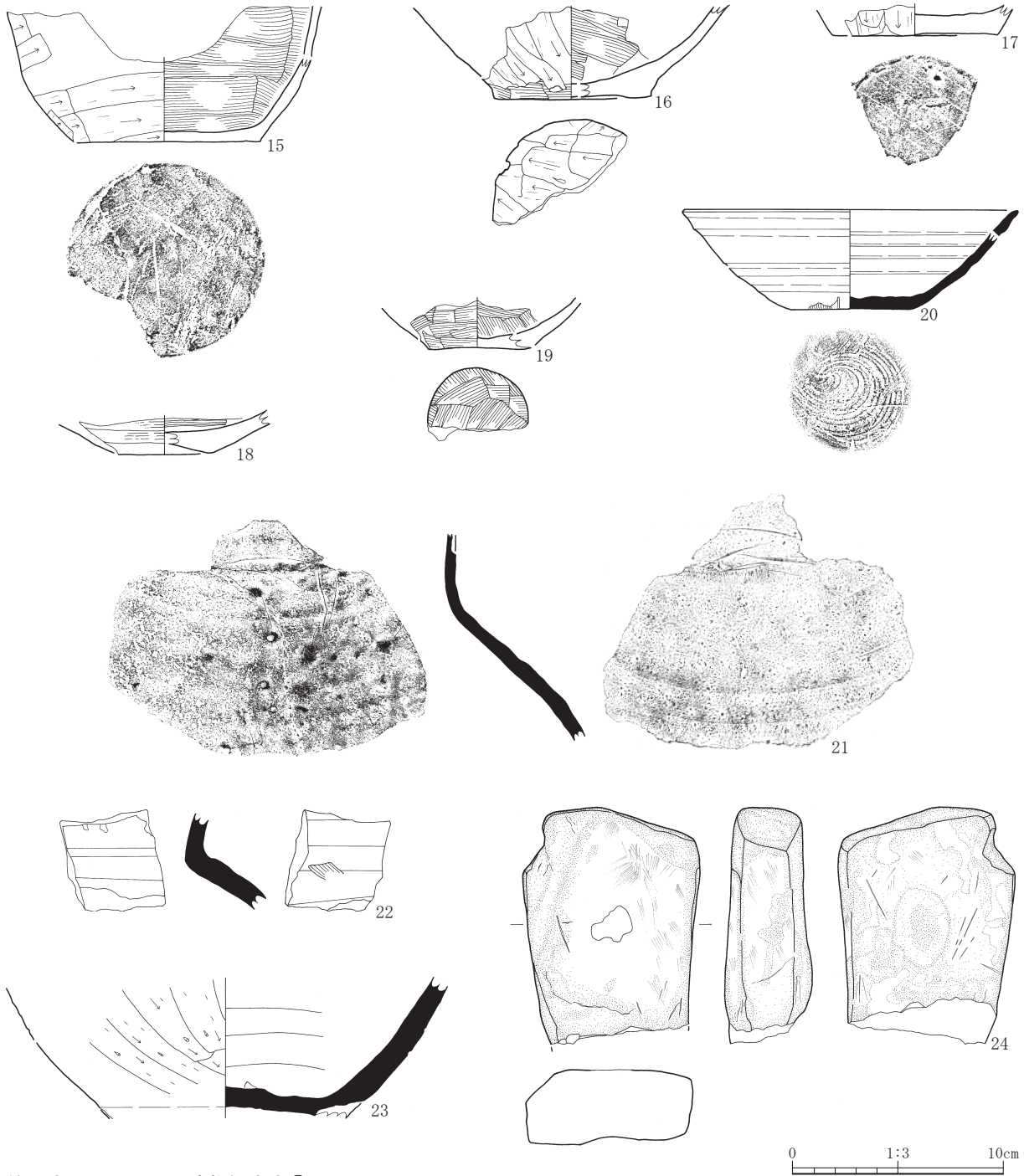




第3表 S I 01出土遺物観察表①

No.	遺構名	出土地点・層位	器種	部位	法量 (cm)			調整技法	備考
					口径	器高	底径		
1	SI01	RP02、埋土南側、K2検出面、カマド北西区焼土・炭化物層	土師器 坏	口縁～底部	13.6	5.4	6.0	ロクロナデ/ロクロナデ/回転糸切り痕	歪み有
2	SI01	RP03、埋土南側、北側埋土	土師器 坏	口縁～底部	(14.0)	5.4	(5.0)	ミガキ/ロクロナデ/回転糸切り痕	内面黒色処理
3	SI01	カマド-RP08	土師器 坏	口縁～底部	(12.4)	5.2	(5.3)	ミガキ/ロクロナデ/回転糸切り痕	内面黒色処理・内面一部被熱のため黒色処理とぶ
4	SI01	カマド-RP08、埋土、カマド北東区焼土炭化物層	土師器 坏	口縁～底部	(14.7)	5.2	(6.6)	ミガキ/ロクロナデ/再調整(手持ちヘラケズリ)	内面黒色処理・歪み有
5	SI01	K2-RP02、埋土南側、K2-RP05、カマド北東区焼土・炭化物層	土師器 坏	口縁～底部	(14.0)	4.4	(5.2)	ミガキ/ロクロナデ/再調整(手持ちヘラケズリ)	内面黒色処理
6	SI01	RP06、検出面、カマド北西区焼土・炭化物層	土師器 坏	口縁～底部	(14.7)	5.0	(7.0)	ミガキ/ロクロナデ/再調整(手持ちヘラケズリ)	内面黒色処理・歪み有
7	SI01	埋土南側	土師器 坏	口縁～体部	(13.6)	<4.7>	-	ミガキ/ロクロナデ/-	内面黒色処理
8	SI01	カマド-RP10	土師器 坏	口縁～体部	(13.2)	<5.4>	-	ミガキ/ロクロナデ/-	内面黒色処理
9	SI01	埋土南側	土師器 坏	口縁部	-	<1.8>	-	ミガキ/ロクロナデ/-	内面黒色処理
10	SI01	埋土	土師器 坏	底部	-	<1.0>	(4.5)	ロクロナデ/体部下端ヘラケズリ/回転糸切り痕	
11	SI01	K2-RP03・04、K2-埋土、カマド北東区埋土(礫より外側)	土師器 甕	口縁～体部	(16.0)	<5.0>	-	ヨコナデ・ハケメ/ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラナデ/-	
12	SI01	RP05	土師器 甕	口縁部	-	<2.4>	-	ヘラナデ?/ヨコナデ?/-	磨滅激しい
13	SI01	カマド埋土	土師器 甕	口縁部	-	<2.6>	-	ヨコナデ/ヨコナデ/-	
14	SI01	埋土南側	土師器 甕	口縁部	-	<3.2>	-	ヘラナデ?・ヨコナデ/ヨコナデ?/-	磨滅激しい

第14図 S I 01出土遺物(1)

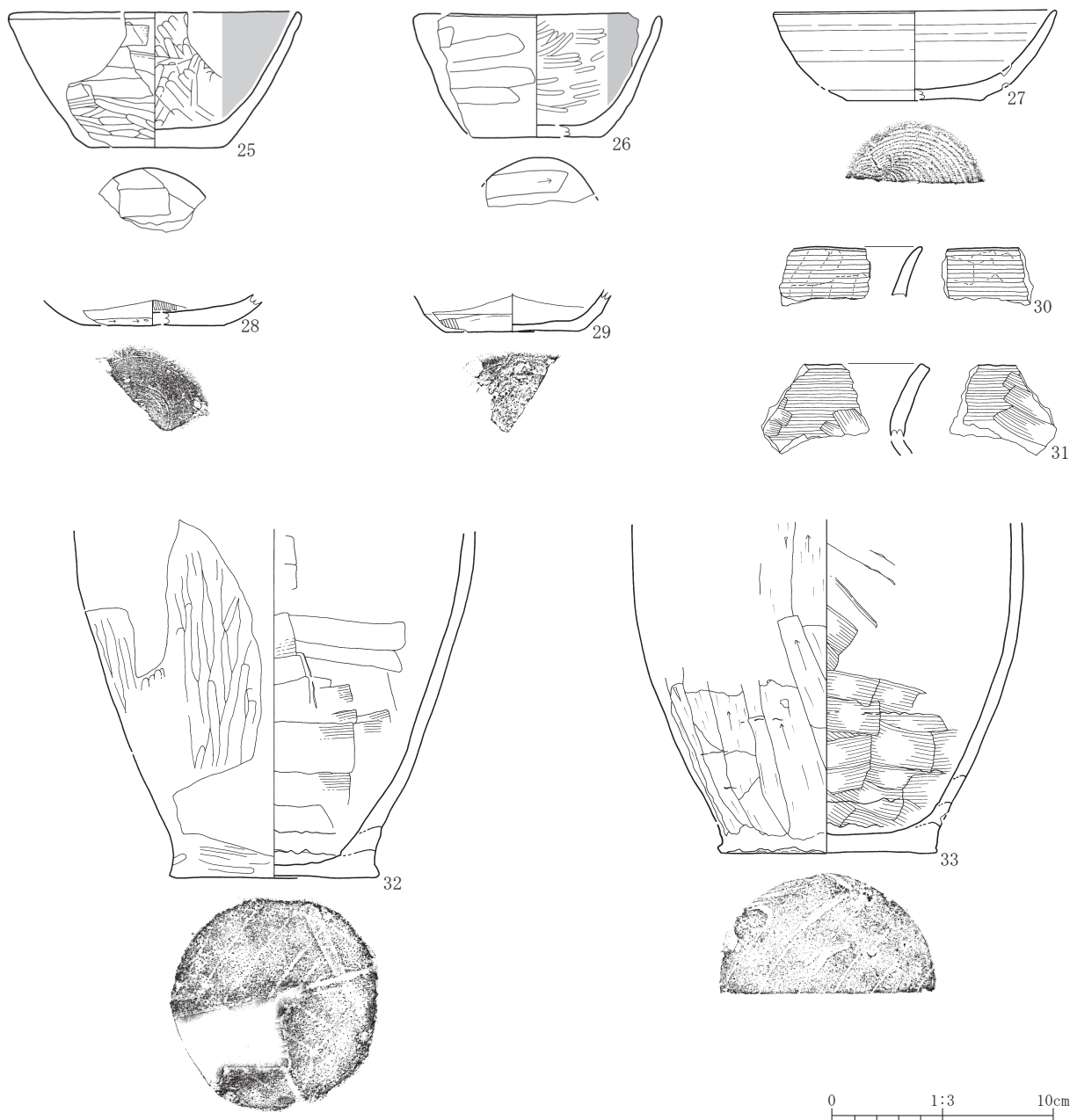


第4表 S I 01出土遺物観察表②

No.	遺構名	出土地点・層位	器種	部位	法量(cm)			調整技法		備考
					口径	器高	底径	内面/外面/底部		
15	SI01	RP01、北側埋土	土師器 甕	体部~底部	-	<6.2>	(8.8)	ヘラナデ/ヘラケズリ/木葉痕→周縁ヘラケズリ		
16	SI01	埋土南側	土師器 甕	体部~底部	-	<4.3>	(7.5)	ヘラナデ/ヘラケズリ・体部下端ナデ/ヘラケズリ		
17	SI01	K2-RP05	土師器 甕	底部	-	<1.4>	(7.8)	ヘラナデ/ヘラケズリ/木葉痕		
18	SI01	カマド焼土層、埋土南側	土師器 甕	体部~底部	-	<1.6>	(4.6)	ヘラナデ/ヘラナデ/ヘラケズリ	上げ底・球胴甕か	
19	SI01	埋土南側	土師器 甕	体部~底部	-	<2.3>	(4.7)	ヘラナデ/ヘラナデ/ヘラナデ		
20	SI01	K2-RP01、K1西側埋土	須恵器 坏	口縁部~底部	15.8	4.7	5.6	ロクロナデ/ロクロナデ/回転糸切り痕		
21	SI01	K2-RP06	須恵器 甕	頸部~体部	-	<9.7>	-	ロクロナデ/ロクロナデ/-	外面被熱	
22	SI01	RP04	須恵器 壺	頸部	-	<4.7>	-	ロクロナデ/ロクロナデ/-		
23	SI01	カマド-RP09・RP07	須恵器 壺?	体部~底部	-	<6.2>	<11.2>	ヘラナデ/ヘラケズリ/ヘラケズリ?	高台部欠損、底部剥落	

No.	遺構名	地点・層位	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質	産地	時代	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)				
24	SI01	南側1層	砥石	<10.2>	8.5	4.1	<521.4>	頁岩	北上山地	古~中生代	板状・三面局部的の使用

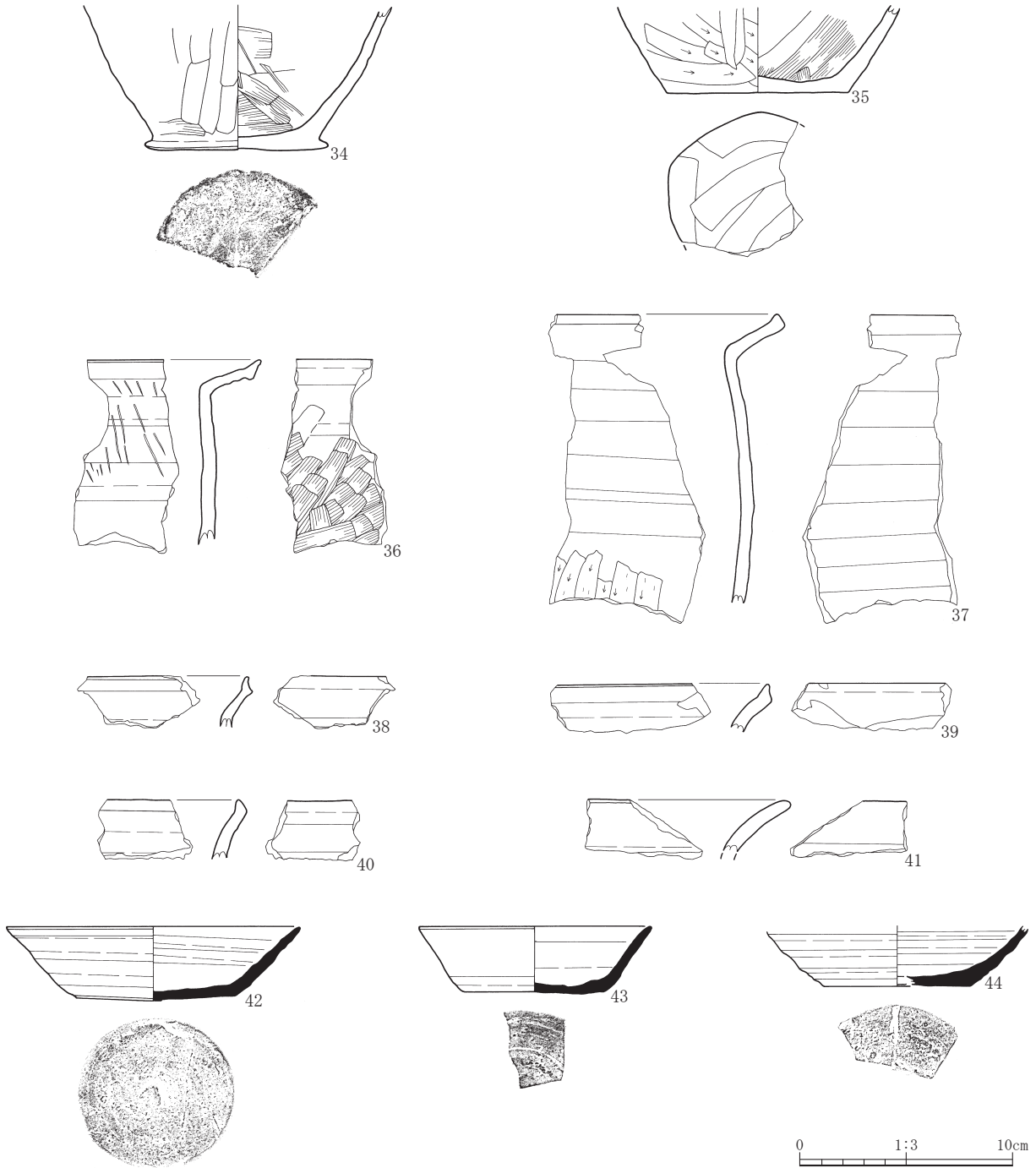
第15図 S I 01出土遺物(2)



第5表 SKI01出土遺物観察表①

No.	遺構名	出土地点・層位	器種	部位	法量(cm)			調整技法 内面/外面/底部	備考
					口径	器高	底径		
25	SKI01	RP03	土師器 坏	口縁～底部	(13.2)	6.1	(6.0)	ミガキ/ミガキ・ヘラナデ/ヘラケズリ?	内面黒色処理
26	SKI01	K1-南1層埋土	土師器 坏	口縁～底部	(11.2)	5.5	(5.9)	ミガキ/ヘラナデ?/ヘラケズリ?	内面黒色処理・外面磨滅
27	SKI01	南東床付近遺物集中区	土師器 坏	口縁～底部	(12.8)	4.0	(6.1)	ロクロナデ/ロクロナデ/回転糸切り痕	
28	SKI01	貼床土	土師器 坏	体部～底部	-	<1.4>	(6.4)	ミガキ/ロクロナデ・体部下端ケズリ/再調整(回転ヘラケズリ)	内面黒色処理
29	SKI01	南側埋土一括	土師器 坏	体部～底部	-	<1.6>	(6.0)	ロクロナデ/ロクロナデ・体部下端ケズリ/再調整(回転ヘラケズリ)	
30	SKI01	北側埋土	土師器 甕	口縁部	-	<2.4>	-	ヨコナデ/ヘラケズリ→ヨコナデ/—	
31	SKI01	K1-南側1層	土師器 甕	口縁部	-	<4.1>	-	ヘラナデ・ヨコナデ/ヘラナデ・ヨコナデ/—	
32	SKI01	RP15・17・21・22・25・26・27・30	土師器 甕	体部～底部	-	<15.8>	9.5	ヘラナデ/ミガキ/木葉痕	
33	SKI01	K2検出面、K2-南側1層、北西側2層埋土	土師器 甕	体部～底部	-	<15.1>	(9.7)	ヘラナデ/ヘラケズリ/木葉痕	

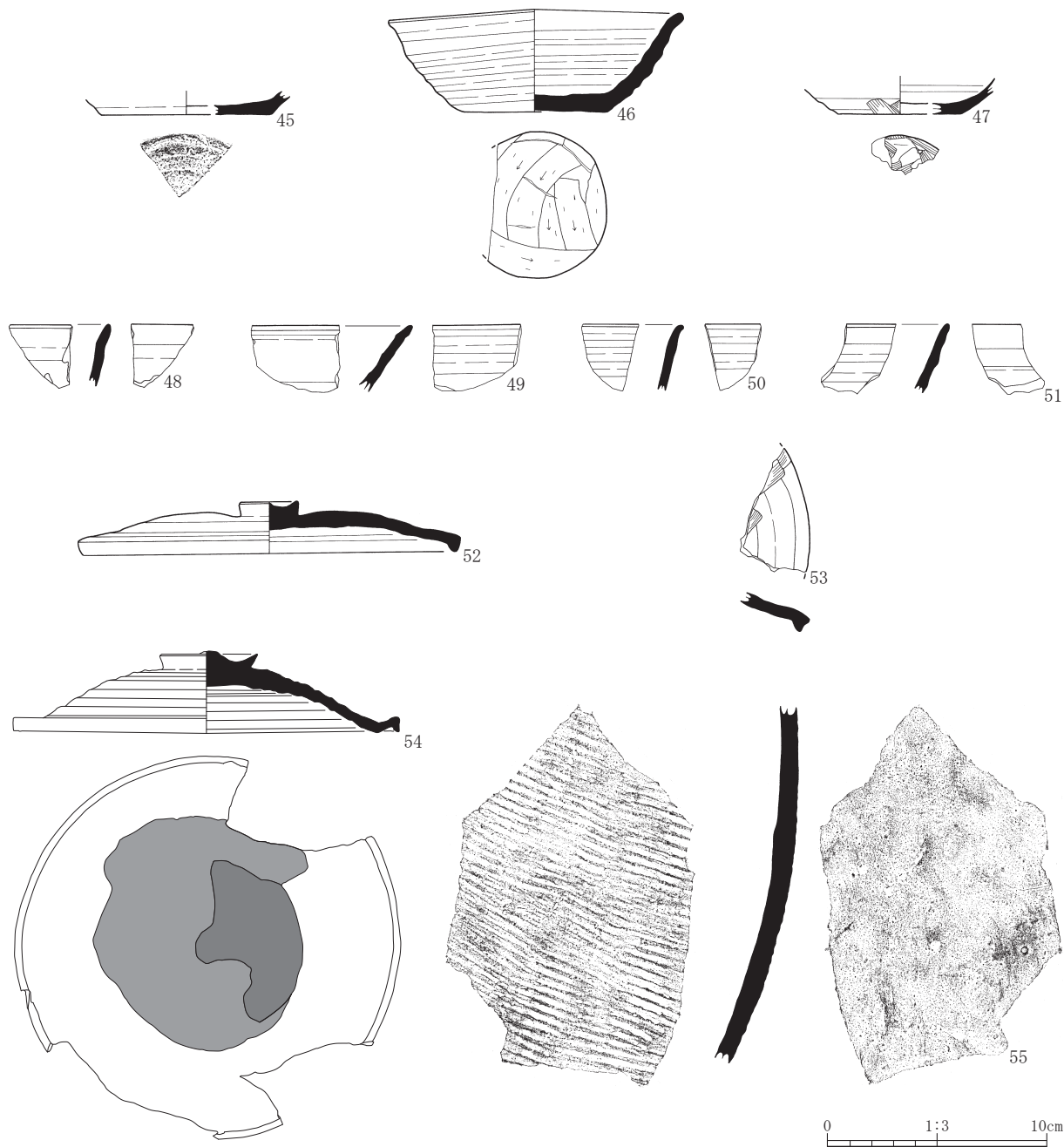
第16図 SKI01出土遺物(1)



第6表 SKI01出土遺物観察表②

No.	遺構名	出土地点・層位	器種	部位	法量(cm)			調整技法	備考
					口径	器高	底径		
34	SKI01	K6-RP01、埋土	土師器 甕	体部～底部	-	<6.7>	(8.6)	ヘラナデ/ヘラナデ?/木葉痕	
35	SKI01	K2-埋土	土師器 甕	体部～底部	-	<4.0>	(8.4)	ヘラナデ/ヘラケズリ/ヘラナデ?	
36	SKI01	K2-南側1層	土師器 甕	口縁部	-	<8.7>	-	ロクロナデ・ヘラナデ/ロクロナデ/-	外面口縁部に当て具のような痕跡?
37	SKI01	炉B埋土	土師器 甕	口縁～底部	-	<14.4>	-	ロクロナデ/ロクロナデ・ヘラケズリ/-	
38	SKI01	北側埋土	土師器 甕	口縁部	-	<2.4>	-	ロクロナデ/ロクロナデ/-	
39	SKI01	K1-南1層埋土	土師器 甕	口縁部	-	<2.2>	-	ロクロナデ/ロクロナデ/-	
40	SKI01	K5-南側埋土	土師器 甕	口縁部	-	<2.8>	-	ロクロナデ/ロクロナデ/-	
41	SKI01	K5-埋土	土師器 甕	口縁部	-	<2.8>	-	ロクロナデ/ロクロナデ/-	
42	SKI01	K3-RP03・RP02	須恵器 坏	口縁～底部	(13.8)	3.5	7.4	ロクロナデ/ロクロナデ/回転ヘラ切り?	
43	SKI01	炉B埋土	須恵器 坏	口縁～底部	(10.9)	3.0	(6.5)	ロクロナデ/ロクロナデ/再調整(回転ヘラケズリ)	
44	SKI01	RP01、Bベルト1層	須恵器 坏	体部～底部	-	<2.8>	(7.0)	ロクロナデ/ロクロナデ/再調整(回転ヘラケズリ)	

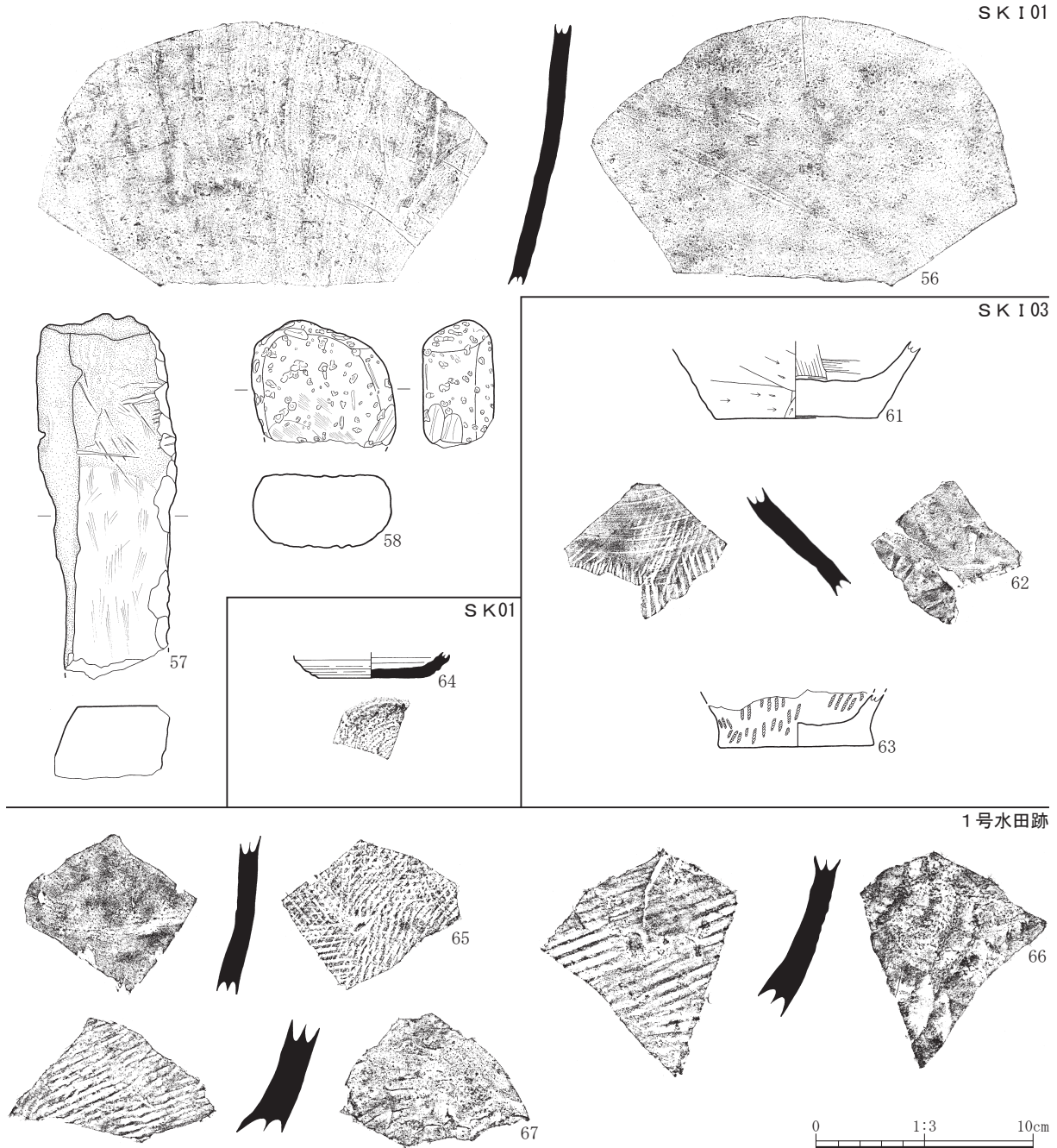
第17図 SKI01出土遺物(2)



第7表 SK I 01出土遺物観察表③

No.	遺構名	出土地点・層位	器種	部位	法量 (cm)			調整技法		備考
					口径	器高	底径	内面/外面/底部		
45	SKI01	K2北西側埋土	須恵器 坏	体部～底部	-	<1.0>	(7.8)	ロクロナデ/ロクロナデ/再調整(回転ヘラケズリ)		
46	SKI01	K5埋土	須恵器 坏	口縁～底部	13.4	4.7	6.6	ロクロナデ/ロクロナデ/回転糸切り→再調整(手持ちヘラケズリ)		
47	SKI01	K6西側埋土	須恵器 坏	体部～底部	-	<1.65>	(5.6)	ロクロナデ/ロクロナデ・ヘラナデ/再調整(ヘラナデ?)		
48	SKI01	埋土	須恵器 坏	口縁部	-	<2.8>	-	ロクロナデ/ロクロナデ/ー		
49	SKI01	北側床面	須恵器 坏	口縁部	-	<2.55>	-	ロクロナデ/ロクロナデ/ー		
50	SKI01	貼床土	須恵器 坏	口縁部	-	<3.0>	-	ロクロナデ/ロクロナデ/ー		
51	SKI01	K1南側1層	須恵器 坏	口縁～体部	-	<3.1>	-	ロクロナデ/ロクロナデ/ー		
52	SKI01	K3-RP01・RP05、K3埋土	須恵器 蓋	天井部～口縁部	(17.0)	2.3	持手の径 2.65	ロクロナデ/ロクロナデ/ー		
53	SKI01	Aべルト南1層	須恵器 蓋	体部～口縁部	-	<1.8>	-	ロクロナデ/ロクロナデ・ヘラナデ/ー		
54	SKI01	RP02・05・07・13	須恵器 蓋 (転用碗)	天井部～口縁部	15.5	3.8	持手の径 4.4	ロクロナデ/ロクロナデ/ー	内面にスリ面、墨跡あり	
55	SKI01	RP04	須恵器 甕	体部	-	<16.3>	-	ー/タタキ/ー		

第18図 SK I 01出土遺物(3)



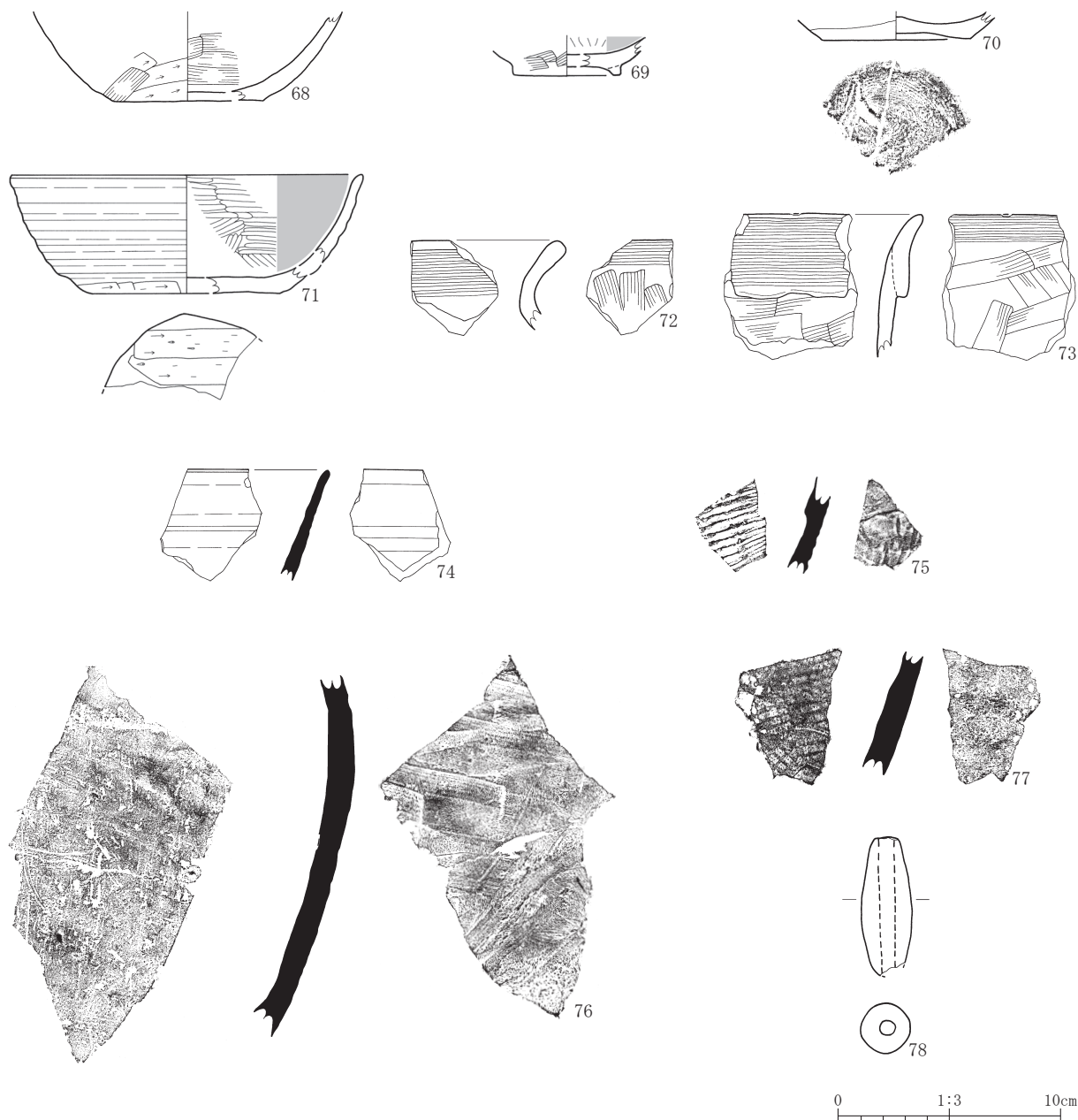
第8表 SK I 01④・03、SK 01、1号水田跡出土遺物観察表

No.	遺構名	出土地点・層位	器種	部位	法量(cm)			調整技法 内面/外面/底部	備考
					口径	器高	底径		
56	SKI01	RP06	須恵器 甕	体部	-	<12.0>	-	ヘラナデ/ヘラケズリ/ー	
61	SKI03	RP03	土師器 甕	底部	-	<3.5>	(7.5)	ヘラナデ/ヘラケズリ/ヘラケズリ?	
62	SKI03	検出までの層	須恵器 壺	体部上端	-	<5.0>	-	頸部 ナデ、体部タタキ/頸部 ナデ、体部タタキ/ー	
63	SKI03	D1-RP01	縄文土器 甕	体部~底部	-	<2.6>	7.1		
64	SK01	埋土	須恵器 坏	体部~底部	-	<1.1>	(5.0)	ロクロナデ/ロクロナデ/回転糸切り痕	
65	1号水田跡	水田跡 Va層	須恵器 甕	体部	-	<8.3>	-	当て具/ヘラナデ?/ー	小野II
66	1号水田跡	Va層	須恵器 甕	体部	-	<7.4>	-	当て具/タタキ/ー	小野II
67	1号水田跡	水田跡 Va層	須恵器 甕	体部	-	<5.1>	-	当て具?/タタキ/ー	小野II

No.	遺構名	地点・層位	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質	産地	時代	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)				
57	SKI01 K1	埋土	砥石	<16.5>	4.3	3.0	<542.7>	頁岩	北上山地	古~中生代	亜角礫・一面使用
58	SKI01	南側埋土	砥石	<5.5>	6.0	3.0	<58.5>	軽石	奥羽山脈	新生代第四紀	局部的使用

No.	遺構名	地点・層位	種類	重量	外貌状態	
				(g)		
59	SKI01	RM01	碗型鍛冶滓(含鉄少)	403.5	表面部分的に錆化青黒~赤茶、湾曲底面はやや滑らか、極めて弱く磁着	
60	SKI01	RM02	発泡滓	2.5	青黒くウレタン状の発泡	

第19図 SK I 01(4)、SK I 03、SK 01、1号水田跡出土遺物

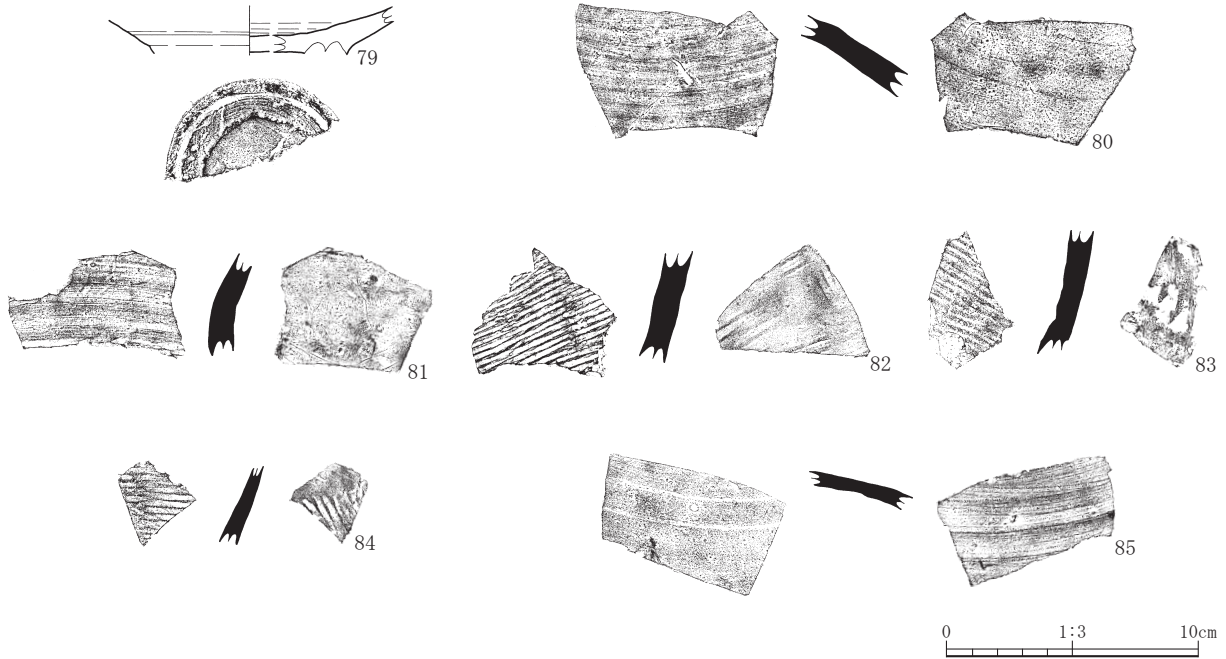


第9表 遺構外出土遺物観察表①

No.	出土地点・層位	器種	部位	法量(cm)			調整技法	備考
				口径	器高	底径	内面/外面/底部	
68	A区南部北検出面	土師器 坏?	体部~底部	-	<4.0>	(6.7)	ヘラナデ/ヘラケズリ・ヘラナデ/ヘラケズリ?	小野 遺構外
69	南部中央床土下	土師器 高台付坏	底部	-	<1.7>	(4.7)	ミガキ/ヘラナデ/不明	内面黒色処理・磨滅・小野 遺構外
70	南部中央床土下	土師器 坏	底部	-	<1.2>	(6.6)	ロクロナデ/ロクロナデ/回転糸切り痕	磨滅激しい・小野 遺構外
71	A区南部北側褐色土	土師器 坏	口縁部~底部	(15.8)	5.3	(8.4)	ミガキ/ロクロナデ・体部下端ケズリ/再調整(手持ちヘラケズリ)	内面黒色処理・小野 遺構外
72	A区南部北畑跡 畝	土師器 甕	口縁部	-	<3.9>	-	ヨコナデ/ヘラナデ・ヨコナデ/ー	小野 遺構外
73	表採	土師器 甕	口縁部	-	<6.5>	-	ヨコナデ/ヨコナデ/ー	口縁部折り返しにより外面側肥厚・小野 遺構外
74	畑跡 埋土	須恵器 坏	口縁~体部	-	<4.9>	-	ロクロナデ/ロクロナデ/ー	小野 遺構外
75	A区南 V層	須恵器 甕	体部	-	<4.05>	-	タタキ?/タタキ/ー	小野 遺構外
76	B区東 盛土~検出面層	須恵器 甕	体部	-	<16.0>	-	ヘラナデ/ヘラケズリ/ー	小野 遺構外
77	表採	須恵器 甕	体部	-	<5.0>	-	ー/タタキ/ー	小野 遺構外

No.	出土地点・層位	種類	長さ	外径	内径	重量	備考
			(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
78	A区南部北側-II b層	土錘	6.2	2.2	0.4	<27.3>	小野 遺構外

第20図 遺構外出土遺物(1)



第10表 遺構外出土遺物観察表②

No.	出土地点・層位	器種	部位	法量(cm)			調整技法 内面/外面/底部	備考
				口径	器高	底径		
79	Ⅲ層	土師器 高台付坏	体部~底部	-	<1.85>	-	ロクロナデ/ロクロナデ/ロクロナデ?	高台部欠損・小野II 遺構外
80	生文課トレンチT2付近 Ⅳ層直下	須恵器 壺?	体部上端	-	<3.25>	-	ロクロナデ/ロクロナデ/-	小野II 遺構外
81	中央 Ⅳ層上面	須恵器 壺or瓶	頸部	-	<4.05>	-	ロクロナデ/ロクロナデ/-	小野II 遺構外
82	SW側端 Ⅲ層一括	須恵器 甕	体部	-	<4.5>	-	当て具/タタキ/-	小野II 遺構外
83	SW側端 Ⅲ層一括	須恵器 甕	体部	-	<4.9>	-	ヘラナデ/タタキ/-	小野II 遺構外
84	SW側端 Ⅲ層一括	須恵器 甕	体部	-	<3.1>	-	当て具/タタキ/-	小野II 遺構外
85	西側 Ⅲ層	須恵器 壺?	体部上端	-	<1.5>	-	ロクロナデ/ロクロナデ/-	小野II 遺構外

No.	地点・層位	種類	重量 (g)	重量	外貌状態
					重量
86	小野II-遺構外	炉壁	100.3	炉壁上段部、内面側は発泡状態、粘土部は溶着滓側は還元色、外側は酸化色、スサ等不明	

第21図 遺構外出土遺物(2)

土器類は、土師器と須恵器が出土し、器種には、坏・甕・壺類・蓋がある。出土総量約13kgのうち S I 01・S K I 01からの出土が8.5kgとおおよそ2/3を占める。そのうち、S I 01の出土総量は約2.8kgで、器種毎の出土重量とその比率は、土師器坏類が約0.9kgで30%、土師器甕類が約1.2kgで43%、須恵器坏類が0.15kgで5.5%、須恵器甕類が約0.6kgで20%である。また、S K I 01の出土総量は7kg近く、出土重量とその比率は、土師器坏類が0.5kgで7%、土師器甕類が5kgで76%、須恵器坏類が0.4kgで5%、須恵器甕類が0.5kgで7%、須恵器蓋が0.3kgで5%である。S I 01・S K I 01どちらの遺構も全体の半分ほどしか調査ができず、検討する材料は少ないが、ある程度の傾向を概観することはできると思われる。本節では、両遺構から出土した土師器坏・甕と須恵器坏を中心として年代的位置づけを推定したいと思う。

S I 01・S K I 01、両遺構における出土遺物については次のとおりである。

S I 01

- ・土師器坏…全てロクロ使用で、底部に手持ちヘラケズリによる再調整がみられ、いずれも内面黒色処理が施されているもの(4・5・6)や、底部の切り離し技法が回転糸切り無調整で、内面黒色処理が施されているもの(2・3)とそうでないもの(1・27)。

- ・土師器甕…ロクロ不使用のもののみ(11・15・16・18・19)。中でも16・18のように体部~底部の

資料になるが、球胴甕と思われるものがみられる。

- ・須恵器坏…ロクロ使用で、底部の切り離し技法が回転糸切り無調整のもの(20)。

S K I 01

・土師器坏…ロクロ使用で、底部に回転ヘラケズリによる再調整がみられ、内面黒色処理が施されているもの(28)とそうでないもの(29)、ロクロ不使用の平底と思われるもの(25・26)もある。

・土師器甕…ロクロ不使用のもの(32・33・34・35)とロクロ使用のもの(36・37)。32・33・34は底部に木葉痕がみられる。

・須恵器坏…全てロクロ使用で、底部の切り離し技法が回転ヘラ切り無調整のもの(42)や、底部に手持ちヘラケズリによる再調整がみられるもの(46)、回転ヘラケズリによる再調整がみられるもの(43・44・45)。

・須恵器蓋…いずれもロクロ使用(52・54)。52はかえりがなく、つまみが扁平な擬宝珠形である。54は転用硯である。

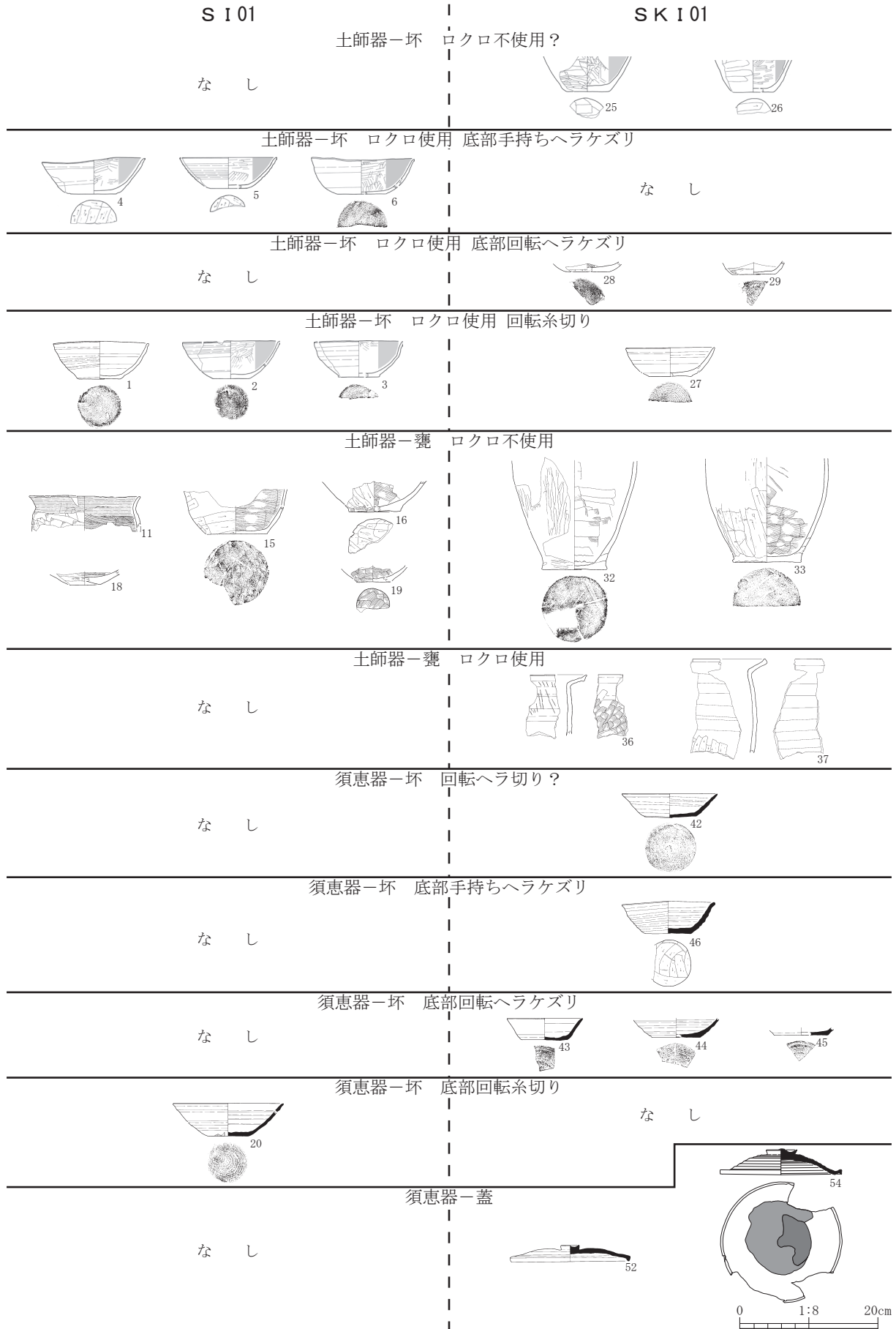
以上の状況を踏まえて、第22図の分類図に示した通り、S I 01・S K I 01、両遺構から出土した資料を先学の研究成果による遺物年代観と対比して大まかな位置づけを行いたいと思う。本遺跡は古代の城柵官衙遺跡である宮城県栗原市伊治城跡に近く、出土遺物の様相も類似していると思われる。しかし、本遺跡の出土遺物は比較する器種のバリエーションが少なく、推定根拠にするには厳しい。そのため、ここでは本遺跡と隣接する宮城県域の研究(白鳥1980)を参照する。

白鳥良一は、土師器・須恵器・須恵系土器の坏の制作技法の共伴関係による分類を行い、それに他器種の共伴関係を重ね、A～F群まで分類している。分類の中心となる坏類の大まかな特徴と年代は次の通りである。

- ・A群土器(8世紀前半～後半)－土師器：ロクロ不使用、須恵器：ヘラ切り主体、須恵系：なし
- ・B群土器(8世紀末)－土師器：ロクロ不使用+ロクロ(底部再調整)、須恵器：ヘラ切り主体、須恵系：なし
- ・C群土器(9世紀前半)－土師器：ロクロ(体部下端や底部に回転ヘラケズリ再調整)、須恵器：ヘラ切り主体(無調整)、他に糸切り無調整、底面全面を手持ち・回転ヘラケズリのものも有り、須恵系：なし
- ・D群土器(9世紀後半)－土師器：ロクロ(糸切り無調整、底部全面手持ちヘラケズリ主体)、須恵器：糸切り主体(無調整)、須恵系：なし
- ・E群土器(10世紀前半から後半)－土師器：ロクロ(糸切り主体)、須恵器：極めて少ない(糸切り主体)または殆ど共伴しない、須恵系：坏類のみ
- ・F群土器(11世紀～12世紀)－土師器坏：ロクロ(糸切り)、須恵器：極めて少ない(糸切り主体)または全く共伴しない、須恵系：台付皿+小皿+坏

まず、S I 01・S K I 01、両遺構の土師器坏は確実にロクロ不使用と言えるものが出土していない。また、土師器坏の底部切り離し技法は、多少の違いはあるが、底部に手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリを施した底部再調整のものと回転糸切り無調整のものがある。須恵器坏は、底部切り離し技法が回転ヘラ切り・底部再調整・回転糸切り無調整のものがあり、土師器甕は、ロクロ不使用のものと使用のものが共伴している。

今回の調査では出土した器種に偏りがあるために、比較対象とした土器群に挙げられている全ての器種が確認できていないわけではないが、上に列挙したS I 01・S K I 01出土の土器の様相は、C群土器(9世紀前半)に相当するものと思われる。



第22図 土器分類図

5 まとめ

小野遺跡及び小野Ⅱ遺跡の調査によって得られた資料は、主に古代(奈良～平安時代)の遺構と遺物である。ところで本書では地理的環境と立地状況から小野遺跡と小野Ⅱ遺跡を一体的に扱った構成としているが、野外調査段階で念頭においた集落構造として居住域と生産域という関連性にとらわれ過ぎてしまい、整理段階での方向修正が遅れたことにもよる。ご容赦願いたい。

さて、小野遺跡の主な遺構としては、古代(奈良時代～平安時代)の竪穴住居跡1棟、竪穴状遺構3棟、土坑1基、時期不明の土坑3基、柱穴列1列などがある。B区低地の柱穴列を除いて、すべて自然堤防上の微高地に立地している。前述のとおり、農作業道を境に今回のA区確認調査区以北は比較的過去の削平を免れているようで、県教委の試掘ではやや古い時代の竪穴住居跡などが10棟近く確認されている。南側は自然地形として微高地中央部分の高台では古代の遺構は完全に消失し、微高地縁辺に近い地形が下っている部分で深さのある遺構の底面部分が辛うじて検出されたものと思われる。B区低地部分や掘削により現田面より1m以上低くなっていたA区西部では雨が降ると湧水する状況であり、実際の遺跡範囲としては約三万㎡の自然堤防部分が集落(居住域)と考えられる。

小野Ⅱ遺跡では、十和田a火山灰降下の前後で水田跡が二面確認されたが、調査区の幅は2m以下で長さも10m前後と狭いため、得られた情報はほとんど無いに等しい。

遺物は、およそ中コンテナ2箱分出土したが、古代の竪穴住居跡から流れ込みと思われる縄文土器が数点のほかは、ほとんどが土師器と須恵器で小野遺跡A区南部の竪穴住居跡と竪穴状遺構の2棟からの出土遺物が大半を占める。遺構の遺存状況が劣悪であるため、遺物の種別毎の量比はあまり意味をなさないかもしれないが、重量比では全体の約8割が土師器で、土師器甕類が7割近くを占める。ただし、個体数としては、復元個体でみると土師器及び須恵器の坏類がかなり多く見受けられた。

最後になるが、遺構・遺物とも絶対量が少ないためあまり言えることもないが、小野遺跡は、出土遺物からは平安時代初頭の集落であり、鍛冶工房が存在する可能性が高く、焼失住居や廃棄された焼土や炭化物などはこれに起因するものかもしれない。僅かながら縄文土器が出土していることから、立地的に陥し穴などが存在する可能性も考えられる。

小野Ⅱ遺跡は10世紀前葉には稲作を行っており、台地上には集落が存在し、鉄生産を行っていた可能性が考えられる。

引用・参考文献

- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所
- 佐藤甲二 1999 「Ⅲ. 遺跡資料から的人类誌調査 2. 水田跡に関する擬似畦畔Bと連続耕作—仙台市富沢遺跡の事例から—」『人類誌集報 1999—漆利用の人類誌調査・飛騨山峡の人類誌調査・遺跡資料から的人类誌調査—』
- 斎野裕彦 2005 「水田跡の構造と理解」『古代文化』第57巻 第5号
- 北田 勲 2010 『中村城跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第560集

6 自然科学分析

(1) 花粉分析と植物珪酸体分析

吉川 昌信(古代の森研究舎)

1. 試料

小野II遺跡は、岩手県南部の一関市花泉町日形字小野の北上川右岸の低地に位置し、古代の水田跡と考えられる遺構が検出されている。また、本遺跡の南東側にある小野遺跡では古代の竪穴住居跡や土坑などが検出されている。ここでは水田稲作の検討と、周辺の植生や生業を復元することを目的に花粉化石と植物珪酸体化石を調査した。

分析は調査区の西側から、A・B・Cの3地点で行った。AとBは2m、BとCは4m離れる。調査地点の地質柱状図と分析試料採取層準を図1に示す。堆積物は、B地点では下位よりオリーブ灰色シルト(Vb層)、灰白色細粒火山灰(IV層; To-a)、オリーブ黒色極細粒砂質シルト(III層)からなり、To-aは層厚2~6cmで層状に堆積する。A地点は、To-aとVb層の上部を削剥して、Va層、III層の順に堆積する。Va層は灰色粘土質シルトからなり上部約6cmには円摩された軽石が多く混入し、1cm前後の小ブロックでも混じる。C地点は、Vb層をIII層が直接覆い、To-aは分布しない。なお、セクション図や堆積物の詳細な記載については考古の関係する章を参照されたい。

2. 分析方法

a. 花粉分析

花粉分析は、A地点のVa層上部(a1)、BとC地点のVb層上部(b1, c1)から採取した3試料である。花粉化石の抽出は、試料約1~2gを秤量し体積を測定後に10%KOH(湯煎約15分)、傾斜法により粗粒砂を取り除き、48%HF(約15分)、重液分離(比重2.15の臭化亜鉛)、アセトリシス処理(濃硫酸1:無水酢酸9の混液で湯煎5分)の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈しタッチミキサーで十分攪拌後、マイクロピペットで取り重量を測定(感量0.1mg)しグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、有機物量、シルト以下の細粒成分、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により750°Cで3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラートの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトのImageJで75 μm^2 より大きいサイズの微粒炭の積算面積を計測した。

b. 植物珪酸体分析

植物珪酸体分析は、花粉分析と同試料で行った。植物珪酸体化石の抽出は、試料約1gをトルビーカーにとり、過酸化水素水、6N塩酸、超音波処理の順に処理し、沈底法により10 μm 以下の粒子を除

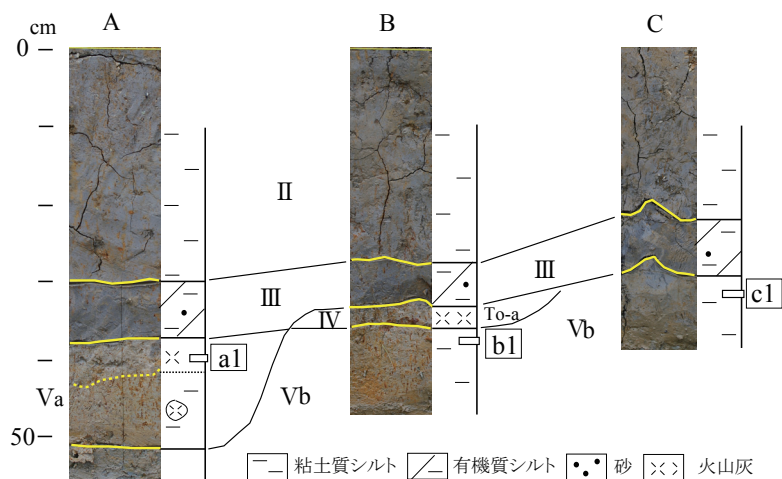


図1 小野II遺跡の地質柱状図と分析試料採取層準

去した。傾斜法により粗粒な粒子を除いた残渣を遠心管に移し、十分攪拌後マイクロピペットで取りカバーガラスに展開して乾燥させ、マウントメディアで封入してプレパラートを作製した。検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用して、主にイネ科機動細胞起源とイネ科短細胞起源珪酸体の同定・計数を行った。植物珪酸体の分類は近藤・佐瀬(1986)に基づき、タケ亜科植物機動細胞珪酸体は杉山・藤原(1986)、タケ亜科植物短細胞珪酸体は近藤・大滝(1992)による。

3. 結 果

a. 花粉化石群

分析試料の堆積物の特性を表1に示す。試料は無機物が多い堆積物からなり、シルト以下の細粒成分を主とする。A地点では円摩された軽石を比較的多く含む。

表1 分析試料の堆積物の特性(重量%)

地点	試料	層位	堆積物の特徴	砂	泥	強熱減量 (有機物量)
A	a1	Va	灰オリーブ細粒砂質シルト, 円摩された軽石混入	21.4	68.9	9.7
B	b1	Vb	オリーブ灰色シルト	3.2	85.8	11.0
C	c1	Vb	灰色粘土質シルト	2.2	87.9	9.9

出現した分類群のリストとその個数を表2に、主要花粉分布図を図2に示す。出現率は、樹木は樹木花粉数、草本胞子は花粉胞子数を基準として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだのは、分類群間の区別が明確でないものである。また、図版に示したAFR.MY番号は単体標本の番号を示す。

B地点のVb層(b1)とC地点のVb層(c1)でおおむね同様な産出傾向を示す。つまり、コナラ亜属が高率で出現し、ブナやハンノキ属、スギを比較的高率で伴う。他にモミ属、マツ属複維管束亜属やクマシデ属-アサダ属、クリ、ケヤキ属、カエデ属、トチノキなどと、常緑広葉樹のアカガシ亜属を僅かに伴う。草本は、カヤツリグサ科やイネ科(イネ型)が比較的多く、水生植物のサジオモダカ属、イボクサ属、キカシグサ属などを伴う。イネ科(イネ型)は7~9%占める。一方、A地点Va層(a1)ではコナラ亜属などの主な分類群の産出傾向は類似するがスギの頻度が幾分高くなる。また、カヤツリグサ科が高率に出現し、水生植物のサジオモダカ属が10%と幾分高い。イネ科(イネ型)は8%を占める。

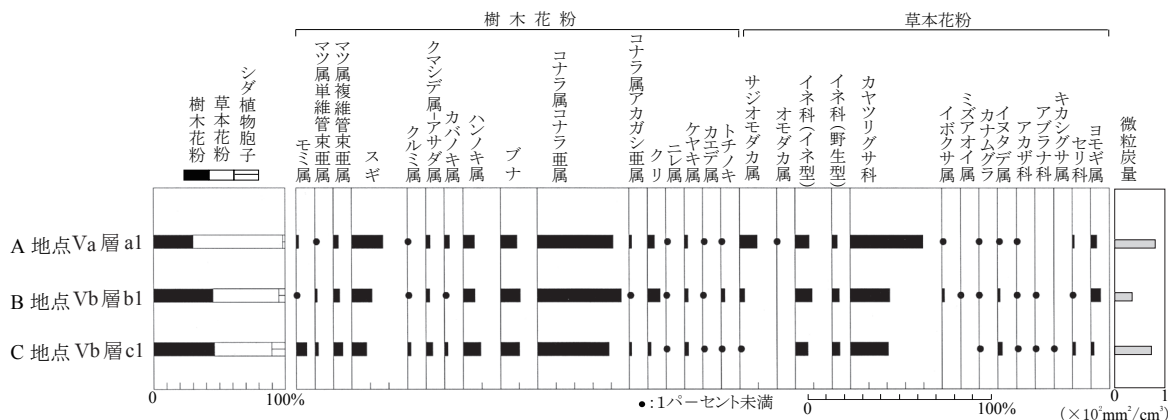


図2 小野II遺跡の主要花粉分布図

(出現率は樹木樹木花粉数、草本・胞子は花粉胞子数を基準として百分率で算出した)

表2 小野II遺跡より産出した花粉化石の一覧表

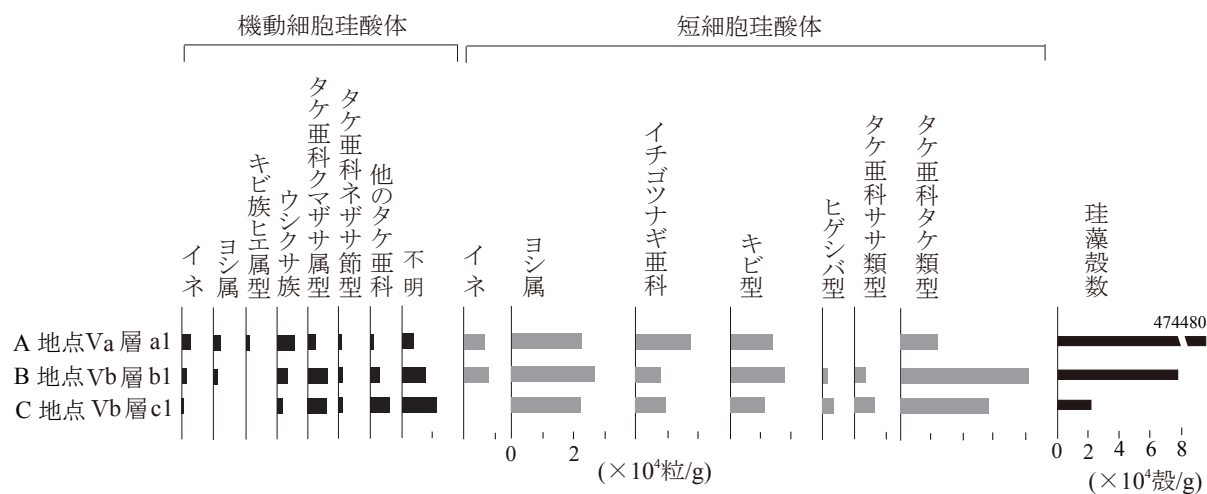
和名	学名	A-V a al	B-V b bl	C-V b cl
樹木				
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	1
モミ属	<i>Abies</i>	3	1	12
ツガ属	<i>Tsuga</i>	1	-	1
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	1	1
マツ属単維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyton</i>	2	3	4
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyton</i>	6	8	11
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	4	4	4
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> (L.fil.)D.Don	36	26	17
イチイ科-ヒノキ科-イヌガヤ科	Taxaceae - Cupressaceae - Cephalotaxaceae			
ヒノキ型	<i>Chamaecyparis</i> type	-	1	-
ヤナギ属	<i>Salix</i>	1	-	-
サワグルミ属	<i>Pterocarya</i>	1	1	2
クルミ属	<i>Juglans</i>	1	2	4
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	5	5	8
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	2	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	6	2	4
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	13	15	20
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	19	25	22
イヌブナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	1	1	1
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	87	107	83
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	3	2	3
クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	8	16	4
ニレ属	<i>Ulmus</i>	2	1	1
ケヤキ属	<i>Zelkova</i>	4	5	5
コクサギ属	<i>Orixa</i>	1	-	-
ヤマウルシ類	<i>Toxicodendron trichocarpum</i> type	-	1	1
ヌルデ	<i>Rhus javanica</i> var. <i>roxburghii</i> (DC.)Rehder et Wils.	-	-	1
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	1	-
カエデ属	<i>Acer</i>	2	1	2
トチノキ	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	1	5	1
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	2	-	-
草本				
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	67	14	4
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	2	-	-
イネ科(イネ型)	Gramineae (<i>Oryza</i> type)	54	48	32
イネ科(野生型)	Gramineae (Wild type)	21	21	20
カヤツリグサ科	Cyperaceae	280	112	96
ツユクサ属	<i>Commelina</i>	-	1	1
イボクサ属	<i>Aneilema</i>	5	7	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	-	1	-
ショウジョウバカマ属	<i>Helontopsis</i>	1	-	-
カナムグラ	<i>Humulus japonica</i> Sieb. et Zucc.	1	1	3
アサーカナムグラ	<i>Cannabis sativa</i> - <i>Humulus japonica</i>	-	2	-
クワ科-イラクサ科	Moraceae - Urticaceae	3	1	-
イヌタデ属	<i>Persicaria</i>	7	7	11
アカザ科	Chenopodiaceae	3	2	4
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	1	1
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	1	3
キンポウゲ科	Ranunculaceae	1	-	1
アブラナ科	Cruciferae	-	3	2
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	2	-
ミソハギ属	<i>Lythrum</i>	-	-	1
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	-	-	1
セリ科	Umbelliferae	8	2	8
オナモミ属	<i>Xanthium</i>	2	1	3
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	23	28	8
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	5	1
タンポポ科	Liguliflorae	-	-	2
シダ植物				
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	-	1	1
ゼンマイ属	<i>Osmunda</i>	3	1	-
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> (L.) All.	-	-	1
他のシダ植物孢子	other Pteridophyta	10	23	45
樹木花粉	Arboreal pollen	211	234	213
草本花粉	Nonarboreal pollen	480	260	202
シダ植物孢子	Fern spores	13	25	47
花粉・孢子数	Pollen and Spores	704	519	462
不明花粉	Unknown pollen	15	20	8
樹木花粉量 ($\times 10^3$ 粒/cm ³)		2.6	3.4	1.6
微粒炭量 (mm ² /cm ³)		82	36	73

b. 植物珪酸体化石群

検出した植物珪酸体の分類群のリストとその個数を表3に、植物珪酸体分布図を図3に示す。イネ機動細胞珪酸体は、A地点Va層上部(a1)で2440個/g、B地点のTo-a下位のVb層上部(b1)で1510個/g、C地点のVb層上部(c1)で320個/gである。また、イネの葉の表皮細胞には機動細胞のほか短細胞も形成され、AとB地点ではイネ短細胞珪酸体が検出されるが、C地点からは検出されない。他の植物珪酸体は、機動細胞起源はタケ亜科クマザサ属型とネザサ節型、他のタケ亜科、ウシクサ族などからなりa1とb1でヨシ属が検出された。短細胞起源では、全般にタケ亜科タケ類型が多く出現し、ヨシ属、イチゴツナギ亜科とキビ型などが検出される。一方で、a1には多量の珪藻化石が含まれるが、c1では少ない。

表3 植物珪酸体分析結果一覧表(単位は1000個/g)

分類群	A-Va a1	B-Vb b1	C-Vb c1
イネ科機動細胞珪酸体			
イネ	2.44	1.51	0.32
ヨシ属	2.68	1.58	—
キビ族ヒエ属型	1.34	—	—
ウシクサ族	5.36	3.16	1.58
タケ亜科クマザサ属型	2.68	6.31	6.32
タケ亜科ネザサ節型	1.34	1.58	1.58
他のタケ亜科	1.34	3.16	6.32
不明	4.02	7.89	11.07
イネ科短細胞珪酸体			
イネ	6.70	7.89	—
ヨシ属	22.79	26.82	22.13
イチゴツナギ亜科	17.42	7.89	9.48
キビ型	13.40	17.35	11.07
ヒゲシバ型	—	1.58	3.16
タケ亜科ササ類型	—	3.16	6.32
タケ亜科タケ類型	12.06	41.02	28.45
カヤツリグサ科	—	4.73	—
珪藻殻	474.48	77.30	22.13



4. 考 察

a. 水田稲作について

イネの機動細胞珪酸体密度が5000個/g以上の場合は数十年間にわたって稲作が行われていた可能性があり、古墳時代以降で株刈りの場合は3000個/g程度とされている(杉山, 2000)。しかし、密度は水田稲作の継続期間や堆積物により変化するためおよその目安でしかない。A地点ではイネ機動細胞珪酸体の密度が2440個/gと比較的高く、さらにイネ短細胞珪酸体を伴うため、この地点で水田稲作が行われていたと推定される。また、B地点のTo-aテフラ下位層においてもイネ機動細胞珪酸体が1510個/g含まれ、イネ短細胞珪酸体も検出されるため水田稲作が行われていた可能性が高い。一方で、Va層のイネ科(イネ型)の花粉は8%とそれ程頻度が高いわけではなく、花粉組成からはカヤツリグサ科や

サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属などの抽水植物が繁茂した状況が推定される。イネ機動細胞珪酸体も際立って多いわけではないため、水田稲作の継続期間が短いか、あるいは水田の面積が狭い、雑草の多い水田であったなどの可能性が推定される。B地点のVb層上部についても水田の状況はA地点のVa層とおおむね同様である。

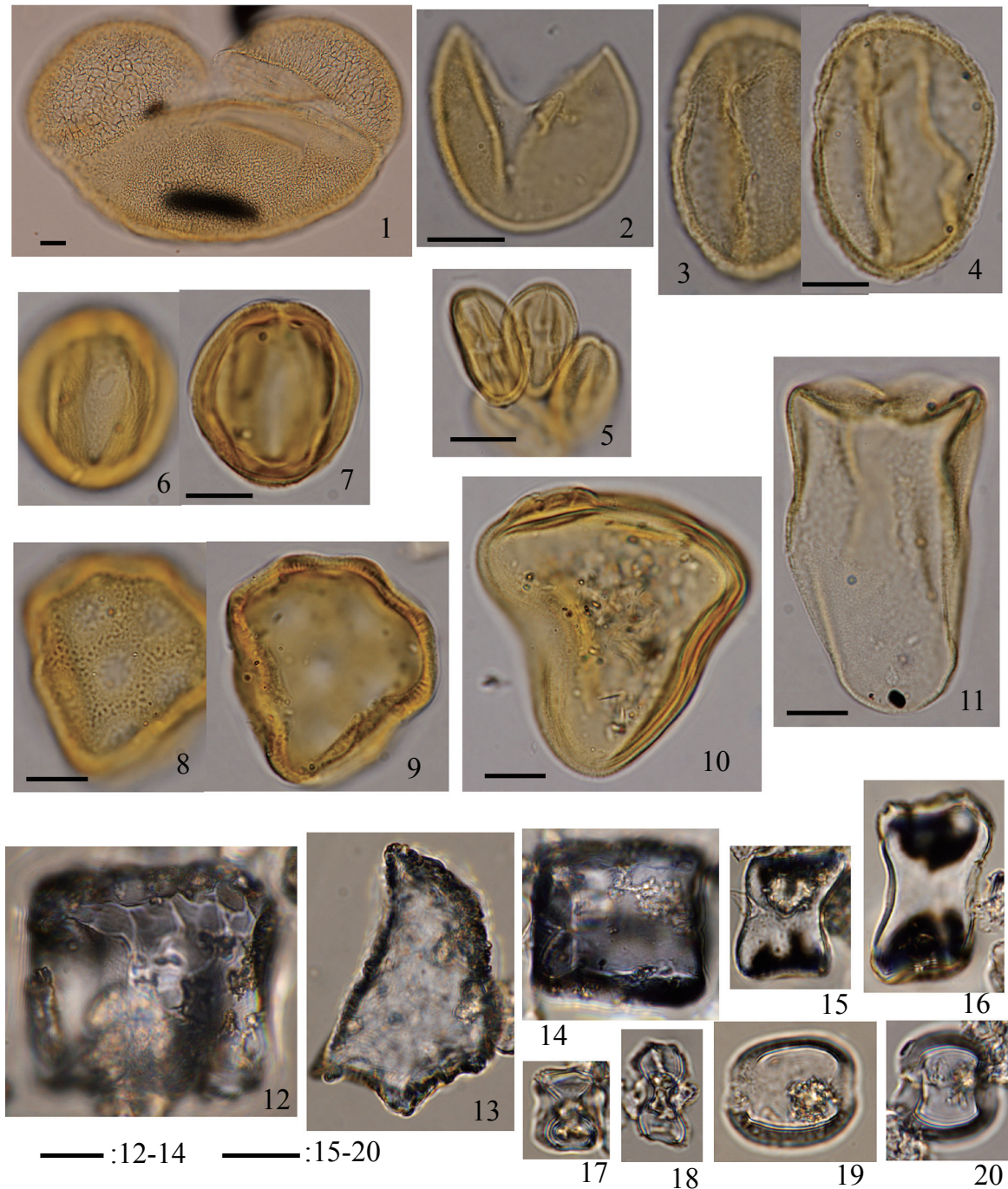
C地点のVb層ではイネ機動細胞珪酸体の密度が320個/gと低く、珪酸体の保存状態が悪い。さらにイネ短細胞珪酸体が検出されないことから、イネ機動細胞は流水により運搬堆積した異地性の化石と推定され、この地点で水田稲作は行われていなかったと考えられる。

b. 周辺の植生と生業

周辺には、落葉広葉樹のコナラ亜属を主とする森林が形成され、この森林には落葉広葉樹のブナ、クマシデ属-アサダ属、ケヤキ属、クリ、カエデ属、トチノキなど、針葉樹のスギやマツ属複維管束亜属、モミ属なども分布していたと推定される。また、水田等の低湿地の縁にはハンノキやオニグルミなども分布していた。このうちクリやトチノキなどは虫媒種で花粉の散布範囲が狭い。クリ花粉は、クリ林の周囲に落葉広葉樹林が広がっている地点においては、樹木花粉比率はクリ純林内で30%以上、林内に約25m以上入った中央部で約60%以上を占め、クリ林から離れると急減し、風下側の樹冠縁から約20mで5%以下、約200mでは1%以下とクリ花粉の散布範囲が狭いことが明らかになっている(吉川, 2011)。さらに、クリ林からの距離とクリ花粉量の関係からも飛散範囲が狭いことが実証されている(未公表)。本遺跡ではクリ花粉は4~7%であるため、分析地点から20m程度離れたところにクリ個体が分布していた可能性がある。また、本遺跡の西方約5kmにある中村城跡では9世紀後半から10世紀前半頃に低地に隣接してクリ林が形成されていたことが推定されており、周辺の丘陵にはクリが多い林が分布していた可能性がある。

引用文献

- 近藤鍊三・大滝美代子. 1992. タケ亜科植物葉身の短細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第36号, 23-43.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆. 1986. 植物珪酸体, その特性と応用. 第四紀研究, 25, 31-63.
- 杉山真二. 2000. 植物珪酸体(プラント・オパール). 「考古学と植物学」(辻誠一郎編) 189-213. 同成社.
- 杉山真二・藤原宏志. 1986. 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定 - 古環境推定の基礎資料として -. 考古学と自然科学, 19, 69-84.
- 吉川昌伸. 2011. クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況. 植生史研究, 18 : 65-76.



図版1 小野Ⅱ遺跡より産出した花粉化石と植物珪酸体化石

1: モミ属, b1. 2: スギ, c1, AFR.MY 2032. 3-4: コナラ亜属, c1, AFR.MY 2033. 5: クリ, c1, AFR.MY 2029. 6-7: ミソハギ属, c1, AFR.MY 2031. 8-9: サジオモダカ属, a1, AFR.MY 2034. 10: イネ科(イネ型), c1, AFR.MY 2030. 11: カヤツリグサ科, a1, AFR.MY 2035. 12: イネ機動細胞, b1. 13: タケ亜科クマザサ属型機動細胞, b1. 14: ウシクサ族機動細胞, a1. 15: タケ亜科タケ類型短細胞, b1. 16: タケ亜科ササ類型短細胞, b1. 17-18: イネ短細胞, 17; b1, 18; a1. 19-20: ヨシ属短細胞, 19; b1, 20; a1. スケール=10 μ m

(2) 火山灰同定

弘前大学大学院理工学研究科

柴 正敏・長沢知周

小野II遺跡より採集された、火山灰サンプル1試料について、以下の観察・分析を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて構成鉱物の種類、火山ガラスの形態を記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成及び共存鉱物などにより給源火山を推定することができる(Machida, 1999; 町田・新井, 2003)。本報告では、電子プローブマイクロアナライザー(以下EPMA)を用いて、火山灰サンプル1試料に含まれる火山ガラスの化学組成を明らかにした。その結果は表2に示した。EPMAは弘前大学・機器分析センター所属の日本電子製JXA-8230を使用した。使用条件は、加速電圧15kV、試料電流 6×10^{-9} A、ビーム径 $10 \mu\text{m}$ である。

表1 小野II遺跡出土テフラの鉱物学的記載

試料No.	ガラス及び鉱物	火山灰の帰属
小野II遺跡サンプル	ガラス(pm>bw)、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a

pm:軽石型、bw:バブルウォール型、>:より多い、To-a:十和田aテフラ

表2 小野II遺跡、火山ガラスのEPMA分析値

小野II遺跡採集火山灰試料													
		SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	n	Total	EPMA
小野II遺跡 サンプル	最小	76.15	0.26	12.27	1.64	0.03	0.38	1.83	4.37	1.37			
	最大	77.46	0.43	12.95	1.96	0.16	0.50	2.26	4.80	1.52			
	平均	76.58	0.35	12.62	1.78	0.10	0.44	2.07	4.62	1.44	18	96.76	WDS
	標準偏差	0.32	0.05	0.19	0.08	0.03	0.03	0.09	0.13	0.05			
十和田aテフラ													
青木・町田 (2006)	To-a	77.75	0.36	12.73	1.62	0.09	0.38	1.81	3.90	1.37	19	98.41	WDS
	SID 35												
	To-a	76.17	0.42	13.41	1.89	0.09	0.38	1.99	4.08	1.56	18	92.89	WDS
	SID 37												

FeO*:鉄はすべて2価として表した、n:分析粒子数、WDS:波長分散型EPMA

ガラスの形態と構成鉱物(表1)及びEPMA分析値(表2)より、十和田aテフラ起源の火山ガラスからなる。火山ガラスの形態は軽石型を主とし、褐色ガラス(オブシディアン)を含む。斑晶鉱物は、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石及び鉄鉱である。

引用文献

青木かおり・町田 洋(2006)日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成, K2O-TiO2図によるテフラの識別.

地質調査研究報告, 第57巻, 第7/8号, 239-258.

Machida, H. (1999) Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan: Recent progress.

第四紀研究, 第38巻, 194-201.

町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス, 日本列島とその周辺. 東京大学出版会, 336p.

小野II遺跡 火山灰分析値

	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
	72.805	0.387	11.849	1.864	0.083	0.370	2.080	4.432	1.435	95.305
	72.756	0.402	12.316	1.598	0.072	0.395	1.930	4.525	1.449	95.443
	73.165	0.246	12.142	1.644	0.083	0.429	1.877	4.582	1.348	95.516
	73.164	0.326	12.070	1.710	0.114	0.436	2.056	4.485	1.415	95.776
	72.570	0.372	12.341	1.680	0.091	0.390	1.995	4.430	1.427	95.296
	73.364	0.353	12.299	1.783	0.049	0.428	1.984	4.412	1.336	96.008
	75.061	0.272	11.888	1.669	0.099	0.440	1.777	4.233	1.465	96.904
	74.617	0.337	12.654	1.813	0.080	0.489	2.093	4.447	1.453	97.983
	74.416	0.303	12.291	1.827	0.084	0.451	2.203	4.410	1.330	97.315
	73.358	0.369	12.051	1.735	0.103	0.448	1.907	4.289	1.391	95.651
	74.355	0.306	12.078	1.718	0.031	0.459	2.077	4.606	1.404	97.034
	75.406	0.370	12.497	1.773	0.095	0.388	2.030	4.292	1.347	98.198
	74.248	0.340	12.226	1.713	0.092	0.390	1.957	4.462	1.420	96.848
	74.956	0.412	12.421	1.791	0.134	0.469	2.045	4.521	1.439	98.188
	74.948	0.425	12.312	1.716	0.124	0.428	1.985	4.651	1.401	97.990
	75.299	0.287	12.198	1.701	0.097	0.442	2.013	4.686	1.401	98.124
	74.372	0.310	12.051	1.630	0.151	0.413	2.001	4.520	1.331	96.779
	75.008	0.361	12.199	1.594	0.082	0.371	2.033	4.408	1.355	97.411
最小値	72.570	0.246	11.849	1.594	0.031	0.370	1.777	4.233	1.330	95.296
最大値	75.406	0.425	12.654	1.864	0.151	0.489	2.203	4.686	1.465	98.198
平均	74.104	0.343	12.216	1.720	0.092	0.424	2.002	4.466	1.397	96.765
標準偏差	0.956	0.049	0.203	0.078	0.028	0.034	0.094	0.122	0.045	1.088

100%規格化

	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
	76.392	0.406	12.433	1.956	0.087	0.388	2.182	4.650	1.506	100.000
	76.230	0.421	12.904	1.674	0.075	0.414	2.022	4.741	1.518	100.000
	76.600	0.258	12.712	1.721	0.087	0.449	1.965	4.797	1.411	100.000
	76.391	0.340	12.602	1.785	0.119	0.455	2.147	4.683	1.477	100.000
	76.152	0.390	12.950	1.763	0.095	0.409	2.093	4.649	1.497	100.000
	76.414	0.368	12.810	1.857	0.051	0.446	2.066	4.595	1.392	100.000
	77.459	0.281	12.268	1.722	0.102	0.454	1.834	4.368	1.512	100.000
	76.153	0.344	12.914	1.850	0.082	0.499	2.136	4.539	1.483	100.000
	76.469	0.311	12.630	1.877	0.086	0.463	2.264	4.532	1.367	100.000
	76.693	0.386	12.599	1.814	0.108	0.468	1.994	4.484	1.454	100.000
	76.628	0.315	12.447	1.771	0.032	0.473	2.140	4.747	1.447	100.000
	76.790	0.377	12.726	1.806	0.097	0.395	2.067	4.371	1.372	100.000
	76.664	0.351	12.624	1.769	0.095	0.403	2.021	4.607	1.466	100.000
	76.339	0.420	12.650	1.824	0.136	0.478	2.083	4.604	1.466	100.000
	76.485	0.434	12.565	1.751	0.127	0.437	2.026	4.746	1.430	100.000
	76.739	0.292	12.431	1.734	0.099	0.450	2.051	4.776	1.428	100.000
	76.847	0.320	12.452	1.684	0.156	0.427	2.068	4.670	1.375	100.000
	77.002	0.371	12.523	1.636	0.084	0.381	2.087	4.525	1.391	100.000
最小値	76.152	0.258	12.268	1.636	0.032	0.381	1.834	4.368	1.367	100.000
最大値	77.459	0.434	12.950	1.956	0.156	0.499	2.264	4.797	1.518	100.000
平均	76.580	0.355	12.624	1.777	0.095	0.438	2.069	4.616	1.444	100.000
標準偏差	0.324	0.051	0.188	0.079	0.029	0.034	0.093	0.128	0.051	0.000

V 中神四日市遺跡

1 遺跡の概観(第23図)

中神四日市遺跡は、岩手県の南側で宮城県との県境一帯を占める広大な一関市の最南端となる花泉町に所在し、JR東北本線花泉駅より東方向約7kmの地点に位置する。北緯38度50分40秒、東経141度15分30秒あたりを中心に、北上川右岸に形成された自然堤防上に立地する。調査区の標高は16m前後で、現況は休耕田である。

2 調査の概要

今回の調査は、ほ場整備に係わる農業用排水路部分について、岩手県教育委員会生涯学習文化課が実施した試掘結果により、遺構・遺物が確認された140㎡の範囲を対象として実施した。

調査区は道路区画予定部分と接する東側を除くと、幅4m×長さ40mの長方形区画である。基本層序は、Ⅰ層耕作土、Ⅱ層盛土層、Ⅲ層暗褐色砂質土層、Ⅳ層にぶい黄褐色砂層、Ⅴ層褐色砂層である。Ⅱ層はグライ化が著しく、粘質の強い土層で遺物を包含する。水田造営時の客土と判断される。Ⅲ層以下は北上川の洪水を起因とする砂層である。Ⅲ層は盛土以前の自然堆積層と思われ、層厚は約10～20cmである。Ⅳ層は本調査区内西側には存在せず、調査区中央付近から東側でのみ確認され、東方に向かって徐々に層厚が厚くなる。遺構検出面はⅣ・Ⅴ層であるが、Ⅳ層が存在しない西側ではⅤ層、それ以外はⅣ層となる。

3 検出された遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構は、土坑1基と柱穴状土坑4個である。柱穴状土坑はいずれもⅣ層面で検出したが、規模・形状・配置等に規則性は見られない。個々の詳細については第11表に記した。

遺物は遺構内からの出土はなく、遺構外から土師器片と陶磁器片が十数点出土したのみである。うちⅡ層より出土した陶磁器片1点(87)を掲載した。

S K01土坑(第24図、写真図版12)

<位置・検出状況>調査区中央、ⅢC18cグリッドに位置し、Ⅳ層面で検出した。

<重複関係>なし。

<平面形・規模>開口部径約80～95cm、底部径約55cmの略円形を呈する。

<埋土>自然堆積と思われる暗褐色砂質土の単層である。

<壁・底面>底面は北側の方が低く、北側の壁は底面から直角に近い角度で、南側は緩やかに立ち上がる。深さは約20cmである。

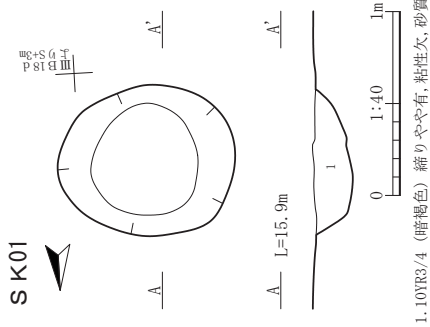
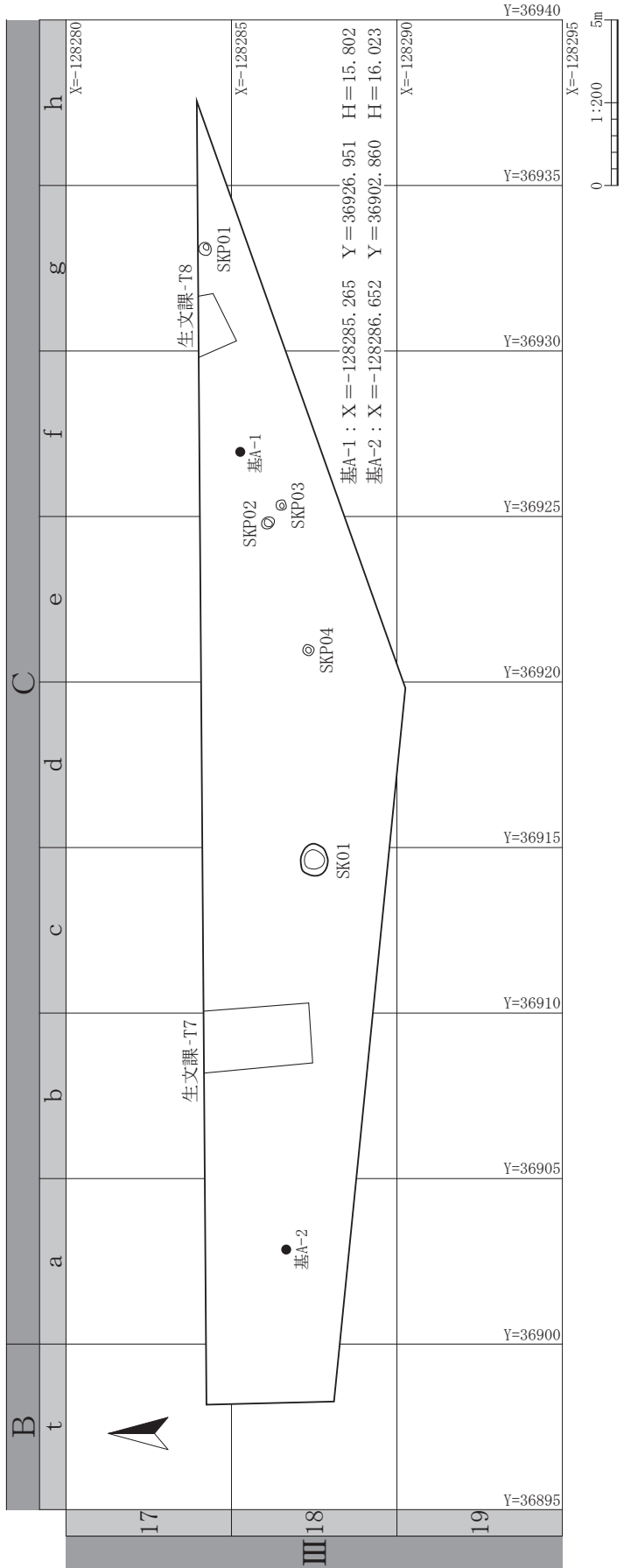
<出土遺物>なし。

<時期>不明。

3 検出された遺構と出土遺物



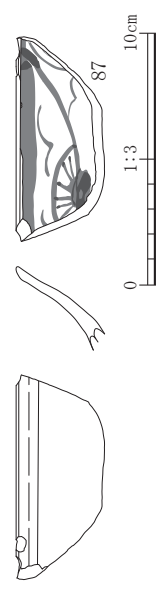
第23図 調査範囲とグリッド配置図



1.10YR3/4 (暗褐色) 綿り空含有, 粘性欠, 砂質土

第11表 柱穴状土坑一覽表

遺構名	形状 (cm)	規模 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	埋土
SKP01	円形	40	50	14.76	暗褐色砂質土
SKP02	楕円形	42×35	42	15.34	黒褐色砂質土
SKP03	円~略方形	20	29	15.44	黒褐色砂質土
SKP04	円~略方形	32	24	15.54	黒褐色砂質土



第24図 遺構配置図、SK01土坑、遺構外出土遺物

4 ま と め

今回の調査で確認された遺構は土坑1基と柱穴状土坑4個で、遺物は土師器片・陶磁器片合わせて十数点と少量である。いずれも遺構外からの出土のみで、水田造営時に入れられたと思われる盛土層からの出土であった。遺構内からの出土遺物がないため、時期の特定は困難である。地形状況や遺構密度等から、今回の調査区は遺跡範囲の縁辺にあたるものと思われる。

写真図版



小野遺跡 全景(S→)



A区南部 近景(S→)



S I 01 完掘(W→)



S I 01 遺物出土状況(SW→)



S I 01カマド 完掘(W→)



S I 01 No. 1・15出土状況(SW→)



S I 01-K 2 遺物出土状況(W→)



SK I 01 完掘(W→)



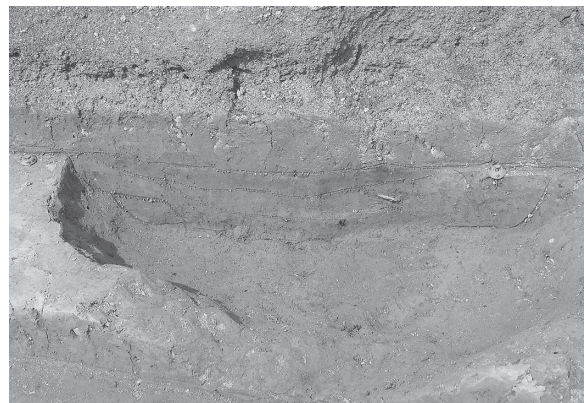
SK I 01 遺物出土状況①(W→)



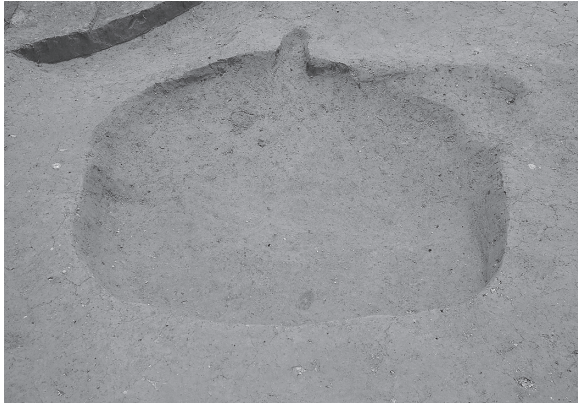
SK I 01 遺物出土状況②(W→)



SK I 01 地床炉検出状況(S→)



SK I 01 地床炉断面(W→)



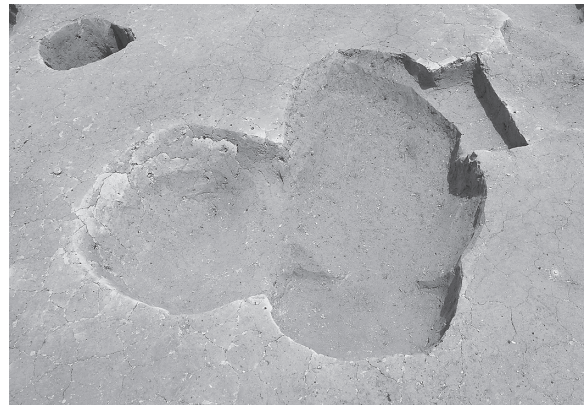
SK I 01-K 1 完掘(N→)



SK I 01-K 3 遺物出土状況(S→)



SK I 01-K 5 完掘(S→)



SK I 01-K 4・6 完掘(S→)



SK I 03 完掘(S→)



SK I 03 焼土検出状況(E→)



SK I 03 遺物出土状況(W→)

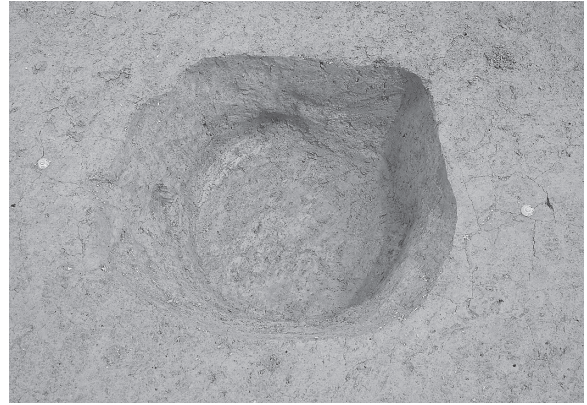


SK I 02 平面(S→)

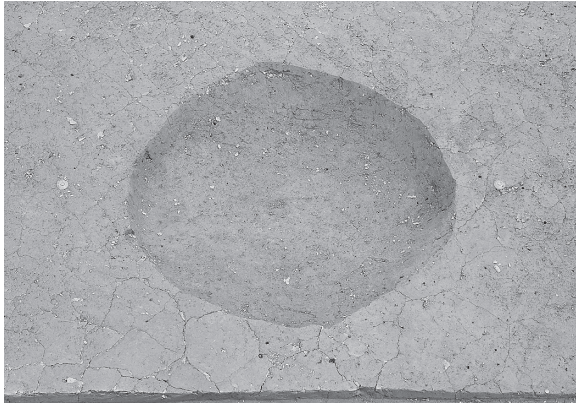
写真図版4 SK I 01(2)・02・03 竪穴状遺構



SK01 完掘(S→)



SK02 完掘(S→)



SK03 完掘(W→)



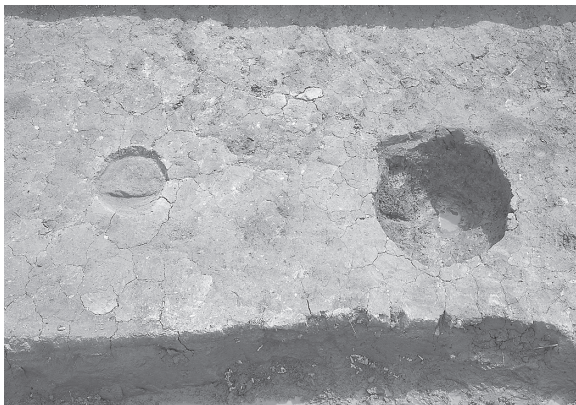
SK04 完掘(SW→)



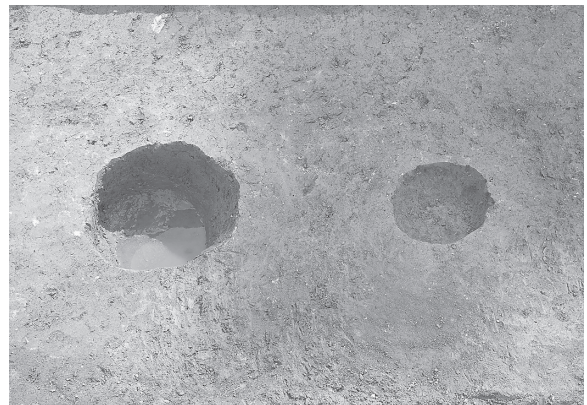
SK04 断面(SW→)



SA01 完掘(N→)



SA01-P1・3 完掘(E→)



SA01-P2・4 完掘(E→)

写真図版5 SK01~04土坑、SA01柱穴列



小野Ⅱ遺跡 全景(E→)



1・2号水田跡 平面(SW→)



1号水田跡 断面(S→)



1・2号水田跡 断面(S→)

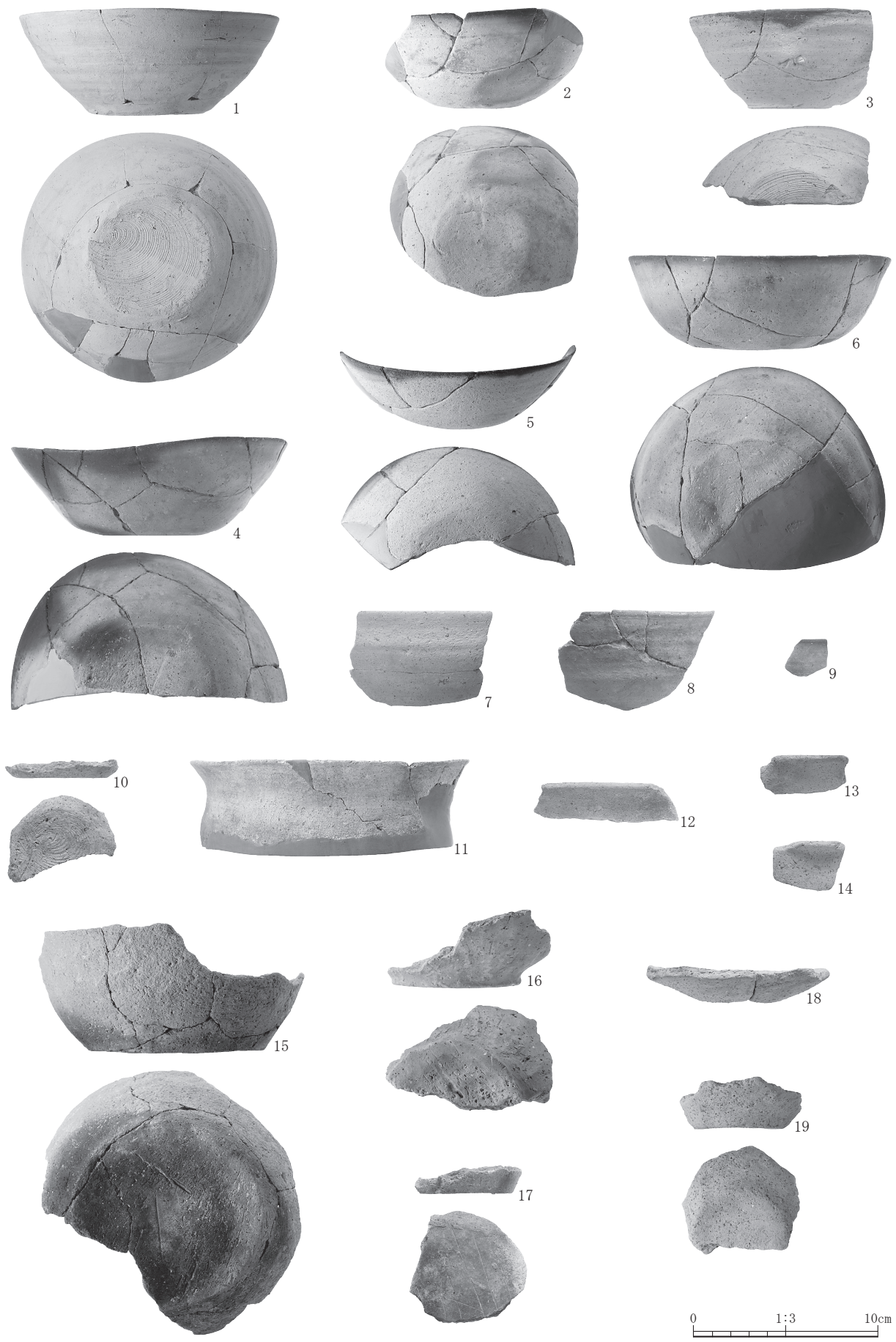


1号水田跡 検出状況(SW→)

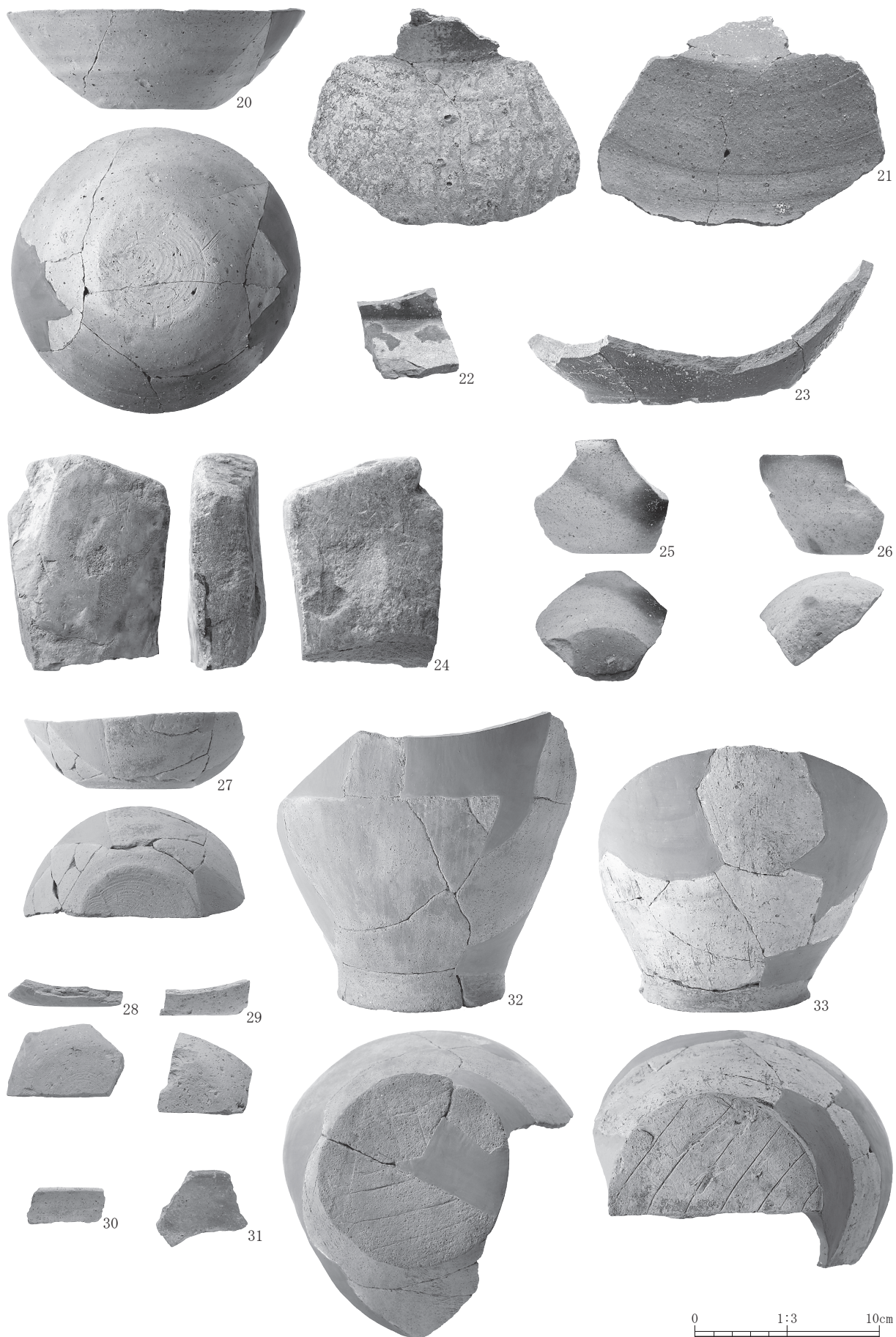


2号水田跡 検出状況(SW→)

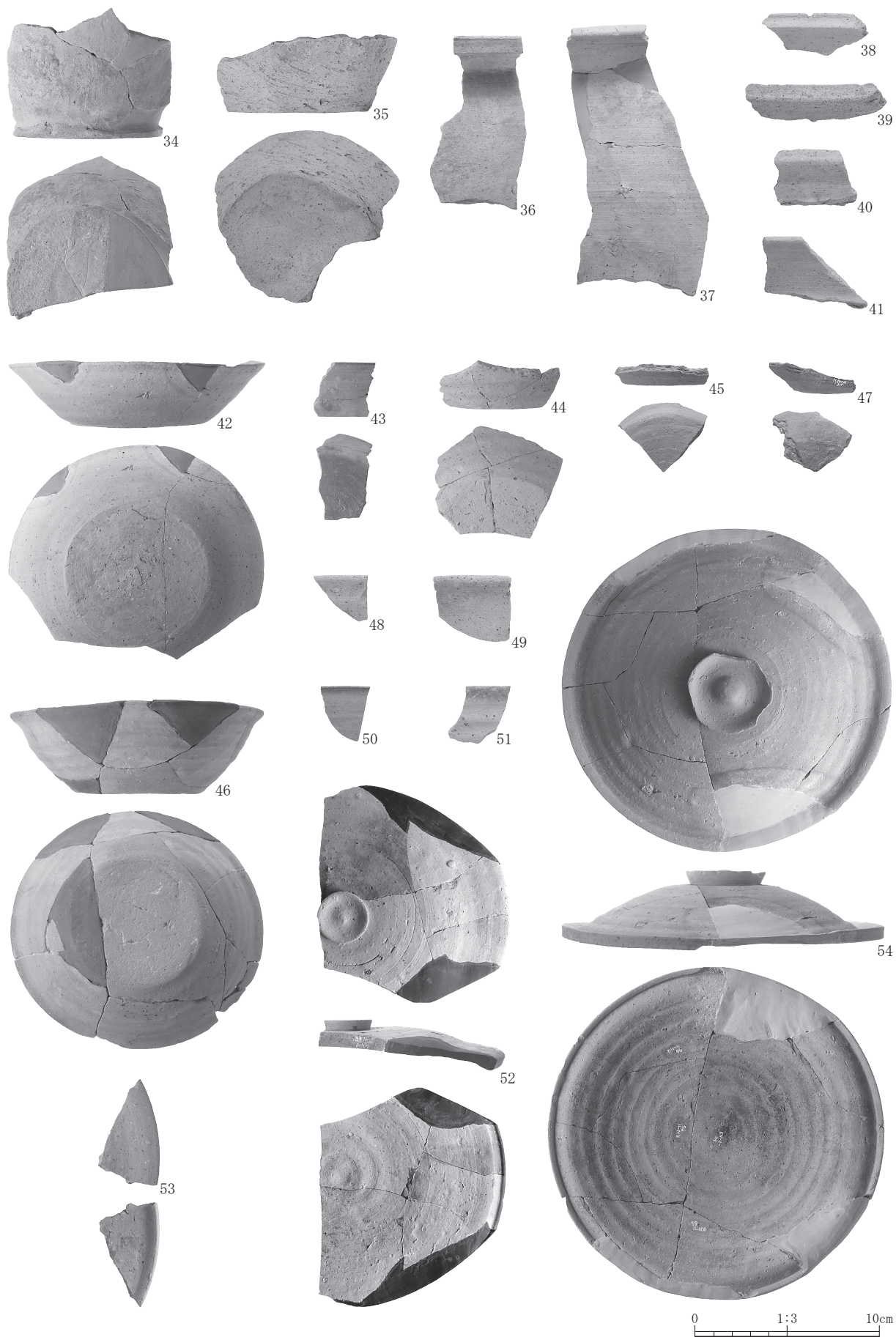
写真図版 6 小野Ⅱ遺跡全景、1・2号水田跡



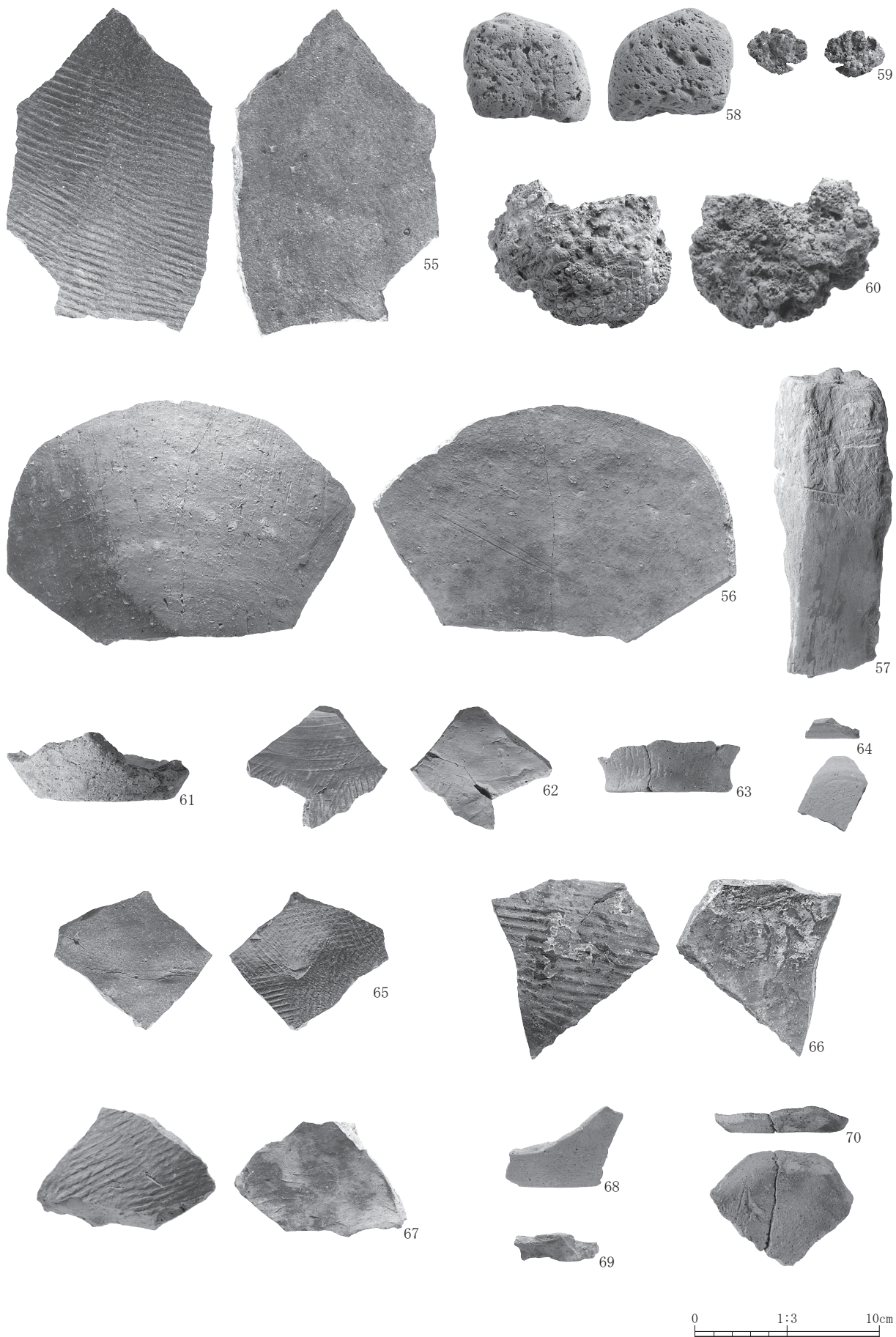
写真図版7 出土遺物(1)



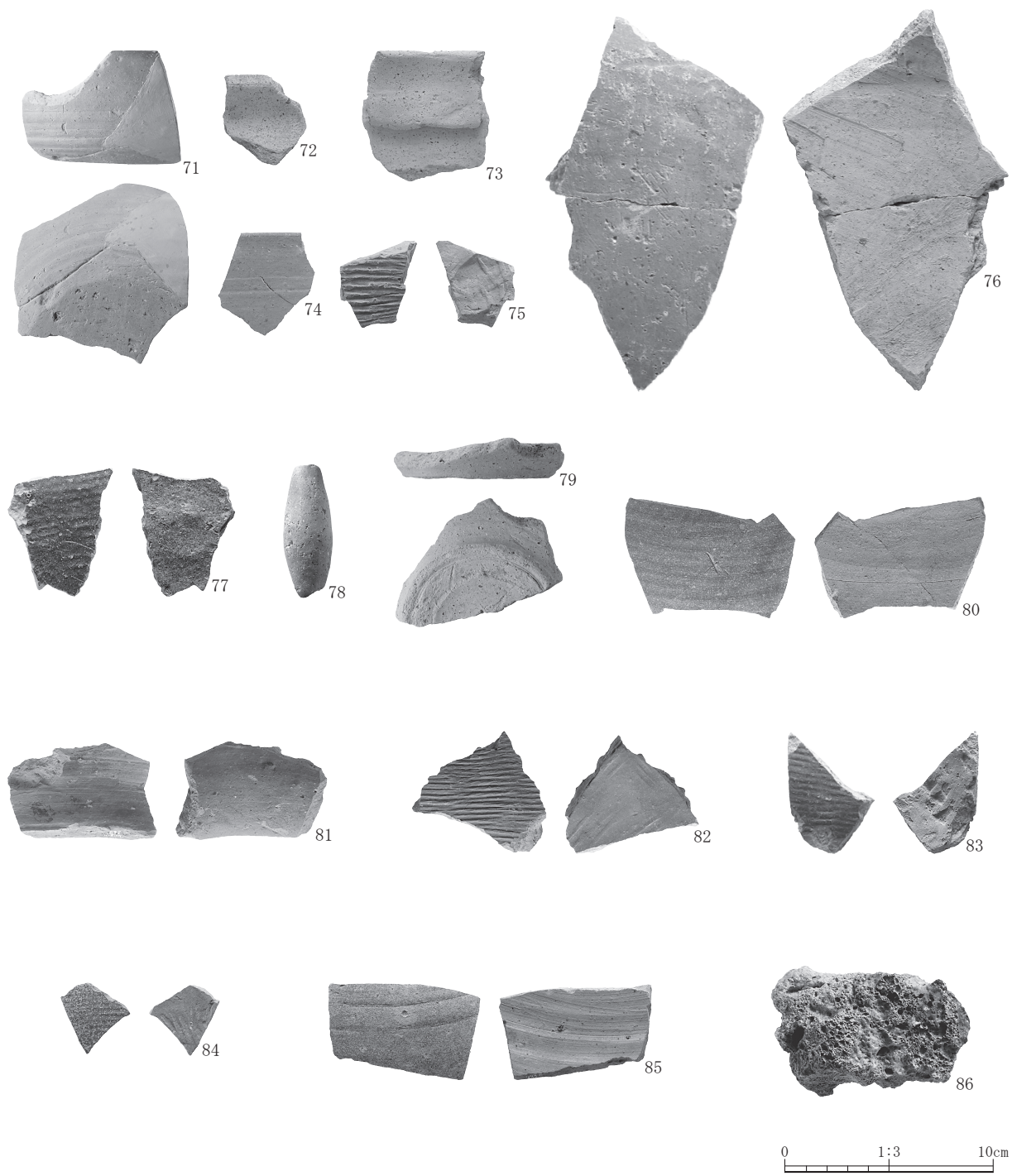
写真図版 8 出土遺物(2)



写真図版9 出土遺物(3)



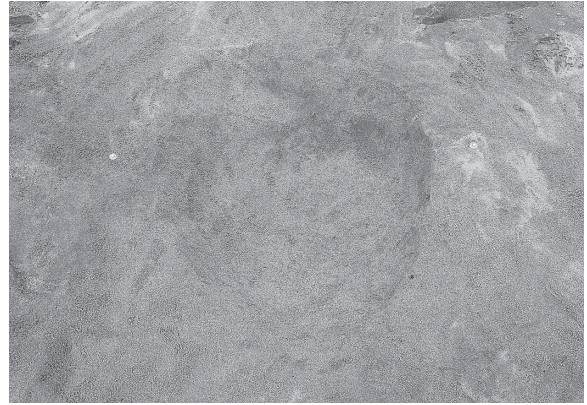
写真図版10 出土遺物(4)



写真図版11 出土遺物(5)



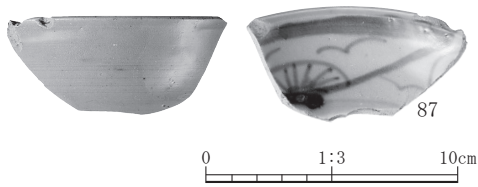
中神四日市遺跡 全景



S K01 完掘(S→)



S K01 断面(W→)



87

0 1:3 10cm

報告書抄録

ふりがな	このいせき・この2いせき・ながみよつかいちいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	小野遺跡・小野Ⅱ遺跡・中神四日市遺跡発掘調査報告書							
副書名	経営体育成基盤整備事業日形地区関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第617集							
編著者名	菅野 梢・小林弘卓・小山内 透							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019)638-9001							
発行年月日	2012年12月13日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
このいせき 小野遺跡	いわてけんいちのせきしほなげみちろう 岩手県一関市花泉町 ひかたあざこの 日形字小野46-1ほか	03209	0E39-1017	38度 49分 50秒	141度 15分 00秒	2011.04.18 ～ 2011.06.10	1,880㎡	経営体育成基盤整備 事業日形地区関連発 掘調査
この2いせき 小野Ⅱ遺跡	いわてけんいちのせきしほなげみちろう 岩手県一関市花泉町 ひかたあざきょうわ 日形字共和37-1ほか	03209	0E39-0081	38度 49分 40秒	141度 14分 50秒	2011.04.18 ～ 2011.05.19	104㎡	経営体育成基盤整備 事業日形地区関連発 掘調査
ながみよつかいち 中神四日市遺跡	いわてけんいちのせきしほなげみちろう 岩手県一関市花泉町 ひかたあざながみ 日形字中神293	03209	0E29-2146	38度 50分 40秒	141度 15分 30秒	2011.04.18 ～ 2011.04.28	140㎡	経営体育成基盤整備 事業日形地区関連発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小野遺跡	集落跡	古代 時期不明	竪穴住居跡 竪穴状遺構 土坑	1棟 3棟 1基	土師器・須恵器・鉄滓・ 砥石・土錘			
小野Ⅱ遺跡	生産遺跡	平安時代	水田跡	2面	土師器・須恵器・炉壁・ 砥石			
中神四日市遺跡	散布地	時期不明	土坑 柱穴状土坑	1基 4個	陶磁器			
要 約								
小野遺跡	奈良時代末から平安時代初頭の集落遺跡。試掘成果では奈良時代前半の竪穴住居跡等や遺物も確認されている。鉄滓が出土していることから、鍛冶工房での鉄製品の生産や土錘の出土から近接する北上川での投網漁労を行っていたものと思われる。							
小野Ⅱ遺跡	今回の調査区は小野遺跡の立地する自然堤防の後背湿地にあたり、十和田a火山灰の降下の前後で水田跡が二面検出された。平面的には調査区が狭いこともあって畦畔や稲作の作業痕跡は確認できなかった。炉壁が出土していることから北側台地緩斜面には古代の集落及び鉄生産関連の遺構の存在が考えられる。							
中神四日市遺跡	遺構・遺物とも極めて少なく、調査区の地形から遺跡の南限位にあたると思われる。							

※緯度・経度は世界測地系により算出した数値である。なお、この座標値は2011年5月31日に国土交通省国土地理院が発表した改正成果を用いて算出したものである。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第617集
小野遺跡・小野Ⅱ遺跡・中神四日市遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業日形地区関連遺跡発掘調査

印刷 平成24年12月10日

発行 平成24年12月13日

編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019)638-9001

発行 岩手県県南広域振興局農政部一関農村整備センター
〒029-0803 岩手県一関市千厩町千厩字北方85-2
電話 (0191)52-4931

(公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019)654-2235

印刷 (有)小松茂印刷所
〒020-0025 岩手県盛岡市大沢川原二丁目5番37号
電話 (019)623-6073